

茨高将連20年のあゆみ



茨城県高等学校将棋連盟

茨城县高等学校
将棋連盟

二十一年力歩五

平成七年春

九段原田恭夫書





謙信公の闘志

良寛和尚の達観

平成七年書

九段原田泰夫書



原田泰夫九段は新潟県出身。加藤治郎九段門下。昭和36年日本将棋連盟会長。以後6期にわたり会長として日本将棋連盟の再建、後輩の育成に尽力する。昭和57年現役引退。同年藍綬褒賞を授賞。昭和59年故郷西蒲原郡分水町の名誉町民となる。NHKテレビ「NHK杯」戦の名解説者、書道の大家として知られている。現在「将棋世界」に「書とエッセー」を連載中。東京都杉並区在住。上掲色紙は茨城県高等学校将棋連盟のため揮毫されたもので「謙信公の闘志 良寛和尚の達観」。

目 次

あいさつ	1
記念随筆(日本将棋連盟元会長 原田泰夫)	3
元会長の回想	4
祝 辞	10
茨城県高等学校将棋連盟の発足まで	12
栄光の記録	15
20年の歴史	18
栄光の選手たち	65
激戦の回想	71
今後の課題と展望	79
茨城県高等学校将棋連盟規約	81
関東地区高等学校文化連盟将棋部会則	82
全国高等学校文化連盟将棋部会則	85
編集後記	88

【表紙写真】

暁闇を飛翔せんとする白鳥

フォト〈一閃の美〉

中村千尋(なかむらちひろ)氏撮影

フジフィルム ネイチャーフォトコンテスト 優秀賞

全日本写真連盟会員



「二十年の歩み」発刊によせて

茨城県高等学校将棋連盟会長

(太田第一高等学校長) 高梨保彦

「茨高将連20年の歩みは栄光の歴史と言うより苦難連続の歴史であった」。昭和50年11月の創設より退職されるまでの17年間本連盟と苦楽を共にされた天貝茂樹先生はこう述べられています。

私が結成後20年との声を聞き、膨大な関係資料を見せて頂いたのは昨年6月全国高校選手権茨城大会の折、水戸一高知道会館の和室でありました。すべてが完全な記録でなくとも、僅かばかり脱落があったとしてもこれを眠らせておくのは惜しい。結成前後の揺籃期と運営の曲折等も加えてこのあたりで一度振り返って見たい。そして貴重な資料の保存も図りたい。こんな気持が湧いて来たのでした。一言で20年と申しますが、それは文字どおり並大抵のことではなく、歴代会長さんを中心に数多くの先生方の支えがあって成り立って来たことを思えば小誌編纂は十分な価値をもつことであるとも考えられました。

幸いにして役員の方々の御同意を得て発刊に踏みきり、編集委員の先生方の最大の御努力と共にその完成をみましたことは誠に慶びに堪えないところでございます。

小誌が本連盟の拠り所となり、更に明日を目ざしての指針ともなり得ますことを心より願いたして居ります。

末尾ではありますが玉稿を賜りました先輩をはじめ関係の皆様方に感謝の念を捧げ、本誌発刊のため御協力を賜りました各位に深甚なる謝意を表する次第でございます。



あいさつ

茨城県高等学校文化連盟会長 小松 一郎

「茨城県高等学校将棋連盟20年の歩み」の発刊誠におめでとうございます。

20年の歴史を積み重ねて来られた関係者の皆様のご努力にまず敬意を表すと共に、心からお祝いを申し上げます。将棋と申しますと、私には僅かの知識しかありませんが、かつて若かりし頃、双壁升田幸三・大山康晴の両氏がその最高位を競っていたことを思い出し、今また、谷川・羽生の若々しい棋士が棋界の頂点を競っていることを考えますと、いつの時代にも、ことの隆盛の下には、必ず良きリーダーとそれを支える多くの愛好者の情熱と努力があるものとしみじみ実感いたします。

貴連盟は、県内高校教員の将棋同好の士が準備を進め、昭和50年設立発足いたしました。設立に当たっては、日本将棋連盟のご援助を得、特に、当時の加藤治郎八段・原田泰夫八段・山口千嶺六段等の強力なご支援が設立の大きな力となったと聞き及んでおります。また、名手の初代会長須田政明先生を初め歴代の会長を務められた先生方のご熱意とご労苦には、敬服申し上げますところであります。さらに、本県高校生の全国大会派遣にご尽力を賜った平石清一先生にご支援を戴いたことは、各高等学校で指導に当たられて来た先生方のご努力と共に、改めて本県高等学校の文化活動を推進するものとして深く感謝し、御礼を申し上げる次第です。

県内20校、約100名の選手諸君が登録し、日々研鑽し、競技に活躍しているとのことですが、これまでに全国大会個人優勝・団体優勝・準優勝等男女ともに輝かしい成績を取め、その実績は高く評価されているところです。

これからも、わが国の伝統的な文化の一つである将棋を継承発展させるべく次世代の若者の育成に、関係の皆様が一層ご精進下さいますことをお願い申し上げ、記念誌発刊のお祝いのことばといたします。



ⅢⅢ 茨城県高等学校将棋連盟 20年の歩み ⅢⅢ

《記念随筆》

将棋ファンは皆善人

原 田 泰 夫

茨城県の皆さんには随分お世話になり楽しい思い出が多い。石岡出身の故飯塚勘一郎八段から「私は話しができないから頼みます。水戸の将棋まつりに出席してください。二泊を予定して下さい」というお誘いを受けた。昭和25年か26年から10年間、8月の朝、上野から水戸まで、飯塚先生の明治、大正、昭和初期の棋界放談は、車中の時を忘れての笑いの連続であった。

将棋まつり会場は弘道館、好文亭、後に水戸駅近くの大きなホテル、閉会後の打ち上げは千波湖畔の湖楽であった。

矢口会長、人見幹事長、富岡世話人たちが、県下各地からの出席ファンをてきぱき捌かれた。特別後援は下館の関彰商店が大会ごとに多額を届けるとのことだった。

水戸から大洗へ。「金波楼」であったか、「磯ぶし」を一節55秒で唄いきるまで寝かせません。この藝者さんが手本を示します。もう一つ、全国で一番偉いのは茨城県人、明治維新を達成できたのは水戸のお蔭、徳川斉昭、藤田東湖など、このことを原田先生、全国各地に講演の時、壇上から必ず辯じて下さい」と言われたことも懐かしい。

愉快的義理がたい太っ腹な皆さんの顔が浮かんでくる。

日立製作所関係にも講演と特別指導に毎年出張。一泊し、心のこもるサービスをうけた。

全国高校将棋選手権大会は原田会長時代、昭和薬科大学の荻原理事長、草味学長の創設に大賛成、昭和40年10月17日、東京世田谷の昭和薬科大学全館開放、5名1組41校の選手を前に激励挨拶したことを思い出す。

将棋ファンは皆善人、幼少年には不良化防止、社会人には親睦強化、実年にはボケ防止。指す見る聴く、一人でも楽しめる将棋が世界的になる筈、日本文化の将棋が家庭に職場に学校に更に普及し隆盛になることを期待する。

歌ほがい・茨城県高等学校将棋連盟創設

元会長 須田 政明



慶祝（一首）

茨城県高校将棋連盟の
いさおし炳焉 ここふたしとせ

回想（十首）

想い出は 昨日のごとし かつて無き
茨・高・将棋連盟の 創設

こころよく 行事会場 お引き受ける
校長会館様 水戸第一高校様

創業の 難問あまた しかすがに
諸賢管々 見、事にクリアー

〔注〕校長会館（小・中・学校長會持設）
では、総会等も、水戸一高では、県下
高校将棋大会と、開催させてもらいま
した。

茨・高校 将棋連盟 運営に
助勢したまえる 本県の各界

亭々と 枝葉は繁り 定はたわわ
これぞ我々が 将棋連盟

茨・高校 将棋連盟 創設を
共に図りし 諸彦の想い出

名にし負う 各高校の 棋豪諸氏
一斉応援 謀しかりける

心から 感謝感激 高校界
あげて御後援 たまわりしこと

総会の その都度 御激励くだされし
日本将棋連盟様

当盟の 総会毎に 高名の
棋士様方を 御派遣たまわる

〔注〕研会式には、加藤治郎・山口千鶴の
両先生、次年度には、原田泰夫先生。
お蔭様で、両会とも大盛会となりました。
来会の皆様も大よろこびでした。



高将連の思い出

元会長 岩下金司

茨城県高等学校将棋連盟が誕生して早や二十年になったことを聞いて月日の経つのが早いのを今更のように感じた。

私が本連盟の会長をしていた時代は、今から17・8年前でしたから2代目の会長だったかと思う。記憶がさだかでない昔を思い出そうとしてもなかなか思い出せない。もともと将棋そのものが駒の歩き方だけしか知らない「ズブ」の素人会長であったからにもよる。

「何で素人が県将連の会長になったのか」と問われたこともなくすまして会長をつとめていたが、今回連盟の小冊子へ原稿を出すことで始めにそのあたりのことを明かしておく。

私の勤務校が真壁農業高等学校であった。同校に将棋名人の天貝茂樹先生が数学科の教諭としていっしょに勤めていた。天貝先生は雅号を「筑波天狗」と称して新聞や月刊誌などに先生の観戦した大試合の棋譜解説を執筆投稿するといった方であった。その天貝先生が茨高将連の副会長をつとめてくれて、会の庶務・運営の一切はもとより、生徒の実技指導にそれはそれは行きとどいていた。私はそんなベテラン先生が居ってくれたのでただ名ばかりの会長であっても勤まったというわけである。

高将連の大会は夏休みの1日、水戸市内の銀行の二階を借りてやった。連盟加盟校から精鋭選手が出場して対局し熱戦を展開したのを傍から観戦し生徒の棋力に感銘し、会長の私は生徒から逆に教えられる思いであった。

高将連を活発な活動へ仕向けるのが会長の仕事であることは片時も忘れなかった。どうしたら生徒に誇りを持たせることができるか天貝副会長とも相談した。新聞に県大会の模様を写真入りで出してもらおうようにしようと二人して茨城新聞社に話し込んで新聞社の快諾を得実現した大きい思い出がある。

次の年には県大会の模様を茨城新聞に載せてもらったばかりでなく、決勝戦の棋譜を選手名入りで連載までしてもらうこともできたから選手らの励みは倍加し、自ずと高将連が活発になったと今でも信じ切っている。

茨高将連を語るとき、元会長の私などは力のない会長であったが、天貝茂樹先生の力の大きかったことだけは決して忘れてはならない。

茨高将連が発足20年。成人式の年齢となってますますその実力を内外に示し、大きく成長されるよう願ってやまない。

(現在七会村村長)



回 想

元会長 雨宮 和孝

将棋連盟が創立20周年を迎えられましたことを心よりお喜び申し上げます。

編集子より回想をという依頼文を頂き実の所「はて」という感じがしたのが正直の所です。

私が会長になりましたのは、筑波高校に赴任しました昭和59年のことであります。

それまでは、将棋連盟の存在すら全く知らずにいた私でしたが、たまたま学校に天貝茂樹先生が在職されており、先生が連盟の役員であった関係上会長をという話がでて会長を引き受ける結果になった次第です。その時に駒の動かし方も十分でない素人なので何もできないよということを予め申しておきましたが、会長としての2年間は全くこの通りでして連盟の運営等は、すべて役員の方におまかせでありました。この点当時の役員の方々は大変お世話になり申し訳なく思っております。当時のこととして、全国大会の予選は水城高校の教室で行なわれましたが、丁度同じ頃夏の高校野球の県予選がその真最中でありました。どちらも高校生が持てる力を集中して栄冠を目指しているものとしては、マスコミの扱いを含めどうも差がありますぎると感じ何んとかもう少し冷房もきかない部屋で汗もいとわず努力している姿に光をあててやりたいものだとの気持になったものです。

連盟にとって20周年は一つの節目といえますが、これを期に次へ向って大きく飛躍されることを希望して筆を置きます。

20周年を機に

元会長 園 部 公 一

まずもって創立20周年をむかえられるまでの関係各位のご努力にこころから敬意を表し合せておめでとうを申し上げたいと思います。

わたくしが会長をつとめたのはほぼ10年前、それもほんの1年にすぎず、正直このたび執筆のご依頼がなければ記憶の底にしずんで滅多に思いだすこともなかったことであります。多分、それは不調法で碁・将棋のたぐいをたしなまないゆえです。

しかし、いま、とある夏、某高校で熱心に対局していた高校生たちの横顔があざやかによみがえりました。そのときふっと脳裏をよぎった思いは、ともするとはなやかなコートや球場で活躍する選手たちにだけ目をうばわれがちだが、ここにも無言で火花をちらす高校生がいる、ということでした。現在の高校教育にもっとも不足しているのは、あるいはかかる真剣さ——それはとうぜん充実感・成就感につながるものである——ではないだろうか、という思いもいただきました。

20周年を機に、より多くの高校生たちがそうしたかけがえのない体験を味わえるよう、各位のさらなるご努力を期待してお祝辞にかえたいと思います。

(友部町在住)



会長時代の思い出

元会長 鈴木 健

前任校では、当番校だからということで、全くの門外漢にもかかわらず、県高等学校家庭クラブ連盟の会長にさせられた。転勤してみると、これまた、将棋の駒に触ったこともないのに、事務局校だからということで、県高等学校将棋連盟の会長にさせられていた。問答無用である。

立場上、自分で指せなくても見てわかるぐらいにならなくてはと、ルールだけはなんとか覚えたが、いざ、県大会となると、観戦していても、さっぱりわからない。そこで、盤面を見るのはあきらめ、対局者の真剣なまなざしや、微妙に変わる表情や、特に指の動きなどを、かわるがわる眺めることにした。

高校生のスポーツや競技にはさまざまな形がある。プレイヤーの個性が、監督のあざやかな駆け引きや采配のかげにかくれがちなものもあれば、チームワークによって、各自がその得意技を発揮しながら試合を進めるものもある。しかし、わが棋士たちには、次の一手を指示してくれる監督もいなければ、フォローしてくれる仲間もない。応援もない。完全に自由であり、かつ孤独だ。自分の行動に対する一切の権限と責任は自分にある。

全神経を集中して、全体を眺め、先を読む。弱気になるとチャンスを見のがすぞ。有頂天になると落し穴に気づかないぞ。自分をいましめ、はげましながら、一手一手、駒を進める。自主性、自律心、集中力、大局観、先見力、決断力。正科の授業からはなかなか得られない大切な資質が、楽しみながら自然に身に着いていく。駒を動かす彼らの指先に私が魅せられたのは、そこに、これらのすべてが凝縮されていたからであろうか。

バシッと決める最後の一手。その時の勝者の喜びの顔はもちろん、敗者の残念顔も印象に残る。次には必ず勝つ、たのもし顔だ。今まで知る由もなかった貴重な教育の世界がそこに静かに広がっていた。

忘れられない人のなかに、筑波高校の天貝先生がいた。筑波山の麓に居をかまえ、あて名に天貝を天具と書く奴がいるからと、その天具を天狗に書きかえて自らを筑波天狗と称していた。在任中、将棋ができなくて肩身の狭い思いをしたが、なんとかそれをカバーしてくれたのが天貝先生であった。お世話になった幕内先生や嶋崎先生たちには時折りお目にかかるが、天狗先生にはその後お会いしていない。退職後も悠々自適、相変わらず坊主頭をなで、天狗鼻をさすりながら棋盤をにらんでいるのであろうか。あとにもさきにも、私と将棋との出会いは、その二年だけ、今となっては、人生の貴重な一駒としてなつかしく思い出されるのみである。



回想と期待

前会長 栗山 作次郎
(前石岡第一高等学校長)

全くの素人で引き受けた高等学校将棋連盟会長でしたので、試合は勿論運営面でも、副会長の嶋崎先生をはじめ役員の方々に随分ご迷惑をお掛け致しました。竜王戦や県大会そして冷たい風が強く吹いた石岡一高での関東大会など必ずしも条件の良いときでもいつも誰かが中心になって無事に進めてくれました。就任二年目に開催担当をした関東大会では前年度2月上旬から準備に入り、4月下旬に年度当初の役員会、5月に全国大会の役員会、6月に全国大会の県予選、7月に竜王戦、8月には広島での全国大会、8月末に役員会、10月上旬に関東大会理事会、続いて県役員会、11月下旬関東大会県予選、12月に関東大会本番とほぼ月一回の役員会を開き、その間広報のために新聞社との連絡、また少々の運営費捻出のための寄付を貰う工夫を話し合ったりしたことなど幾つか思い出されます。広島など二度に亘って全国大会を県連盟会長として視察させてもらったことから、視野が広まり、その後の教育活動に大いに利用させてもらいました。

全国大会に女子の姿が見えたのに、茨城からの参加者がなかったことは地域性からか少々寂しい思いをしました。会場にはプロの棋士等も姿をみせ高校生との指導対局があり、みな熱心に対局をしていました。学生諸君の真剣な参加態度を見ていますと、この時期でなければ出来ない、いわゆる青春時代の部活動といった感じでした。

高校入学後生活スタイルの確立がなされていない時に個々に応じた指導をといても実際には難しいことです。生活のリズムの乱れが成績に影響を及ぼし、学校生活全体の充実感をなくすこともあるので、そんなときにクラブ活動など教科外の時間を有効に使うことは大事な事です。手前味噌的なことですが、学習以外の高校生活の中で、(将棋に限ったことではありませんが、)盤面に向かって一時間以上も精神を集中出来るということは素晴らしいことです。生徒の学校生活における充実感や満足度を高め、生徒の心の安らぎの場が確保されるのではないかと思います。個性重視の教育の方向の中で、教師が学習支援者になるキッカケだと思います。

今後益々発展しますことを期待致します。

祝 辞

日本将棋連盟茨城県支部連合会会長 平 石 晴 一

茨城県高等学校将棋連盟設立二十周年お目出度うございます。幾多の困難の中見事に発展され、日本古来からの将棋文化に多大なるご貢献を賜りました。「二十年の歩み」の発行にあたり、茨城県将棋界を代表して深甚なる敬意を表しますとともに、お祝いを申し上げます次第であります。

近年将棋の発展と進歩は著しいものがありますが、精神の鍛練・思考力の養成・人格を形成するものとして、教育の場にも必須と自負しております。特に現代社会に欠ける創造力の醸成に寄与出来るものと期待しております。

全国高校選手権大会につきましては、実に30回を経て一層充実しているのはご同慶の次第であります。その「神代」の時代にいささかでも関与出来た一個人として感無量なものがございます。

本県においては第1回から第7回までは県予選会の制度が無く、当時土浦一高の天貝茂樹・安東輝喬両先生の自費引率によって、有志の選手が本県代表として全国大会に出場していたようであります。

第8回に至り日本将棋連盟と共同通信社は全都道府県ごと予選会を完全実施し、それぞれの代表を選出することに進展しました。その予選会は共同通信社系列の各地方新聞社が開催するものとし、本県においては当然茨城新聞社が該当し交渉がなされました。結果は経済的理由等で残念ながら不調となりました。

当時は将棋の不遇時代で一般参加のアマ名人戦も開催して頂けない時でもありました。困窮した日本将棋連盟は次善の策として、県下で有力支部であった茨城県南支部の小生宅を訪れ、高校選手権県予選開催について懇願されました。前年度からアマ名人戦の実績はありましたが、学校との関係は皆無であり、経済的赤字が予測され難題でありました。しかしながら青少年将棋の重要性を認識し、本県の閉鎖性の回避のためにも引受けざるを得ませんでした。大新聞社が不可能なことを、一介の安サラリーマンが引受けたことは、若さとは申しながら男っ気もあったものだと懐旧しております。ここに初めて全国高校選手権大会の茨城県予選会は開始されたのであります。

前述の天貝・安東先生に支部会員の人的協力を頂き、新装になった土浦・石岡地方社会教育センターの会場提供も得られて、第8回から第11回まで4年間本県予選を開催し本県

の面目を全うすることが出来ました。その頃から50名以上が参加し今日隆盛の前潮はあったようです。いよいよ軌道に乗り将来的に自信を持ったのも当然でありました。

昭和50年6月、貴高校将棋連盟設立をするための準備会が水戸三高に於いて開かれ小生も招かれました。

前述のとおり貴高校将棋連盟と私共日本将棋連盟支部は緊密な関係が存在するのであります。ささやかながら日本将棋連盟茨城県支部連合会からの補助金が継続されていたのは前述の事情からと、高校選手権県予選会産みの親の責任感からでもあります。

平成5年に第一主催権者たる茨城新聞社では新たに事業局が増設され、将棋全般について正常化されつつありますこととはご同慶の至りであります。

最近、チェスの世界チャンピオンが、コンピュータに一敗一分で敗れたニュースがありました。日本の将棋だけは永久に不敗と思考します。日本将棋は、奥行と深さで他の追従を許さないからです。将棋は礼儀としても貴重ですが、生きた教材として教育に活かして頂きたいと願望するものであります。

茨城県高等学校将棋連盟の益々の御発展と御活躍を祈念し御祝いの言葉と致します。

茨城県高等学校将棋連盟の発足まで

栄光の記録

20年の歴史

茨城県高校将棋連盟の発足まで

初めて将棋を学校教育にとり入れたのは昭和薬科大学であり、荻原光太郎学長の発案で一般教養三科目（将棋、囲碁、華道）の中から一科目必修選択として設置された。同大学では、将棋を一般教養の正規科目に取り入れただけでなく、全国の高校生のための全国高校将棋選手権大会を日本将棋連盟と共催で開催し、青少年の間に将棋を広め、高い知性と人格を培っていった。

昭和40年夏、第一回全国高校将棋選手権大会が昭和薬科大学を会場にして開催された。地区予選がなく直接全国大会であったため参加選手の数は膨大で、講堂、体育館では収まらず、校内の使用できる施設をいろいろ利用して行った。日本将棋連盟からプロ棋士が多数駆けつけて進行審判に当たり、また敗退者との指導対局などが行われ、日本全国に将棋を普及させようとする熱気のみながっていた。本県の第一回出場者は土浦第一高等学校2年の黒岩康君を中心に団体戦（当時は1チーム5名）に参加した。生徒引率は安東輝喬先生であった。その後、将棋に相当な費用を支出していた昭和薬科大学は主催をつづけられなくなり、全国高校将棋選手権大会は共同通信社と日本将棋連盟の共催で開かれるようになり、昭和薬科大学は会場を提供する形となった。

参加者数が伸びない女子に比べ、男子は年々増加して地区予選を実施して、団体、個人共に、地区代表が全国大会に参加する県が増えてきた。大会が、将棋を普及、発展させる宣伝になるものとして奉仕的な努力をしてきた日本将棋連盟が、参加費、宿泊費を徴収するようになった。また、日本将棋連盟から本県支部に地区予選の選抜を依頼してきた。この雲をつかむような難解な仕事を茨城県南部が引き受け当時の県南の中心的指導者であった平石暗一氏が中心になり茨城県地区予選を開催した。土浦石岡地方社教センターで行われた。同氏には本県高校将棋会の発展に多大な協力をいただきそれは現在も続いている。

当時将棋に対する見方は学校内では「禁じられた遊び」で認められておらず、大会参加も出張扱いにならない状況であった。生徒の費用はすべて自己負担であり、高校の将棋界の冬の時代であった。本県高校将棋会に雪解けが訪れたのは小、中、高の各学校に授業時間内必修クラブが文部省の指示で設置され、高校の半数位の学校（70校位）で将棋クラブができ、教育での将棋の効果が見直されてからである。また指導教諭の適切な指導や、授業時間内だけの活動で満足せず対外試合に出場したい等の希望が重なり、同好会や将棋部に昇格するケースが多くなった。この必修クラブは県の高校将棋界にとって雪解けの暖かい風になった。その後、茨城県高校将棋連盟創設の気運が高まり、昭和50年6月真壁農業高校教諭天貝茂樹先生が中心になり、さらに当時の水戸第三高等学校校長須田政明先生が茨城県高校将棋連盟結成準備委員会発起人となり、県の各学校に呼びかけが行われた。準備委員会は水戸第三高等学校を会場に何度も開かれ、綿密に精力的に進められた。

そしてついに昭和50年11月23日茨城県高校将棋連盟が発足した。場所は水戸市の茨城県校長会館で、20名ほどの出席者のもとに行われた。「高校教育の一環として知的スポーツといわれる将棋を通じ知能人格の育成をはかり、将棋の普及、技術の向上をめざす」という目標のもと結成された。

日本将棋連盟の加藤治郎九段の記念講演があった。出席者は日本将棋連盟から加藤治郎・山口千

嶺の両氏、県内高

禎紀・植田泰史・向田 稔・桜井操の各先生、日本将棋連盟県支部役員の平石階一氏、その他中学校の先生方であった。

役員は、会長・須田政明（水戸三高校長）、副会長・宮田謙次（常北高校）先生にお願いし、事務連絡 天貝茂樹先生が行うこととし、細かい役職規約は後日決定することとした。

昭和50年の時点で、県単位で高校将棋連盟を創設した県はそう多くはなかった。しかしながら、高まる気持ちに比例することなく資金不足で満足できる活動状況とはいえなかった。

昭和50(1975)年茨城県高等学校将棋連盟の設立

茨城県高等学校将棋連盟の発会式は、昭和50年11月23日の勤労感謝の日に、水戸市柵町の茨城県校長会館で行われた。茨城県高等学校将棋連盟の発起人となってこの日の会合を準備したのは、当時水戸第三高等学校校長であった須田政明先生（現在水戸市在住）、当時真壁農業高校教諭であった天貝茂樹先生（現在筑波町在住）や常北高校教諭の宮田謙次先生（故人）など、自らも茨城県のアマチュア将棋界を代表する高段者で、将棋を通して生徒の人格の陶冶を目指そうとした人々であった。とりわけ、天貝茂樹氏は、発起人の代表的存在で、連盟設立前後の事務的仕事を一手に引き受け、本連盟発足の牽引者となった。

天貝茂樹先生は往事を次のように回想している。

「…本県は情操教育や文化面において昭和40年代は発展途上県であって、高校の将棋界も厳しい冬の雪に閉ざされたような時代であった。本県高校将棋界に雪解けが訪れたのは、昭和40年代も終末に近い昭和48年、小・中・高の各学校に必修クラブが文部省の指示で設置されてからである。…クラブを設置して3年位経過した時の県下の公私立高校のクラブ数の調査で、将棋または囲碁クラブを設置した高校数は県下全体の半数近い70校位はあった調査結果が配布されたのを見た記憶がある。…設置校の数では（将棋クラブが）第一に多く、…2位との差はかなりあったと思う。

各学校での（将棋クラブなどの指導上の）悩みを解決し、更に進んで日本の文化としての将棋を理解し、一人でも多くの生徒に将棋の楽しさを知って貰うとともに、知能・人格の育成を目指して茨城県高校将棋連盟の構想が多くの高校の将棋クラブ担当の先生方の心に、自然発生的に芽生えても不思議ではない。

茨城県高校将棋連盟の新設は何人かの先生の心にあったことではあるが、なかなか実行に踏み切れなかった。…将棋は生徒には人気があったが、教員の間では囲碁の方が盛んだったと思う。高校囲碁連盟創設の噂を小生が耳にしたのは昭和50年の夏である。囲碁連盟は作る人はいても、将棋連盟を創設する同志は近辺にいなかった。…柄ではないことは自覚していたが、茨城県高校将棋連盟創立に着手した。」

必修クラブの実施による将棋熱の高揚をうけ、また茨城県囲碁連盟の発足に刺激をされる形で、高校将棋連盟の設立が進行したのである。会長に推された須田政明先生は、学生時代からの熱烈な将棋ファンであり、自他ともに認めるアマチュアの強豪で、校長としての最初の赴任校・常北高校で

知合い、気心の知れていた教員の宮田謙次先生の依頼などがあって、初代会長の労職を引き受けたものと思われる。

自らの力量・技量を高めるとともに、知的スポーツといわれる将棋を通じて、高校生の知的・人格的成長をはかるとい趣旨に多くの賛同者が現れた。連盟の発会式は、授業のある日避けて休日に行われたにもかかわらず、20人ほどの熱心な教員が発会式に参加した。

当日は、来賓として日本将棋連盟から加藤治郎八段（当時。現九段、日本将棋連盟名誉会長）、山口千嶺六段（当時。現七段）が参席した。加藤治郎八段は、当時は現役の八段の棋士として活躍中で、NHKの名解説者として、あるいは将棋の古典的名著とされる「将棋は歩から」の著者としても高名であった。山口千嶺六段は、水戸在住の唯一のプロ棋士として、茨城県内に数多くのファンを持っていた。

役員では、会長に茨城県立水戸第三高等学校長須田政明先生、副会長に茨城県立常北高校教諭宮田謙次先生、事務局担当の副会長に茨城県立真壁農業高校教諭天貝茂樹先生などが選出され、会則が決定された。発会式のあと、加藤治郎八段の記念講演があり、その後、加藤八段と山口千嶺六段の指導対局（三面指し）があり、午後5時の閉館時間を過ぎるまで熱戦が展開され、対局者の何人かは大駒落ちではあったが、現役プロ棋士を破り、茨城県高校将棋連盟のレベルの高さを示した。



近年は女子選手の参加も見られるようになった（平成7年）

《 栄光の記録 》

全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表

回	年 度	団 体 戦		個 人 戦	
		優 勝	準優勝	優 勝	準 優 勝
12	昭和51	水戸第一高	日立第一高	小川 明久 (土浦第一)	寒河江和男 (大子第一)
13	52	土浦第一高	水戸第一高	鈴木 裕行 (古河第三)	小林 誠 (下館第一)
14	53	土浦第一高	古河第三高	藤崎 正輝 (茨 城)	深谷 哲郎 (緑 岡)
15	54	日立商業高	竜ヶ崎第一高	田上 和久 (土浦第一)	小林 誠 (下館第一)
16	55	竜ヶ崎第一高	日立商業高	鬼沢 昌一 (水 城)	西野 和志 (日立商業)
17	56	竜ヶ崎第一高	日立第一高	石川歩 (江戸川学園取手)	久米 主税 (日立第一)
18	57	緑 岡 高	土浦第一高	石塚 努 (竜ヶ崎一)	岡野 夏樹 (土浦第一)
19	58	竜ヶ崎第一高	日立第一高	田口 拓也 (水戸桜牧)	石川 一茂 (土浦第一)
20	59	土浦第一高	緑 岡 高	田口 拓也 (水戸桜牧)	栗林 聡 (竜ヶ崎一)
21	60	緑 岡 高	土浦第一高	田口 拓也 (水戸桜牧)	福島 諭 (古河第三)
22	61	土浦日大高	竜ヶ崎第一高	中根 一男 (常総学院)	石塚 晃彦 (土浦日大)
23	62	土浦日大高	水戸第一高	勝山 良平 (水戸第一)	小島 雅志 (古河第三)
24	63	水戸第一高	水戸桜ノ牧高	小関 靖治 (境)	大関 稔 (水戸桜牧)
25	平成1	水戸第一高	水 城 高	菅原 伸也 (緑 岡)	小机 弘泰 (竜ヶ崎一)
26	2	土浦日大高	水 城 高	篠田 哲也 (土浦第一)	井上 耕史 (古河第三)
27	3	水戸第一高	土浦日大高	江面 祐一 (北海道一)	和知久仁彦 (緑 岡)
28	4	太田第一高	霞ヶ浦高	清水 俊宏 (茨 城)	五反田 洋 (多 賀)
29	5	太田第一高	水戸第一高	清水 俊宏 (茨 城)	五反田 洋 (多 賀)
30	6	太田第一高	茨 城 高	五反田 洋 (多 賀)	磯貝 真一 (茨 城)

7.女子	太田第一高	石岡第一高		
------	-------	-------	--	--

全国高等学校将棋竜王戦大会茨城県代表栄光の記録

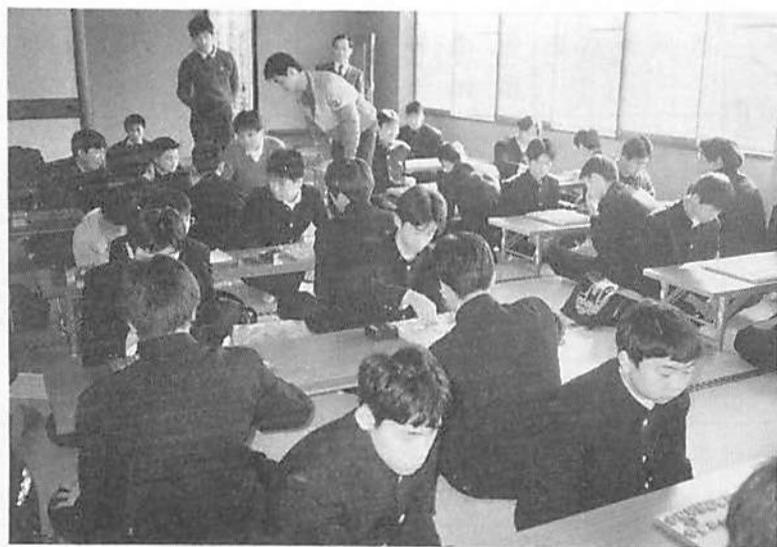
回	年度	優勝	準優勝	回	年度	優勝	準優勝
1	昭和63	勝山良平 (水戸一高)	菊川崇一 (水戸一高)	5	平成4	徳永吉宏 (水戸一高)	清水俊宏 (茨城高)
2	平成1	菊川崇一 (水戸一高)	松本亮太 (常総学院高)	6	5	清水俊宏 (茨城高)	五反田洋 (多賀高)
3	2	井上耕史 (古河三高)	篠田哲也 (土浦一高)	7	6	五反田洋 (多賀高) <small>(全国大会3位)</small>	原田慎一 (太田一高)
4	3	徳永吉宏 (水戸一高)	和知久仁彦 (緑岡高)	8	7		

関東大会茨城県代表記録

平成2年度 第1回大会	茨城県代表	高村美臣(土浦日大高)・門長英一(古河三高) 原健一(水戸一高)・桜田進介(水戸一高)
	関東大会成績	第3位 桜田進介(水戸一高)
平成3年度 第2回大会	茨城県代表	菊池達也(太田一高)・菊池貴光(太田一高) 和知久仁彦(緑岡高)・石川暁(土浦日大高)
	関東大会成績	第3位 菊池貴光(太田一高) 県別対抗戦優勝
平成4年度 第3回大会	茨城県代表	清水俊宏(茨城高)・徳永吉宏(水戸一高) 佐藤丈晴(霞ヶ浦高)・益子亘(水戸一高)
	関東大会成績	第2位 佐藤丈晴(霞ヶ浦高) 県別対抗戦優勝
平成5年度 第4回大会	茨城県代表	五反田洋(多賀高)・丸山裕人(日立一高) 原田慎一(太田一高)・出原洋平(日立一高)
平成6年度 第5回大会	茨城県代表	磯貝真一(茨城高)・沢谷悠至(土浦日大高) 原田慎一(太田一)・中島啓(境高)

全国高等学校文化連盟将棋大会 茨城県代表

平成4年度 第1回大会	茨城県代表 清水 俊宏(茨城高) (全国大会 3位)
平成5年度 第2回大会	茨城県代表 五反田 洋(茨城高) 丸山 裕人(日立一)
平成6年度 第3回大会	茨城県代表 男子 磯貝 真一(茨城高) 沢谷 悠至(土浦日大高) ♀ 女子 諸藤沙矢加(太田一) 大森 明子(日立商高) 中山 康子(太田一) 砂道 香織(竜ヶ崎一高)



「B.C級戦(平成6年)」

《20年の歴史》

昭和51年（1976年）高将連設立二年目

第12回全国高等学校将棋選手権茨城県代表決定戦

前年、昭和50年11月23日、勤労感謝の日に発足した当連盟の仕事の内容は、大きく三つある。一つは将棋を教育の中で奨励、指導すること。これには将棋部、同好会あるいは必修クラブの指導といった将棋を文化活動の一つとして育成指導することを含む。二つは、それらの指導の中で対外試合を組織すること。三つめは、全体を通して、指導する教師や指導者を育成することである。もちろん、その他にも、将棋の指導全般については日本将棋連盟との関係を密にしたり、教育行政のなかにある教育そのものに、将棋を位置づけるということも含まれている。

このなかで、本年度で特記すべきことは、第12回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦を企画、運営したことであった。

それまで、上記大会は、全国大会としては11回の大会を開催するビックイベントだったが、県として受け皿がなく、日本将棋連盟からの県代表選手派遣の依頼にはアマチュア組織の茨城県南支部がボランティア的好意で引き受けていたのであった。

将棋連盟の県南支部は、その大会を土浦石岡地方社教センターなどで開催していたのであったが、当連盟の設立によって、高校教師の手で企画・運営されるようになったということで、それは正に画期的なものであった。

連盟にとっての最初の大会、第12回同選手権大会茨城県代表決定戦は、水戸一高で開催された。全国大会が八月の初旬ということ、また、進学中心の学校では、大学入試に無関係のものは好ましくないという雰囲気もあって、将棋がむしろ禁じられた遊びという風潮もあって、七月の下旬夏休みに入って開催された。

団体戦	優 勝	水戸一高
	準優勝	日立一高
個人戦	優 勝	小川明久（土浦一高）
	準優勝	寒河江和男（大子一高）

こうして、当連盟の一つの大きなイベントは成功した。

しかし、大会運営に反省すべきことが一つあった。生徒の大会を組織し、代表選手を選んだものの、その記録を残さなかったことである。団体戦、個人戦のトーナメント表、そして、重要な試合の棋譜の記録である。

これらは次年度に教訓として、生かされるようになった。

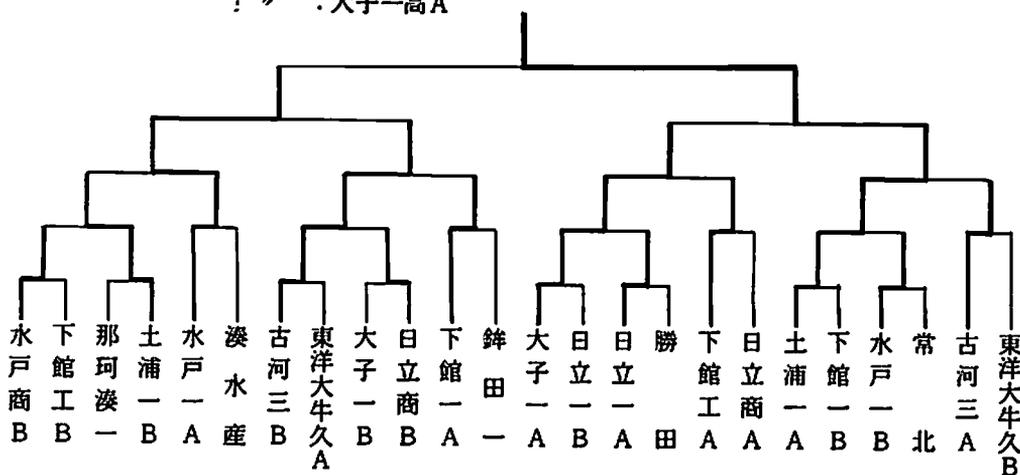
〔昭和 52（1977）年度〕

第13回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第13回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦は、7月26日、水戸市の水戸信用金庫駅前支店ホールで開かれた。県下の公私立高校、24チーム、百人を超える高校生棋士たちが参加した。個人戦では古河三高の鈴木裕行君が優勝、団体戦では土浦一高Aチームが優勝した。優勝した鈴木君と土浦一高Aチームは、8月19、20の両日、昭和薬科大諏訪校舎（長野県茅野市白樺湖畔）で行われた全国大会に出場した。

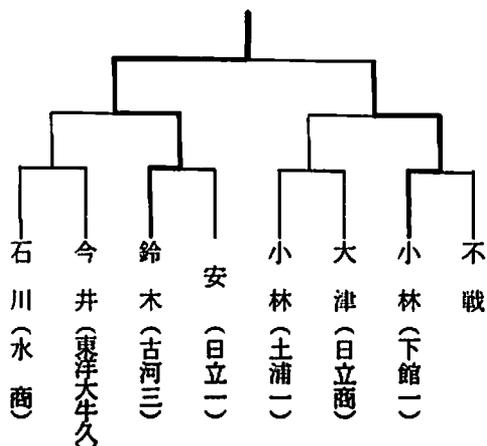
（団体戦）

- 優 勝：土浦一高A
- 準優勝：水戸一高A
- 第3位：古河三高B
- ：◇：大子一高A



（個人戦）

- 優 勝：鈴木裕行
- 準優勝：小林 誠



〔昭和 53（1978）年度〕

第14回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第14回大会は、昭和53年7月26日に水戸市の水戸信用金庫駅前支店二階ホールで開かれた。今大会では、県下の公私立高校から16校、23チーム、96人の高校生が個人、団体戦で熱戦を展開した。

団体戦では、土浦一高A（小川明久・大岡 誠・袴塚 潔君）が古河三高Aを2対1で下し、二連覇。また、個人戦では茨城高の藤崎正輝君が緑岡高の深谷哲郎君を破って優勝。それぞれ、8月18、19の両日、東京都新宿区百人町海洋会館で開かれる全国大会に県代表として出場することになった。

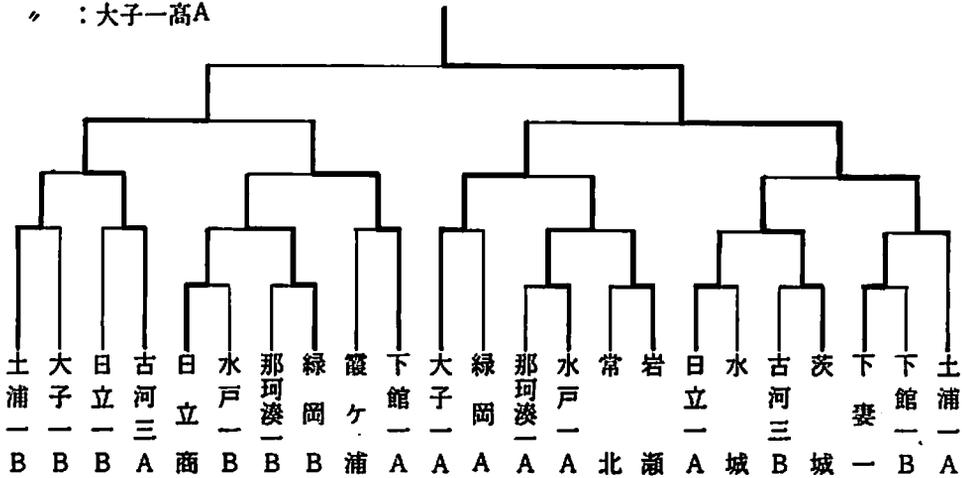
（団体戦）

優 勝：土浦一高A

準優勝：古河三高A

第3位：下館一高A

◇：大子一高A

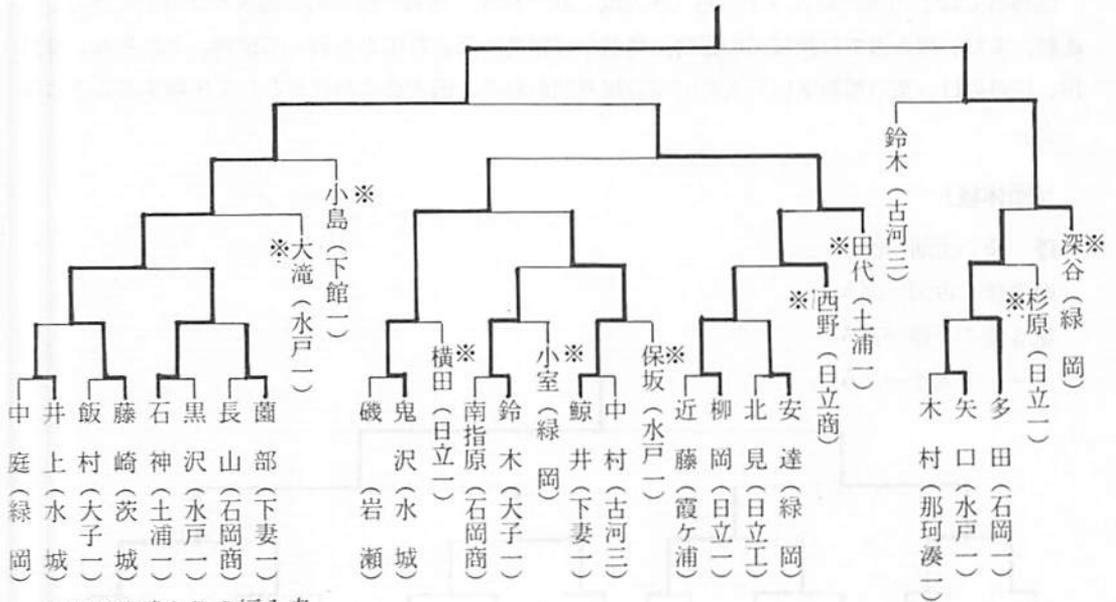


(個人戦)

優勝：藤崎正輝 (茨城高)

準優勝：深谷哲郎 (緑岡高)

第3位：鈴木 (古河三高)



※は団体戦よりの編入者

＜茨城新聞 昭和53年 7月27日＞

全国高校将棋県大会
盤上の熱戦、土浦一V2
個人戦は藤崎君

対戦相手	結果
土浦一	○
下妻	○
水戸	○
日立	○
日立商	○
日立工	○
日立二	○
日立三	○
日立四	○
日立五	○
日立六	○
日立七	○
日立八	○
日立九	○
日立十	○
日立十一	○
日立十二	○
日立十三	○
日立十四	○
日立十五	○
日立十六	○
日立十七	○
日立十八	○
日立十九	○
日立二十	○

〔昭和 54（1979）年度〕

《昭和54年度茨城県高等学校将棋連盟役員》

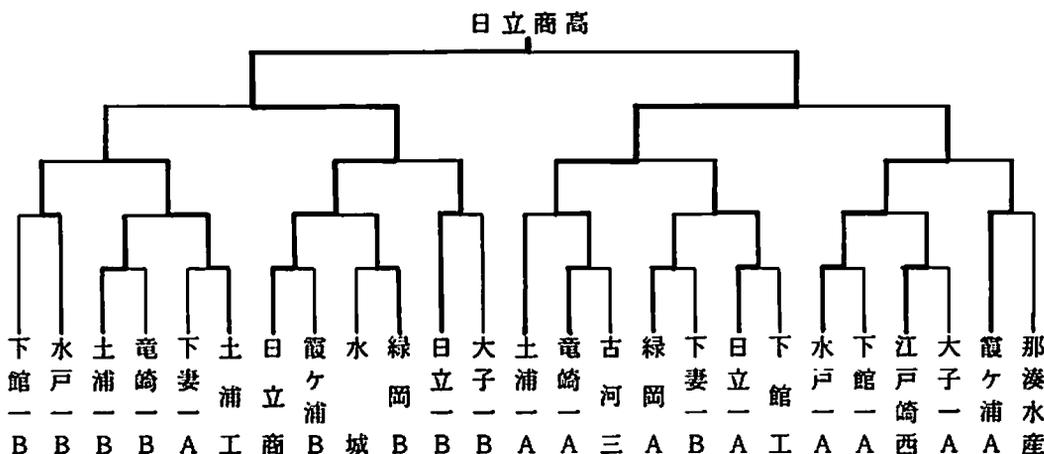
会 長 岩 下 金 司 (真壁農高)	監 査 桜 井 操 (水戸一高)
副会長 天 貝 茂 樹 (同 上)	同 小 林 爽 (土浦二高)
同 株 木 実 (土浦一高)	幹 事 斎 藤 寿 (結城二高)
書 記 神 原 正 雄 (下館二高)	同 栃 木 昌 夫 (総和工高)
同 仲 田 憲 司 (大子一高)	同 向 田 稔 (下館一高)
会 計 横 倉 昭 三 郎 (那珂水産)	同 久 下 沼 光 始 (太田一高)
同 嶋 崎 収 功 (日立商高)	

第15回全国高校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第15回大会は、昭和54年7月24日に土浦市文京町の土浦石岡地方社会教育センターで開かれた。年々参加校が増える同大会には、今回19校25チームが団体戦に出場、約百人の“棋士”たちが全国大会への出場権をかけて争った。結局、団体戦では二年生チームの日立商業高校（西野和志・杉本英樹・久須見泰正君）、個人戦では土浦一高の田上和久君がそれぞれ優勝。8月16、17の両日、東京都新宿区の東京海洋会館で行われる全国大会へ出場することになった。

（団体戦）

- 優 勝：日立商業高
- 準優勝：竜ヶ崎一高A
- 第3位：水戸一高A
- ◇ ：土浦工高



〔昭和 55（1980）年度〕

〈昭和55年度茨城県高等学校将棋連盟役員〉

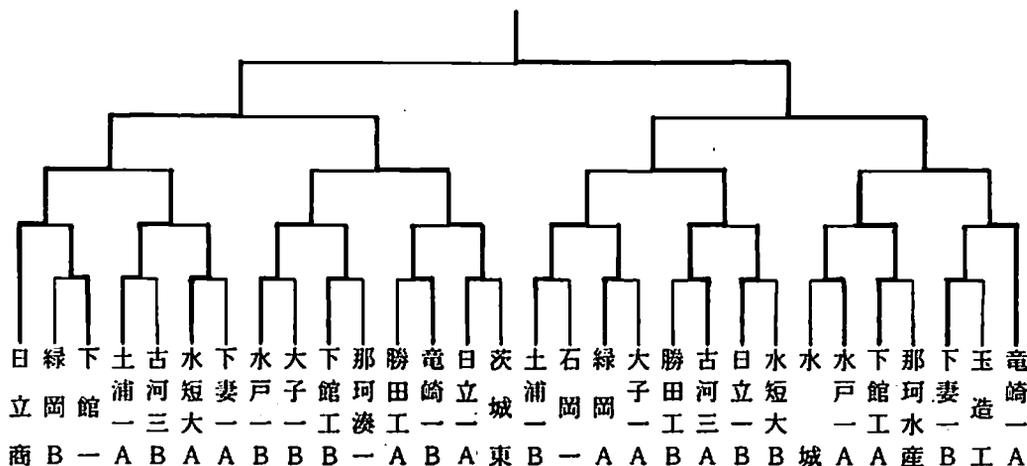
会 長 岩 下 金 司 (真壁農高)	監 査 小 林 夾 (土浦二高)
副会長 天 貝 茂 樹 (同 上)	幹 事 齋 藤 寿 (結城二高)
同 株 木 実 (土浦一高)	同 栃 木 昌 夫 (総和工高)
書 記 神 原 正 雄 (下館工高)	同 向 田 稔 (下館一高)
同 仲 田 憲 司 (大子一高)	同 石 川 禎 紀 (水戸一高)
会 計 嶋 崎 収 功 (日立商高)	同 飯 塚 幸 雄 (玉造工高)
同 横 倉 昭 三 郎 (那珂水産)	同 伊 藤 卓 也 (那珂水産高)
監 査 桜 井 操 (水戸一高)	

第16回全国高校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第16回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦は、7月25日(金)午前9時から、水戸市三の丸の県立水戸第一高等学校において県内23校から団体戦に30チーム、個人戦に27人が参加した。個人戦では私立水城高校の鬼沢昌一君が優勝、団体戦では竜ヶ崎一高Aチームが優勝した。鬼沢君、竜ヶ崎Aチームは8月15、16日、東京で開かれる全国大会に出場する。

(団体戦)

- 優 勝：竜ヶ崎一高A
- 準優勝：日立商高
- 第3位：古河三高A
- ◇ :日立一高A



竜ヶ崎一A(印)鬼沢君(印)が駒を進める

水戸で 全国高校将棋大会



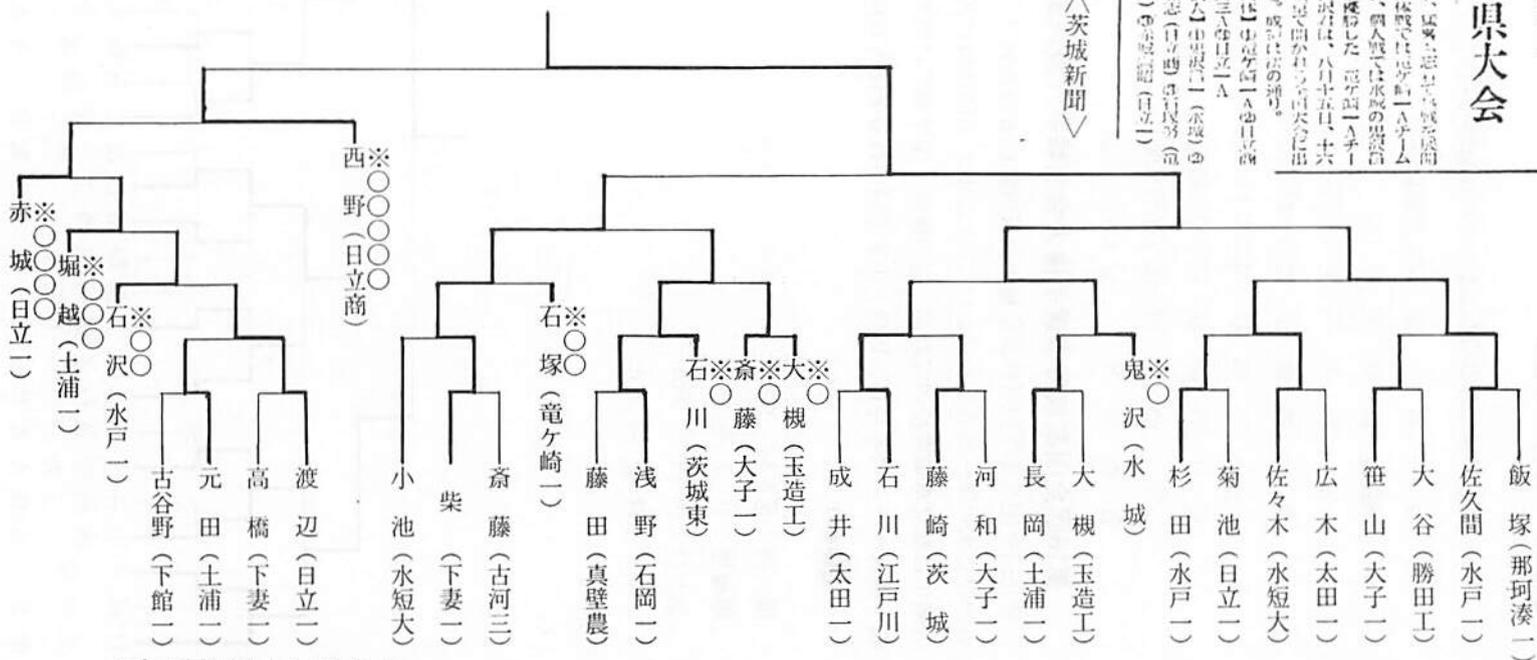
男さむ忘れて駒をヒネる高校生
—水戸一高

選考の末に勝手がひびき入り、定戦が二十五日早朝九時から、水が急用、試戦も忘れた。戦後成間一、思慮を得出陣(以下全同会)四山三の丸の立水戸一高内で開し、団体戦では鬼ヶ崎一A、赤一ム長一、深城新聞社後援の第十、第四二十三校から団体戦二君が優勝した。竜ヶ崎一A、赤一ム、鬼沢君は、八月十五日、十六日、早稲田開かれ、早稲田大会に出馬する。成績は次の通り。

【団体戦】竜ヶ崎一A(竜ヶ崎) 赤一ム(赤城新聞社) 西野和志(日立商) 藤野良(竜ヶ崎) 赤城新聞(日立)

茨城新聞

- (個人戦)
- 優勝：鬼沢昌一(水城高)
 - 準優勝：西野和志(日立商高)
 - 第3位：赤城満昭(日立一高)
 - 石塚務(竜ヶ崎一高)



※印は団体戦よりの編入者

○印は団体戦における個人成績

〔昭和 56（1981）年度〕

〔昭和56年度茨城県高等学校将棋連盟役員〕

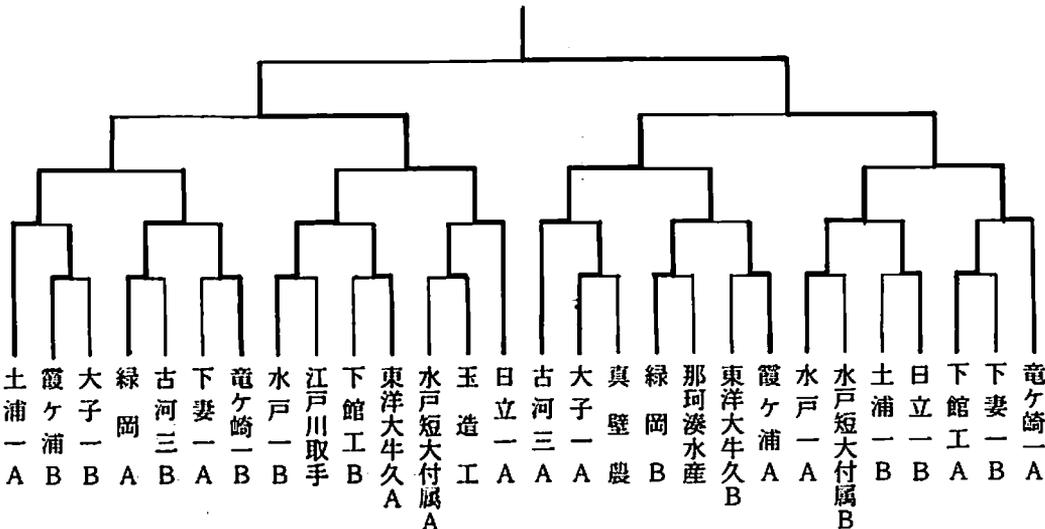
会 長	海老沢 昭 (真壁農高)	監 査	桜 井 操 (水戸一高)
副会長	天 貝 茂 樹 (同 上)	幹 事	斎 藤 寿 (古河二高)
同 株	木 実 (土浦一高)	同	栃 木 昌 夫 (総和工高)
書 記	神 原 正 雄 (下館二高)	同	向 田 稔 (下妻一高)
同 仲	田 憲 司 (大子一高)	同	横 倉 昭 三 郎 (那珂水産)
会 計	嶋 崎 収 功 (日立商高)	同	飯 塚 幸 雄 (玉 造 高)
同 石	川 禎 紀 (水戸一高)	同	松 実 敏 之 (水 城 高)
監 査	小 林 夾 (土浦二高)		

第17回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第17回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦は、7月24日、水戸市の私立水城高校に、県内19校、120人を集めて開かれ、私立江戸川学園取手高の石川歩君(3年)が優勝、団体戦では竜ヶ崎一高Aチーム(日下部隆文、石塚 努、小竹 潤君)が優勝した。優勝した石川君と竜ヶ崎一高Aチームは、10月14、15の両日、東京ホテル浦島(東京都中央区晴海)で行われた全国大会に出場する。

(団体戦)

- 優 勝：竜ヶ崎一高A
- 準優勝：日立一高A
- 第3位：土浦一高A
- ◇：古河三高A



江戸川学園の石川君が優勝

全国高校将棋代表決定戦 団体では竜ヶ崎一がV2



第十七回全国高校将棋選手権大会
 倉敷代表決定戦は二十四日、水戸市の私立水城高校に集った十九校、白十一人を集めて開かれ、歩将棋個人戦では私立江戸川学園取手三組の石川君が優勝した。団体戦では竜ヶ崎一がV2を達成した。

〈茨城新聞〉

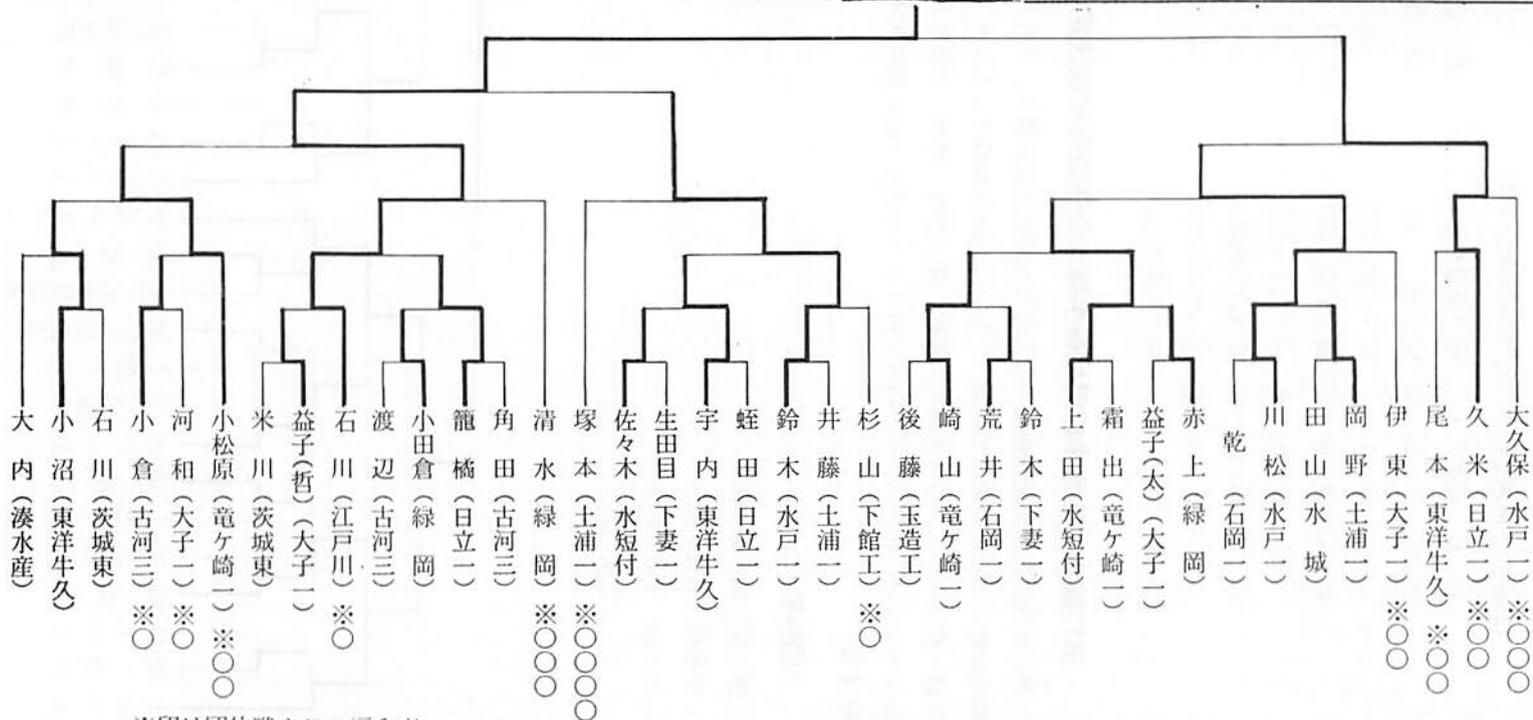
優勝した石川君は竜ヶ崎一（Aチーム）は来月十四、十五の両日、東京ホテル神楽（東京都中央区神楽）で二回戦を飾った。

優勝した石川君は竜ヶ崎一（Aチーム）は来月十四、十五の両日、東京ホテル神楽（東京都中央区神楽）で二回戦を飾った。

成績は次の通り（敬称略）
 △個人戦の石川歩（江戸川学園取手三年）◎久米主税（日立一三）◎鈴木康史（水戸一三）◎柴英雄（土浦一）
 △団体戦の竜ヶ崎一（A）◎日立一◎土浦一◎古河三A

（個人戦）

- 優勝：石川 歩（江戸川学園取手高）
 準優勝：久米 主税（日立一高）
 第3位：鈴木 康史（水戸一高）
 第3位：塚本 英雄（土浦一高）



※印は団体戦よりの編入者
 ○は団体戦における個人成績

[昭和 57 (1982) 年度]

《昭和57年度茨城県高等学校将棋連盟役員》

会 長	海老沢 昭 (真壁農高)	監 査	小 林 爽 (石岡商高)
副会長	天 貝 茂 樹 ()	幹 事	斎 藤 寿 (古河二高)
同	株 木 実 (土浦一高)	同	北 条 英 幸 (総和工高)
書 記	神 原 正 雄 (下館工高)	同	向 田 稔 (下妻一高)
同	仲 田 憲 司 (大子一高)	同	飯 塚 幸 雄 (玉造工高)
会 長	嶋 崎 収 功 (日立商高)	同	松 実 敏 之 (水 城 高)
同	石 川 禎 紀 (水戸一高)	同	矢 口 昭 夫 (日立一高)
監 査	桜 井 操 (同)		

第 18 回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦。

第18回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦は、7月29日、水戸市の私立水城高校で開かれた。県内22校から34チームが参加し、団体戦 102人、個人戦23人が対局した。個人戦では、竜ヶ崎一高の石塚努君が優勝、団体戦では緑岡高Aチームが優勝した。

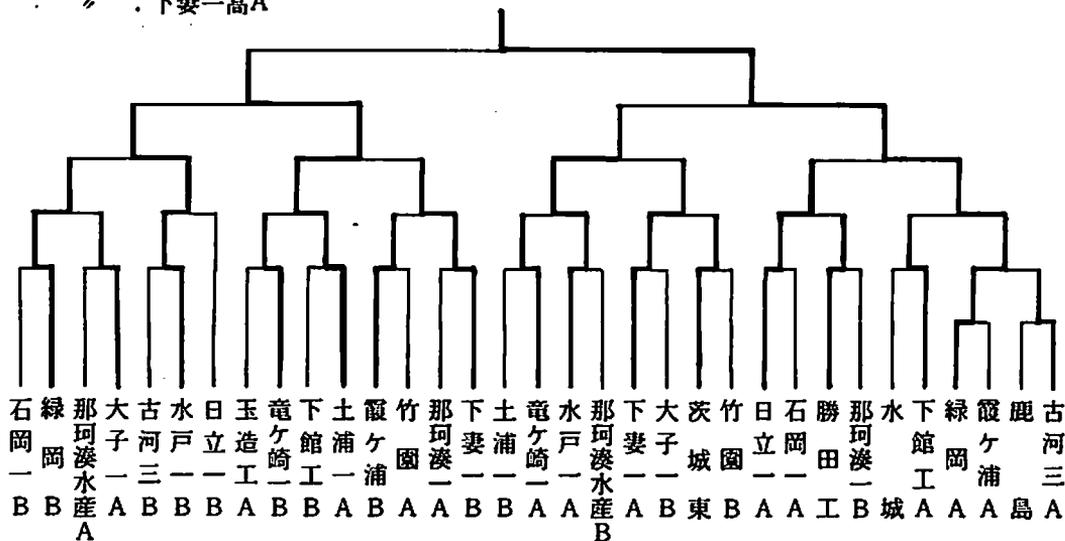
(団体戦)

優 勝：緑 岡 高A

準優勝：土浦一高A

第 3 位：水戸一高B

：下妻一高A



(個人戦)

優勝：石塚 努 (竜ヶ崎一高)
 準優勝：岡野 夏 樹 (土浦一高)
 第3位：鈴木 正 啓 (水戸一高)
 “：前川 宏 行 (土浦一高)

団体戦・緑岡A、個人戦は石塚が制す

全国高校将棋大会

第十八回全国高校将棋選手権大会
 決勝大会は二十九日、水戸市白梅
 の水城高等学校で開かれた。県内
 二十二校から三十四人が参加
 し、団体戦は三人、個人戦は十三
 人が対局した。

戦績は次のとおり。

▽団体戦 ①緑岡A ②土浦一A

③水戸一B 下妻一A

▽個人戦 ①石塚努(竜ヶ崎一)

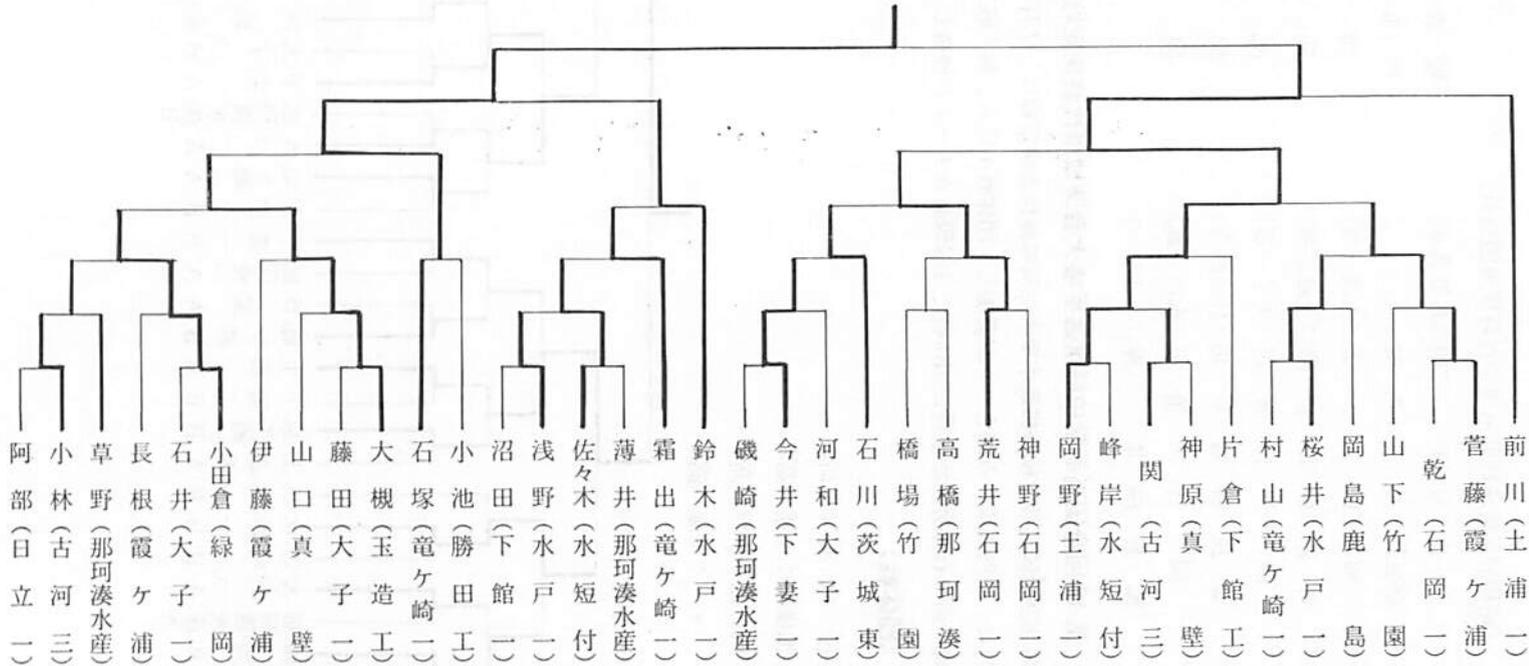
②岡野夏樹(土浦一) ③鈴木正啓

(水戸一) 前川宏行(土浦一)



団体優勝した緑岡A

▽茨城新聞



〔昭和 58（1983）年度〕

〈昭和58年度茨城県高等学校将棋連盟役員〉

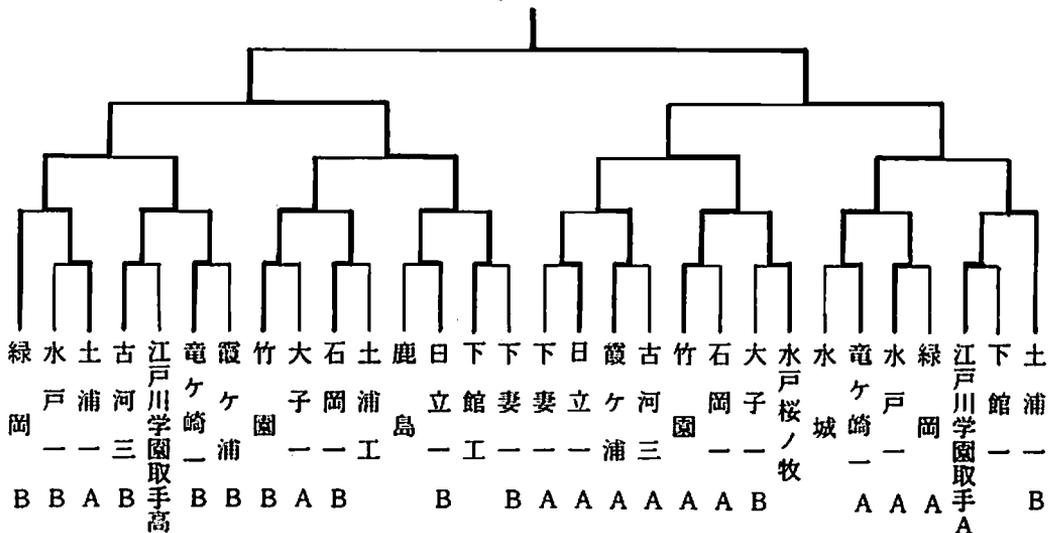
会長	小林 健一 (筑波高)	監査	坪井 達雄 (緑岡高)
副会長	天貝 茂樹 (同)	幹事	斎藤 寿 (結城一高)
同	幕内 利男 (茨城東高)	同	向田 稔 (下妻一高)
書記	神原 正雄 (下館工高)	同	飯塚 幸雄 (玉造工高)
同	仲田 憲司 (大子一高)	同	松実 敏之 (水城高)
会計	石川 禎紀 (水戸一校)	同	中根 浩 (真壁高)
同	嶋崎 収功 (日立南高)	同	三宅 一治 (鉾田農高)
監査	桜井 操 (水戸一高)	同	北条 英幸 (総和工高)

第 19 回全国高等学校将棋選手権大会茨城大会代表決定戦

第19回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦は、7月23日（土）、土浦市中央2丁目亀城プラザにおいて開かれた。県内21校が参加して開かれた。今大会は最近の将棋熱から1校の参加者を団体戦、個人戦を含め8人以内と制限して行われた。県立水戸桜ノ牧高の田口拓也君が優勝、団体戦では竜ヶ崎一高Aチームが優勝した。

（団体戦）

- 優 勝：竜ヶ崎一高A
- 準優勝：日立一高B
- 第3位：土浦一高A
- ◇：竹園高A



〔昭和 59（1984）年度〕

〔昭和59年度茨城県高等学校将棋連盟役員〕

会長	雨宮和彦(筑波高)	監査	坪井達雄(緑岡高)
副会長	天貝茂樹()	幹事	斎藤寿(結城一高)
同	幕内利男(茨城東高)	同	向田稔(下妻一高)
書記	神原正雄(下館工高)	同	菊池郁治(岩井高)
同	酒井義博(竜ヶ崎一高)	同	姪田義房(高萩高)
会計	松実敏之(水城高)	同	中根浩(真壁高)
同	石川禎寿(水戸一高)	同	三宅一治(鉾田農高)
監査	桜井操(水戸一高)	同	嶋崎収功(日立商高)

第20回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

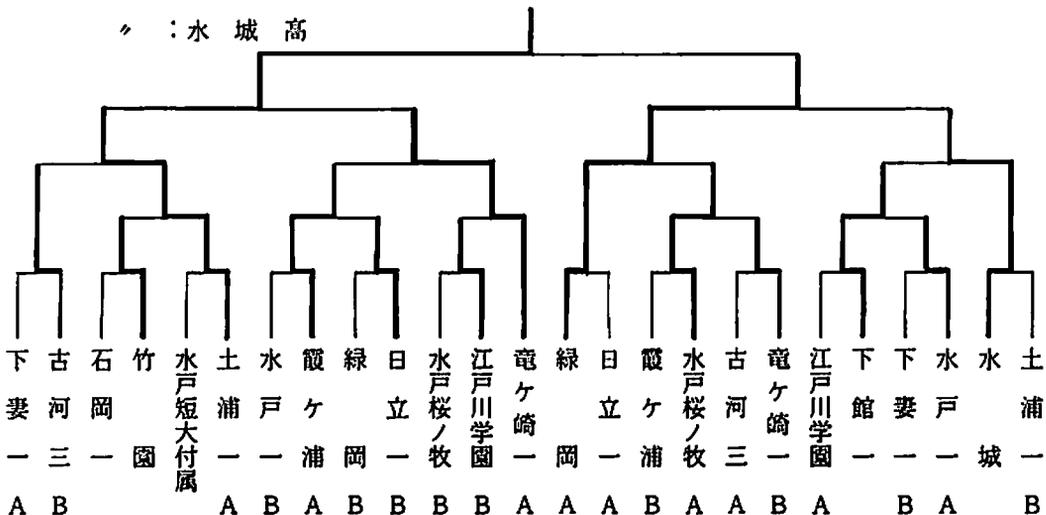
第20回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦が、7月23日、水戸市の水城高校で開催された。団体戦には15校25チームが、個人戦には33選手が参加し、熱戦を展開した。

団体戦では決勝で土浦一高が緑岡高を3：0で圧勝。昭和52、53年度に続き、6年ぶり3度目の優勝を飾った。第3位には竜ヶ崎一高と水城高が入賞した。個人戦の決勝は、前年度優勝の水戸桜ノ牧高田口拓也君（2年）と竜ヶ崎一高栗林聡君（3年）との戦いとなったが、田口君が接戦を制し大会史上初の個人戦2連覇を果たした。常総学院高中根一男君、土浦一高佐藤康君は惜しくも準決勝で破れ決勝進出は果たせなかった。

団体戦を制した土浦一高と個人戦に優勝した田口君は、8月に行われる全国高等学校将棋選手権大会に県代表として出場する。

〔団体戦〕

- 優勝：土浦一高A
- 準優勝：緑岡高A
- 第3位：竜ヶ崎一高A
- ◇：水城高



土浦一が3位入賞 高校将棋選手権

第二十四回全国高校将棋選手権大会(全国新聞社主催)が、日本将棋連盟主催で、東京都の十八日、東京・豊洲の「東京ホテル蒲田」で男子個人、団体、女子個人の出場者、決勝が行われた。

男子個人は、藤岡(大坂)・広島(大坂)が決勝で吉田(大坂)・土浦(一)を破り初優勝。女子個人は、初出場の吉田(大坂)・藤岡(大坂)が決勝で吉田(大坂)・藤岡(大坂)を破り初優勝。女子個人は、初出場の吉田(大坂)・藤岡(大坂)が決勝で吉田(大坂)・藤岡(大坂)を破り初優勝。

本誌関係者は土浦(一)・後井(三)・藤岡(大坂)・吉田(大坂)・藤岡(大坂)が優勝した。為今までの成績(団体、個人)は「16」です。

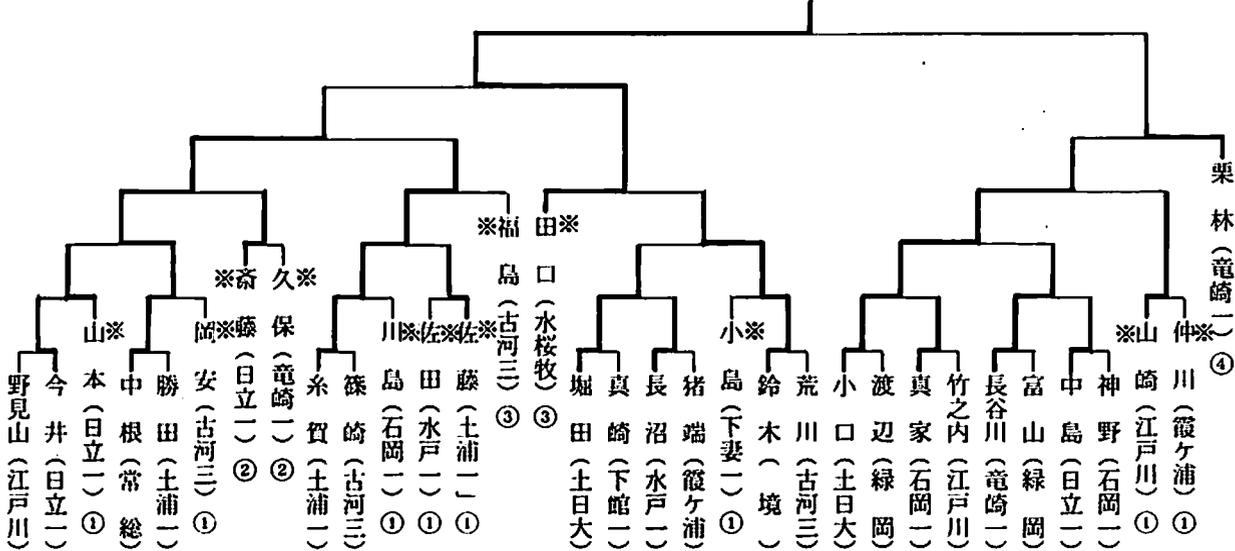
本県から男子個人に出場した二組連勝戦績をマークした日本マ名人藤岡(大坂)・吉田(大坂)は、優勝した。

【男子個人】
 優勝者 土浦(一) 3-0 土浦(一) 三勝

〈茨城新聞〉

(個人戦)

- 優勝：田口拓也 (水戸桜ノ牧高)
 準優勝：栗林聡 (竜ヶ崎一高)
 第三位：中根一男 (常総学院高)
 佐藤康 (土浦一高)



※印は団体戦よりの編入者
 ○内の数字は団体戦における勝数

〔昭和 60（1985）年度〕

〈昭和59年度茨城県高等学校将棋連盟役員〉

会 長	雨 宮 和 彦(筑 波 高)	幹 事	斎 藤 寿(結城一高)
副会長	天 貝 茂 樹(同)	同	向 田 稔(下妻一高)
同 幕	内 利 男(茨 城 東 高)	同	菊 池 郁 治(岩 井 高)
書 記	矢 須 恵 由(水戸桜ノ牧高)	同	蛭 田 義 房(高萩工高)
同	酒 井 義 博(竜ヶ崎一高)	同	中 根 浩(真 壁 高)
会 計	田 崎 隆 一(水 戸 一 高)	同	三 宅 一 治(鉾田農高)
同	松 実 敏 之(水 城 高)	同	嶋 崎 収 功(日立商高)
監 査	桜 井 操(水 戸 一 高)	同	鈴 木 利 夫(土浦一高)
同	坪 井 達 雄(緑 岡 高)		

第21回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

本年度の全国高等学校将棋選手権大会が、7月23日、水戸市の水城高校を会場にして開催された。団体戦には32チームが、個人戦には40選手（団体戦からの編入者11選手を含む）が参加し、例年以上の激しい戦いが展開された。

団体戦では、決勝戦は昨年と同じ土浦一高対緑岡高の対戦となったが、結果は3：0で、緑岡高が圧勝し、前回の雪辱を果たした。また、個人戦では、水戸桜ノ牧高田口拓也君が、大会史上初の3連覇を達成した。

なお、全国大会の団体戦へは、緑岡高が出場を辞退したため、土浦一高が出場した。

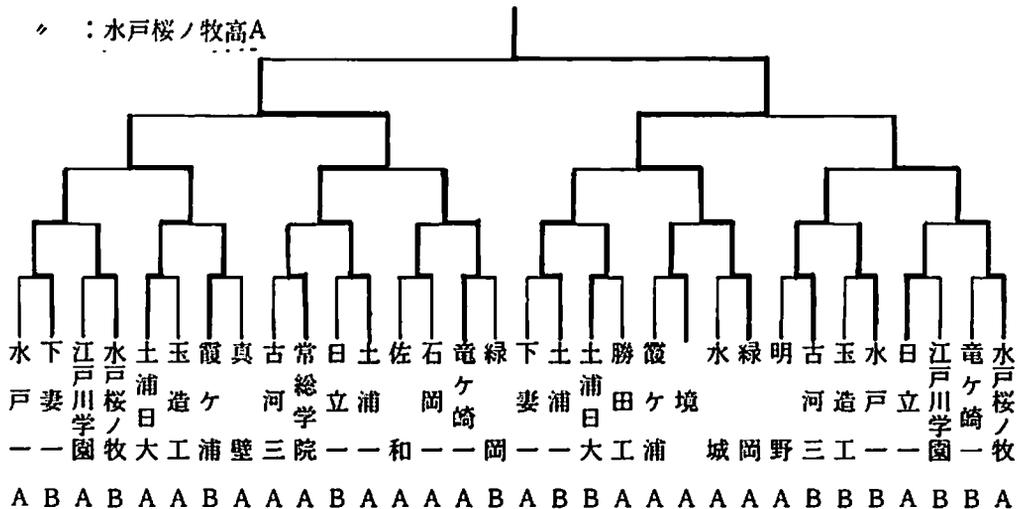
（団体戦）

優 勝：緑 岡 高A

準優勝：土 浦 一 高A

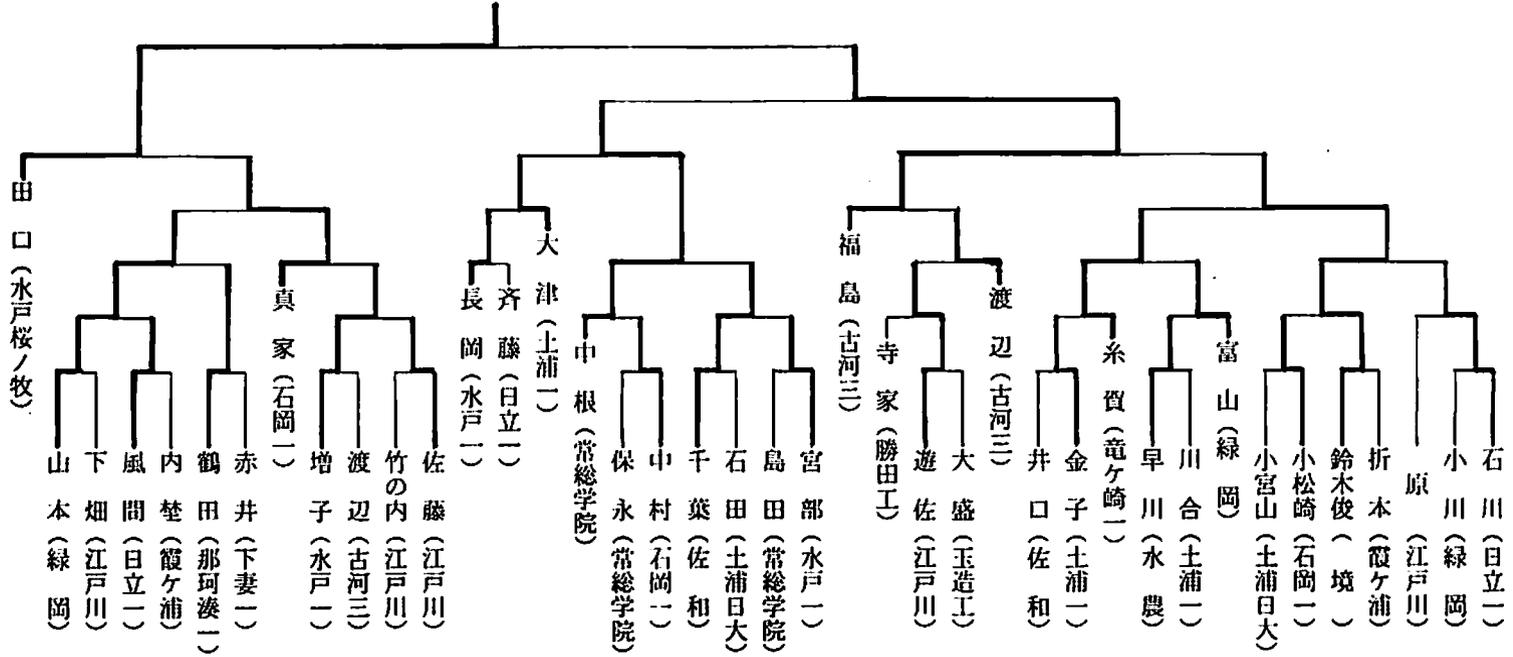
第3位：土 浦 日 大 高A

◇ ：水戸桜ノ牧高A



(個人戦)

優勝：田口拓也(水戸桜ノ牧高)
 二位：福島諭(古河三高)
 三位：中根一男(常総学院高)



〔昭和 61（1986）年度〕

◀昭和61年度茨城県高等学校将棋連盟役員▶

会長 園部 公一 (筑波高)	監査 中根 浩 (真壁高)
副会長 天貝 茂樹 (同)	幹事 斎藤 寿 (結城一高)
同 幕内 利男 (茨城東高)	同 菊池 郁治 (岩井高)
書記 矢須 恵由 (水戸桜ノ牧高)	同 鈴木 利夫 (土浦一高)
同 酒井 義博 (竜ヶ崎一高)	同 向田 稔 (下妻一高)
会計 松実 敏之 (水城高)	同 桜井 操 (水戸一高)
同 田崎 隆一 (水戸一高)	同 後藤 憲興 (土浦日大高)
監査 嶋崎 収功 (日立商高)	同 姪田 義房 (高萩工高)

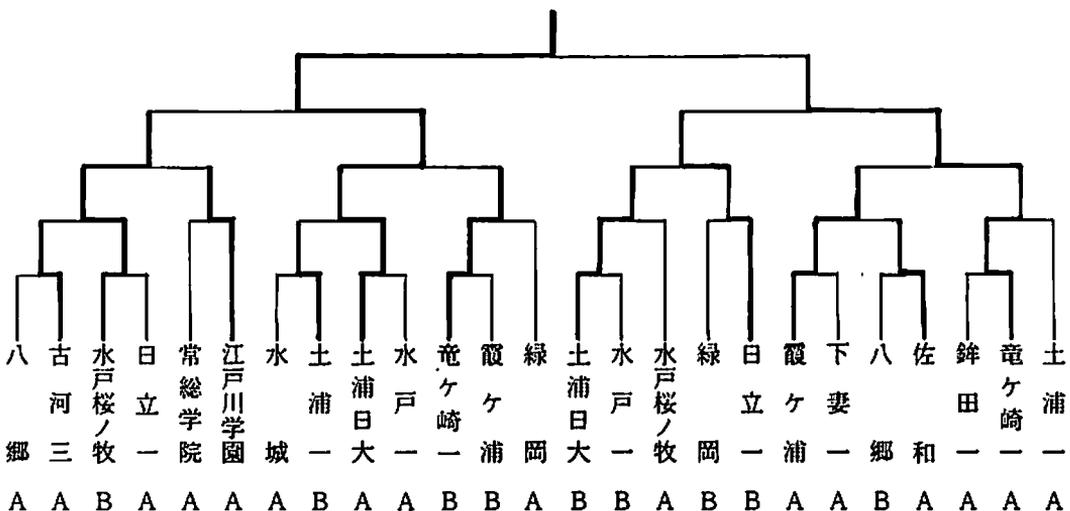
第22回全国高校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

本年度の茨城県代表決定戦は7月24日、水戸市の水城高校を会場にして開催された。団体戦には25チームが、個人戦には38選手が参加し、熱戦が展開された。

団体の決勝戦は土浦日大と竜ヶ崎一高の戦いとなり、2：1で土浦日大チームが優勝した。個人戦では常総学院の中根一男君と土浦日大の石塚晃彦君の決勝戦となり注目され、優位に立っていた中根君が順当に優勝した。

(団体戦)

- 優勝：土浦日大高
- 準優勝：竜ヶ崎一高A
- 第3位：水戸桜ノ牧高B
- ◇：日立一高B



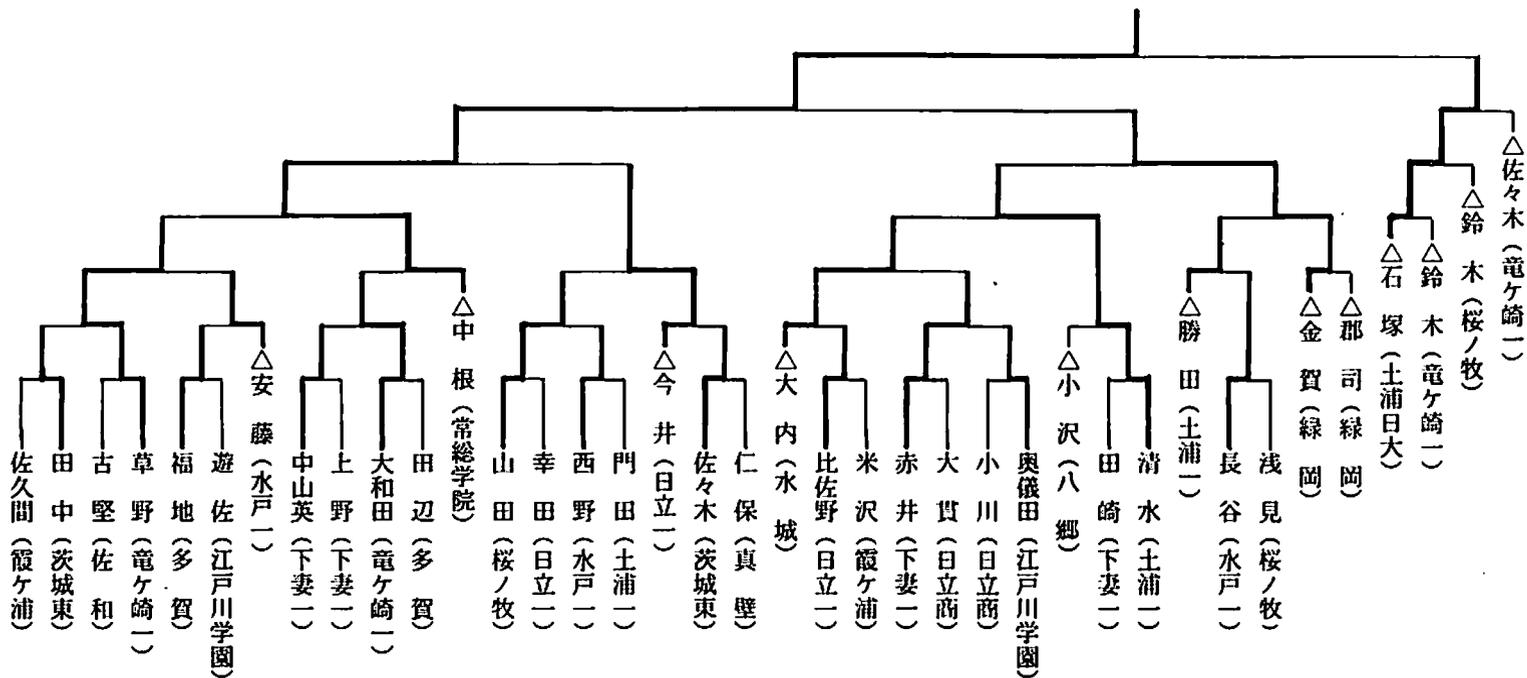
(個人戦)

優勝：中 根 (常総学院高)

準優勝：石 塚 (土浦日大高)

三位：金 賀 (緑 岡 高)

佐々木 (竜ヶ崎一高)



〔昭和 62（1987）年度〕

◀昭和62年度茨城県高等学校将棋連盟役員▶

会 長 海老澤 甲子 (筑波高)	監 査 嶋 崎 収 功 (日立商高)
副会長 幕 内 利 男 (茨城東高)	同 中 根 浩 (真壁高)
同 天 貝 茂 樹 (筑波高)	幹 事 向 田 稔 (下妻一高)
書 記 矢 須 恵 由 (水戸桜ノ牧高)	同 桜 井 操 (水戸一高)
同 酒 井 義 博 (境 高)	同 後 藤 憲 興 (土浦日大高)
会 計 松 実 敏 之 (水 城 高)	同 和 地 茂 (高萩工高)
同 田 崎 隆 一 (水 戸 一 高)	

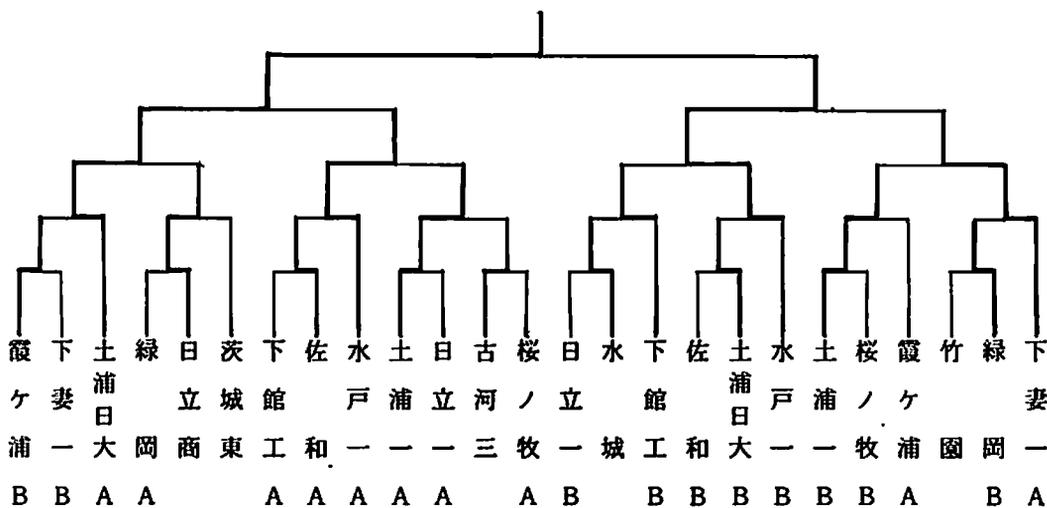
第23回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦。

全国高等学校将棋選手権大会が、7月23日、水戸市の水城高を会場にして開催された。団体戦には、25チームが、個人戦には、30選手（団体戦からの10名の編入者を含む）が参加し、熱戦が展開された。

団体戦は、昨年度優勝の土浦日大高が、順当に勝ち進み、大会2連覇を達成した。個人戦では、団体戦で優勝した土浦日大に残念ながら敗れてしまった、水戸一高Aチームの勝山良平君が、その雪辱を果たし優勝した。

（団体戦）

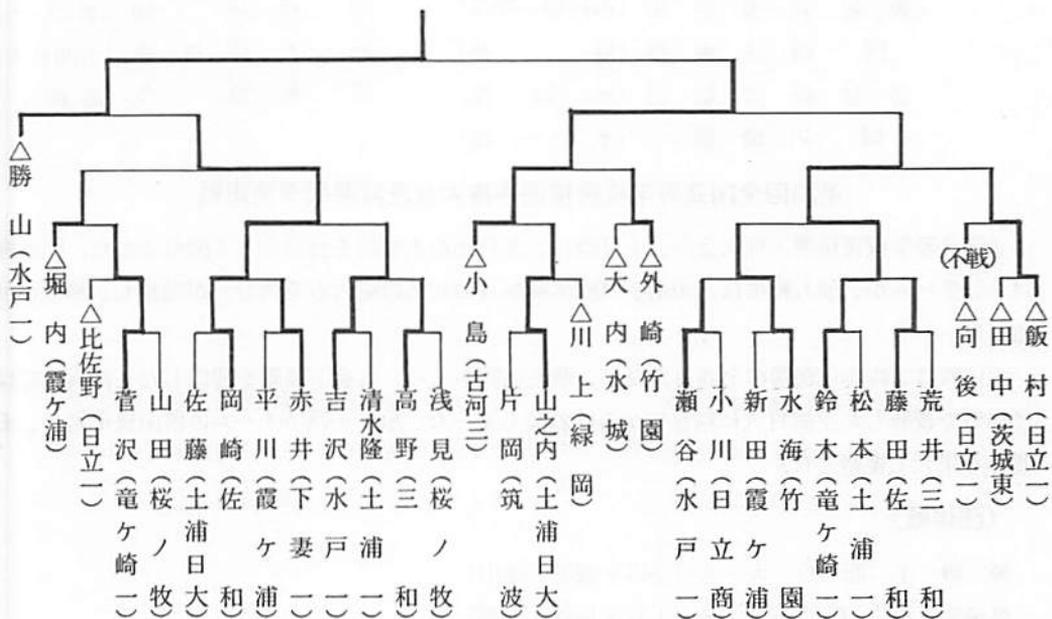
- 優 勝：土 浦 日 大 A (小田・飯田・細川)
- 準優勝：水 戸 一 B (上原・長谷・矢部)
- 第3位：水 戸 一 A (勝山・長岡・増子)
- 下 妻 一 A (黒子・中川・中山)



(個人戦)

優勝：勝山良平(水戸一高)
 準優勝：小島雅志(古河三高)
 第3位：岡崎喜一郎(佐和高)
 :鈴木大雅(竜ヶ崎一高)

表中△印は団体戦からの編入者



対局風景

〔昭和 63（1988）年度〕

《昭和63年度茨城県高等学校将棋連盟役員》

会 長	海老澤 甲子 (筑波高)	幹 事	向 田 稔 (下妻一高)
副会長	幕 内 利 男 (茨城東高)	同	桜 井 操 (水戸一高)
同	天 貝 茂 樹 (筑波高)	同	山 本 茂 (土浦一高)
書 記	金 沢 繁 則 (霞ヶ浦高)	同	岩 波 和 義 (古河三高)
同	後 藤 憲 興 (土浦日大高)	同	内 野 順 一 (下妻一高)
会 計	松 実 敏 之 (水 城 高)	同	栗 田 憲 生 (佐 和 高)
同	嶋 崎 収 功 (日立商高)	同	飯 島 良 夫 (竹 園 高)
監 査	中 根 浩 (真 壁 高)	同	横 須 賀 英 明 (竜ヶ崎一高)
同	田 崎 隆 一 (水 戸 一 高)		

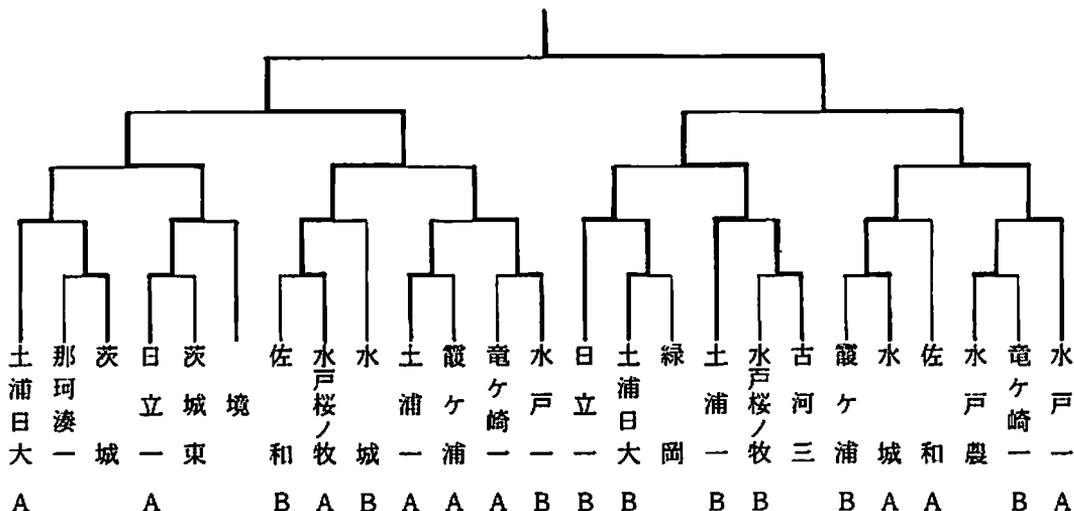
第24回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第24回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦が、7月8日、水戸市の水城高校で開催された。団体戦25チーム、個人戦29名（団体戦より編入14名）により峻烈な闘いが行われた。

団体戦では、古森水戸一高Aチームが新鋭水戸桜ノ牧高を2：1で破り優勝し、個人戦では、小関靖治君（境高）が、団体戦準優勝から個人戦編入の大図稔君（水戸桜ノ牧高）に一手違いによる熱戦をものにして優勝した。

（団体戦）

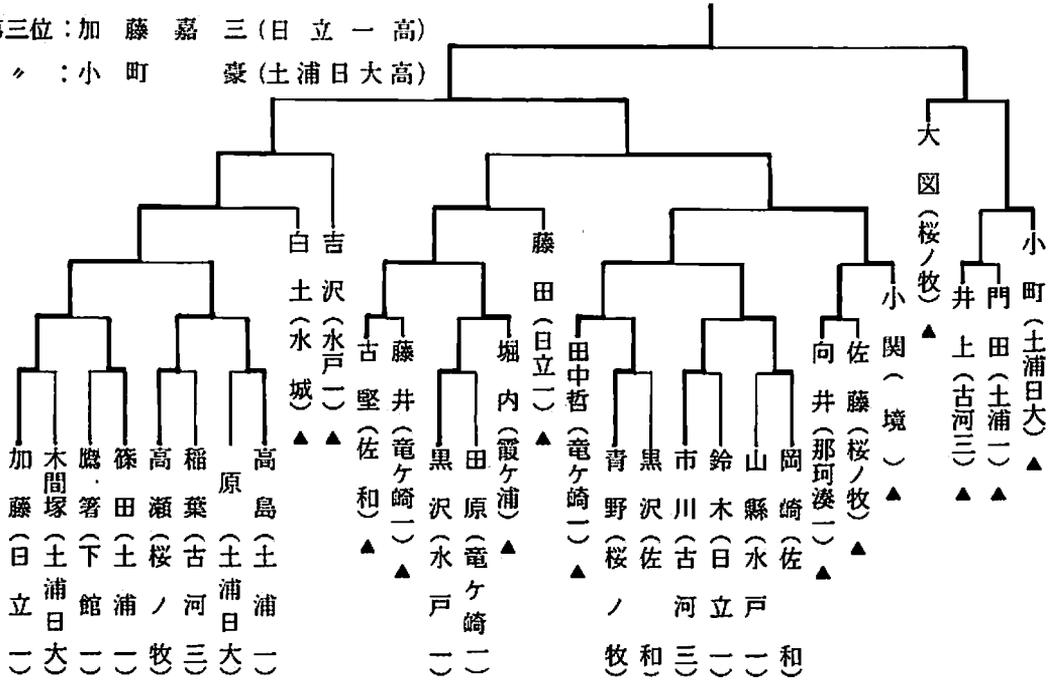
- 優 勝：水 戸 一 高A
- 準優勝：水戸桜ノ牧高A
- 第三位：日 立 一 高A
- ◇：土 浦 一 高B



(個人戦)

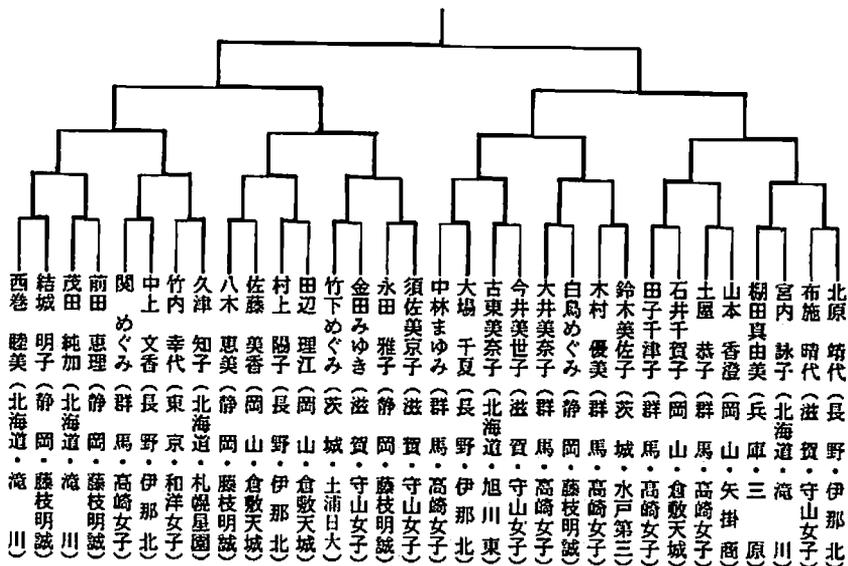
▲印は団体戦よりの編入者

優勝：小 関 靖 治 (境 高)
 準決勝：大 関 稔 (水戸桜ノ牧高)
 第三位：加 藤 嘉 三 (日立一高)
 〃：小 町 豪 (土浦日大高)



(女子個人戦) 竹下さん (土浦日大高) 全国制覇!

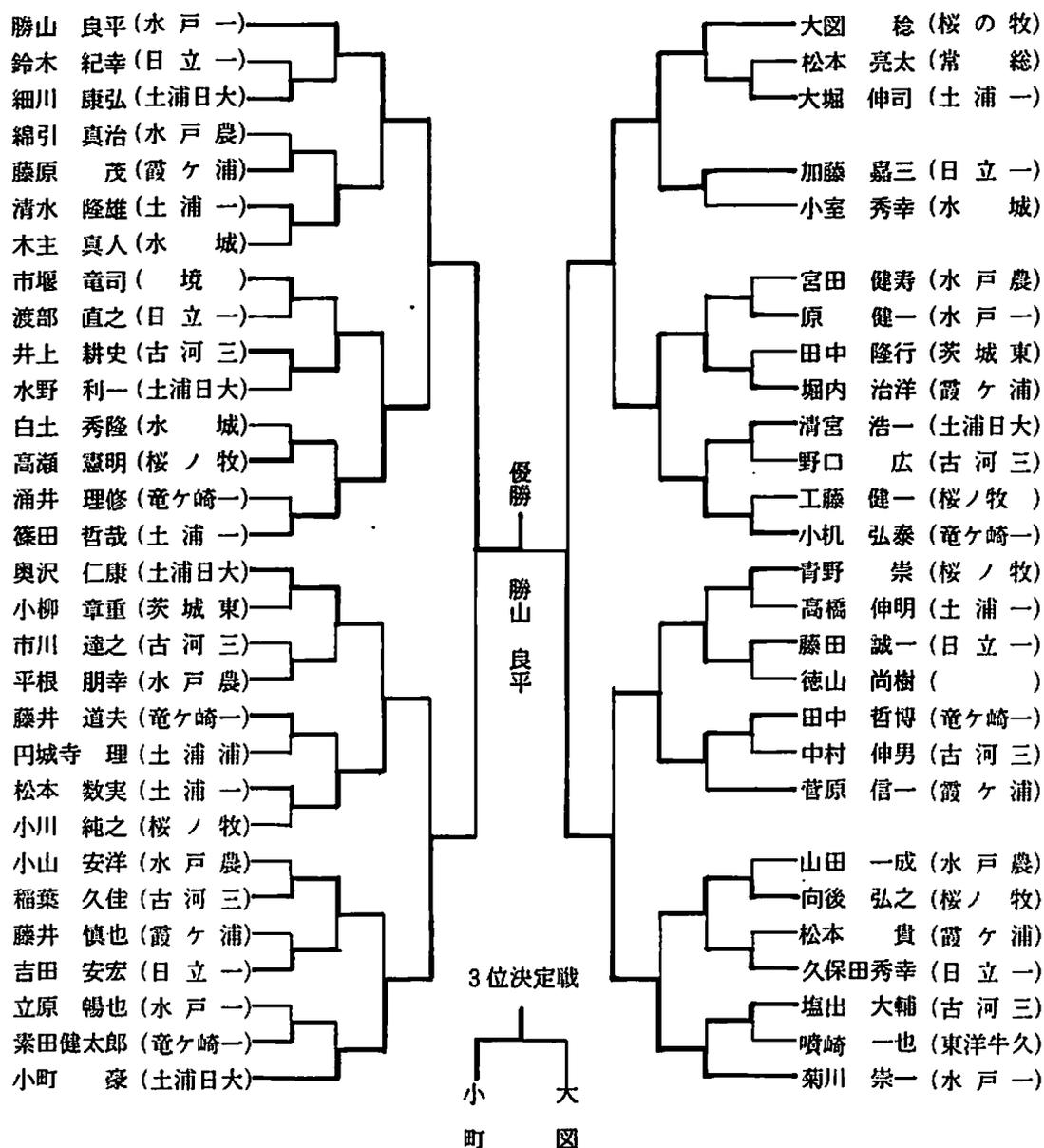
全国優勝：竹 下 めぐみ (土浦日大)



茨城県高校将棋連盟秋季大会兼'88全国高校将棋竜王戦茨城県代表決定戦

茨城県高校将棋連盟秋季大会兼'88全国高校将棋竜王戦が9月20日、水戸市の教育会館で開催された。県内14校から72名の選手が参加、個人戦が行われた。

決勝戦は強豪水戸一高同士の決戦になり、先輩の勝山良平君（2年）が菊川崇一君（1年）に勝ち先輩の貫禄を示した。



[平成元（1989）年度]

◁平成元年度茨城県高等学校将棋連盟役員＞

会長	鈴木 健 (筑波高)	幹事	中根 浩 (真壁高)
副会長	幕内 利男 (茨城東高)	同	桜井 操 (水戸一高)
同	天貝 茂樹 (筑波高)	同	坂本 高 (土浦一高)
書記	金沢 繁則 (霞ヶ浦高)	同	岩波 和美 (古河三高)
同	後藤 憲興 (土浦日大高)	同	藤井 功也 (東洋牛久高)
会計	松実 敏之 (水城高)	同	仲田 憲司 (水戸農高)
同	嶋崎 収功 (日立商高)	同	飯島 良夫 (竹園高)
監査会	沢 力 (佐和高)	同	横須賀 英明 (竜ヶ崎一高)
同	向田 稔 (下妻一高)	同	桜井 聖巳 (高萩工高)

第25回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

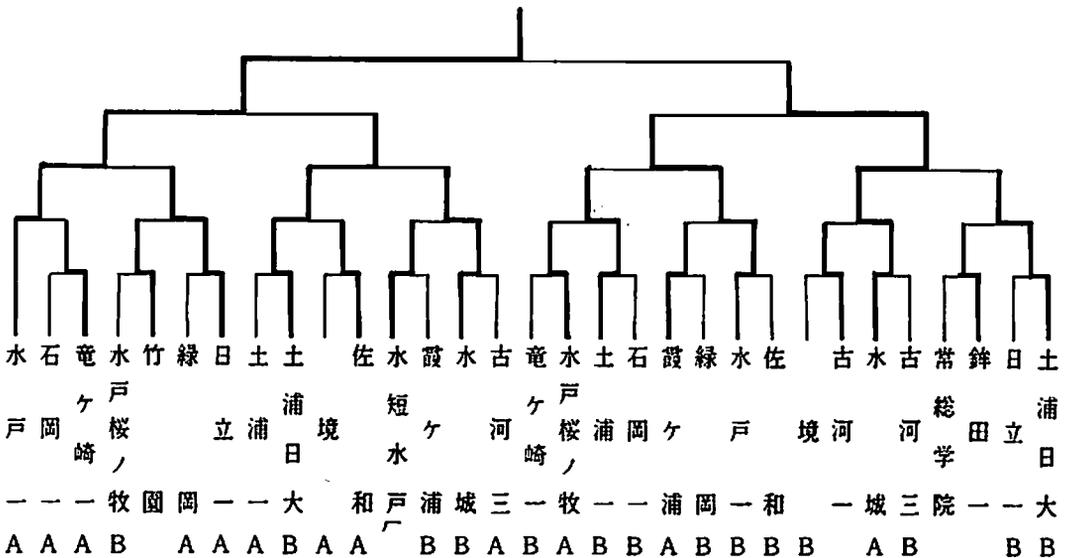
第25回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦が水城高校で開催された。

団体戦は31チームが参加し、熱戦が行われた。決勝は水戸一高Aと水城高Aとの水戸勢同士の決勝となったが、力に勝る水戸一高Aが優勝した。

個人戦は緑岡高菅原伸也君が竜ヶ崎一高小机弘泰君を敗り優勝した。

(団体戦)

- 優勝：水戸一高 A
- 準優勝：水城高 A
- 第三位：土浦日大高 B
- 水戸一高 B



夏季大会 (第2回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦)

(第2回全国高等学校将棋竜王戦)

昨年より始まった、全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦を兼ねた茨城県高等学校将棋連盟夏季大会が、8月1日、石岡市の石岡市民会館で開催された。

この大会には、強豪44選手が参加し、代表枠1名をめぐる熱い戦いが展開された。春季大会で優勝した緑岡高菅原伸也君が不参加のため、同じく春季大会で準優勝の竜ヶ崎一小机弘泰君の優位が予想されたが、結果は、前回のこの大会で準優勝だった水戸一高菊川崇一君が昨年の雪辱を果たし優勝した。

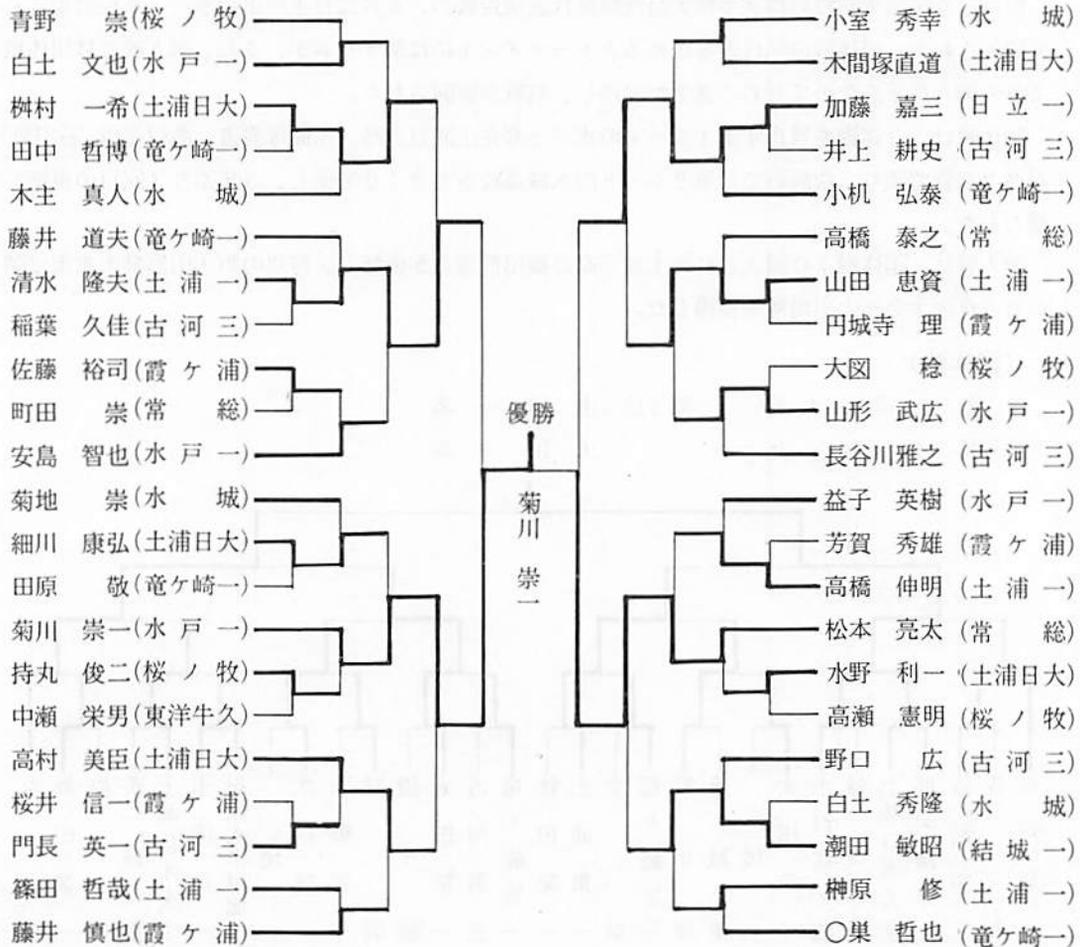


▲優勝した水戸一高の菊川崇一君。昨年の雪辱を果たし優勝した。



代表は菊川君
2年生同士の決勝で圧倒

読売新聞 茨城版



[平成2 (1990) 年度]

◀平成2年度茨城県高等学校将棋連盟役員▶

会長	鈴木 健 (筑波高)	幹事	中根 浩 (真壁高)
副会長	幕内 利男 (茨城東高)	同	桜井 泰雄 (水戸一高)
同	天貝 茂樹 (筑波高)	同	坂本 高 (土浦一高)
書記	金沢 繁則 (霞ヶ浦高)	同	岩波 和美 (古河三高)
同	後藤 憲興 (土浦日大高)	同	藤井 功也 (東洋牛久高)
会計	松実 敏之 (水城高)	同	広木 伸守 (石岡一高)
同	嶋崎 収功 (日立商高)	同	志田 淳 (結城一高)
監査会	沢 力 (佐和高)	同	横須賀 英明 (竜ヶ崎一高)
同	向田 稔 (下妻一高)	同	浅野 和信 (緑岡高)

春季大会 第26回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

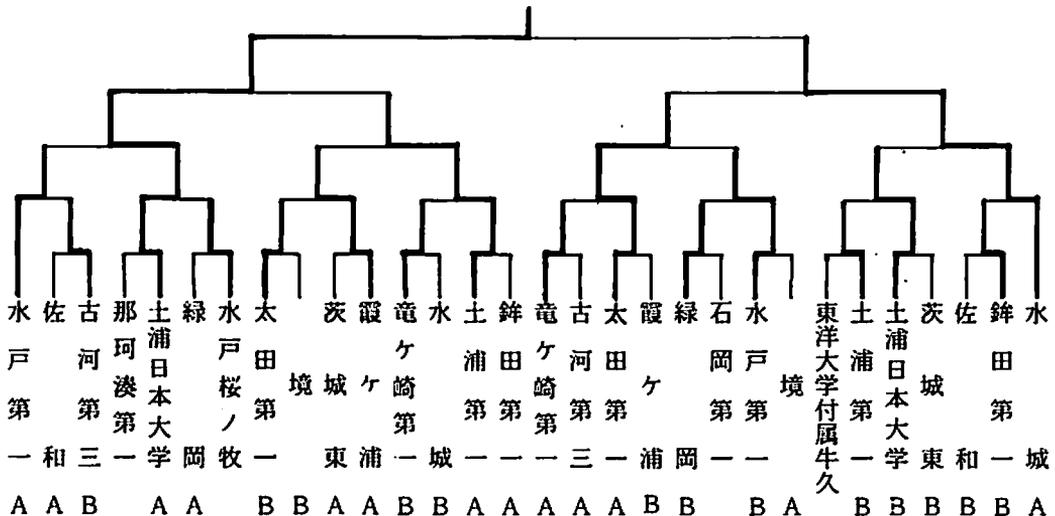
恒例の全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦が、6月12日水戸市の水戸一高を会場にして開催された。団体戦の県代表を決めるAトーナメントには30チームが、また、個人戦には団体戦よりの編入選手を含めて48名の選手が参加し、熱戦が展開された。

団体戦は、3連覇を目指す第1シードの水戸一高を土浦日大高 (木間塚直道、高村美臣、石川暁) が準々決勝で破り、決勝戦では第2シードの水城高校をも3:0で倒し、3年ぶり3回目の優勝を果たした。

個人戦は、団体戦より編入された土浦一高の篠田哲哉君が優勝し、将棋の町・山形県天童市で開かれる全国大会への出場権を獲得した。

(団体戦)

優勝：土浦日大高 第3位：土浦一高
準優勝：水城高 太田一高

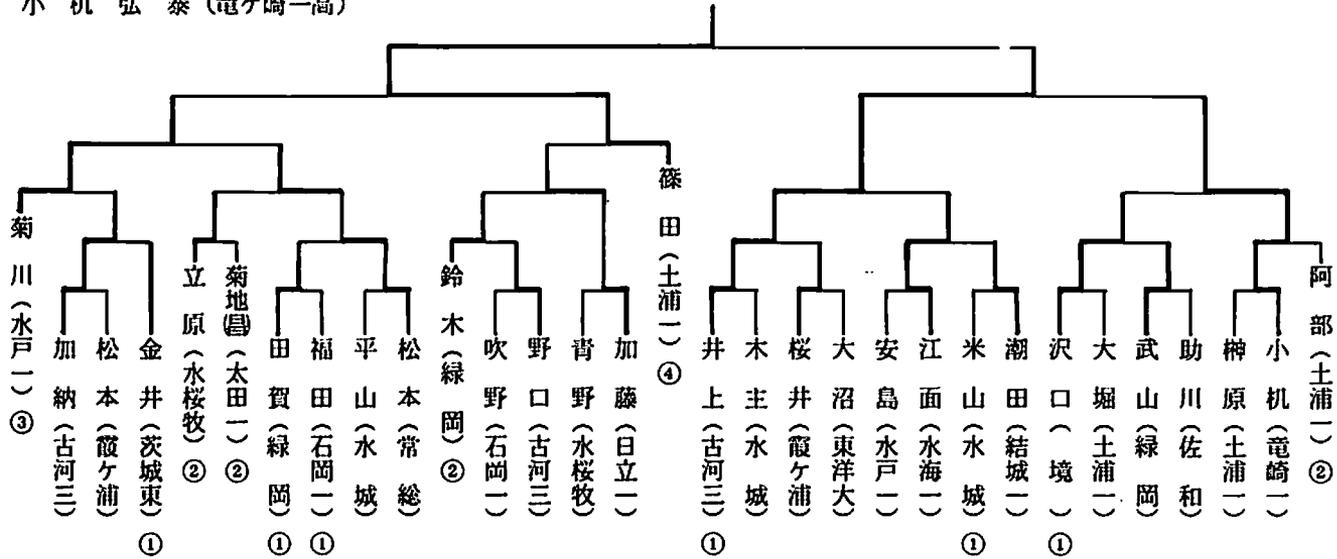


(個人戦)

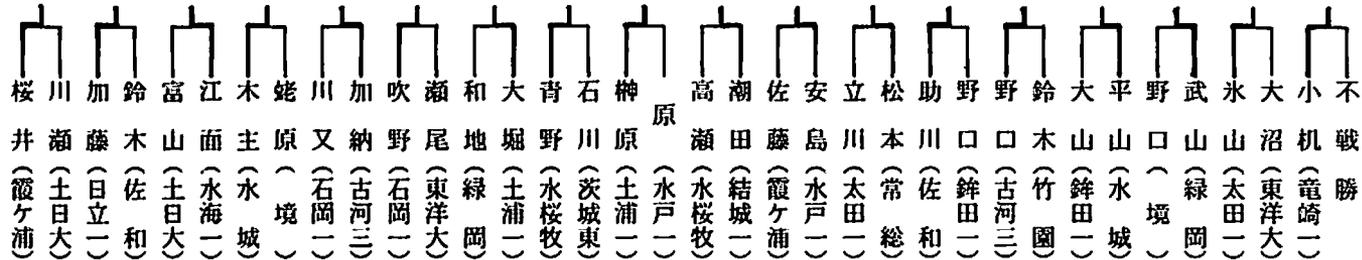
優勝：篠田 哲哉 (土浦一高)
 準優勝：井上 耕史 (古河三高)
 第3位：菊川 崇一 (水戸一高)
 小机 弘泰 (竜ヶ崎一高)

○印は団体戦よりの編入の選手

○内数字は編入時の団体戦に於ける勝敗



第一回戦



夏季大会・(第3回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦)

全国高等学校将棋竜王戦茨城県大会が、石岡市の石岡市民会館で開催された。県内23高校から、県代表を決定するAトーナメント戦に43名、Bトーナメントに38名、Cトーナメントに48名の、計129名が熱戦をくりひろげた。

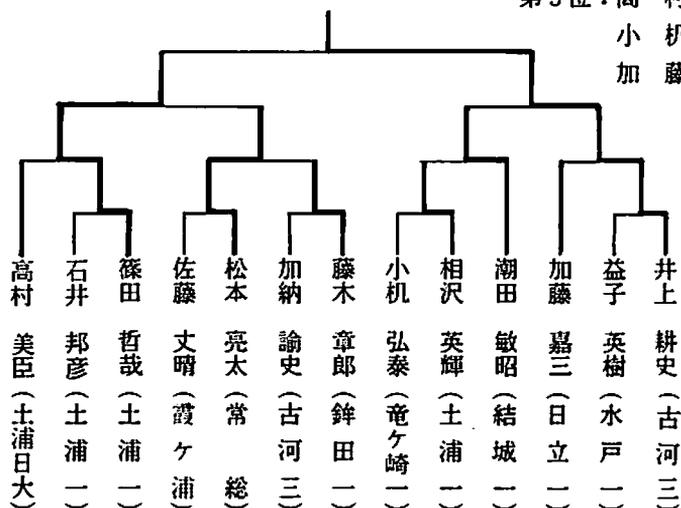
Aトーナメント戦の決勝戦は、土浦一高の篠田哲哉君と古河三高の井上耕史君の対戦となり、春季大会(全国高校将棋選手権大会県代表決定戦)と同じ顔合せとなった。先手振飛車の井上君が、居飛車穴熊の篠田君を93手で破り、春の雪辱を果たすとともに第三期県高校竜王の座を獲得した。井上君は9月23日福岡市第一薬科大学で行われる全国大会に出場する。

第3回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦結果

Aトーナメント	Bトーナメント
優勝 井上 耕史(古河三高)	優勝 舛井 達也(水戸一高)
2位 篠田 哲也(土浦一高)	2位 中島 総一郎(土浦一高)
3位 潮田 敏昭(結城一高)	3位 中川 諭(古河三高)
松本 亮太(常総学院)	菊地 崇(水城高)
Cトーナメント	
優勝 大堀 伸司(土浦一高)	
2位 米山 慎太郎(水城高)	
3位 赤津 雅弘(水城高)	
花田 正人(那珂湊一高)	

(トーナメント戦I組)

優勝：井上 耕史(古河三高)	第3位：潮田 敏昭(結城一高)
準優勝：篠田 哲也(土浦一高)	松本 亮太(常総学院高)
	第5位：高村 美臣(土浦日大高)
	小机 弘泰(竜ヶ崎一高)
	加藤 嘉三(日立一高)



〔平成3（1991）年度〕

〈平成3年度茨城県高等学校将棋連盟〉

会長 栗山 作次郎（石岡一高）	監査 藤井 功也（東洋牛久高）
副会長 浅野 和信（緑岡高）	幹事 坂本 高（土浦一高）
同 嶋 崎 収 功（日立商高）	同 横須賀 英明（竜ヶ崎一高）
書記 広木 伸守（石岡一高）	同 江 幡 収 一（霞ヶ浦高）
同 岩波 和美（古河三高）	同 新橋 浩（水戸一高）
会計 松実 敏之（水城高）	顧問 天貝 茂樹
同 後藤 憲興（土浦日大高）	同 幕内 利男（上郷高）
監査会 沢 力（佐和高）	

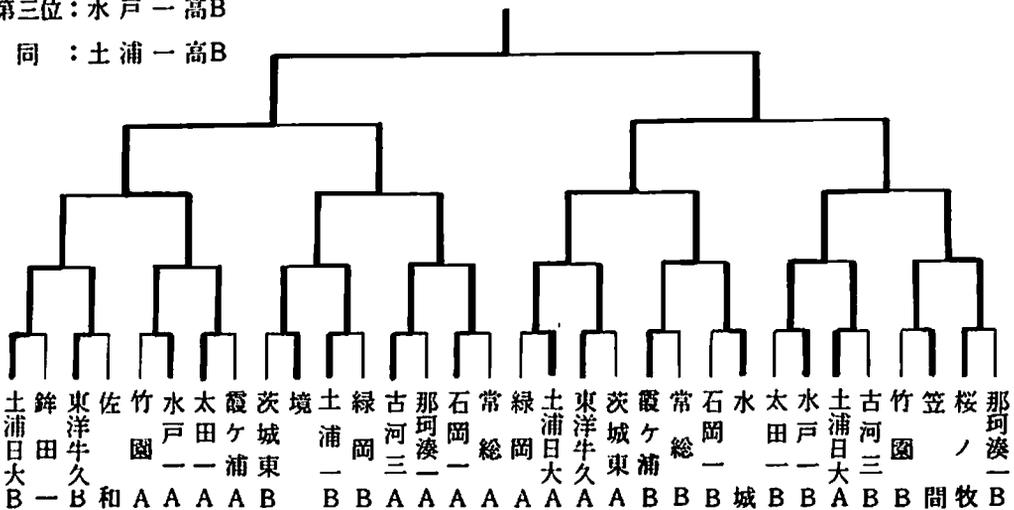
春季大会（第27回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦）

恒例の全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦が、6月12日、水戸市の水戸一高を会場に開催された。男子団体戦には19校32チーム、男子個人戦には22校41名、合計137人の史上最高の人数が参加し、熱戦を展開した。

男子団体戦決勝では2連覇を目指す土浦日大高と一昨年の覇者水戸一高の対戦となった。両校とも過去3回ずつ優勝しており、今年度の勝者が4回目優勝の新記録となる。結果は、水戸一高（桜田進介君、徳永吉宏君、益子英樹君）が2：1で1年ぶり4回目の優勝を果たした。個人戦は水海道一高の江面祐一君が緑岡高の和知久仁彦君を破って優勝した。江面君と水戸一高は浜松市のグラントホテル浜松で開かれる全国大会に出場する。

（団体戦）

- 優勝：水戸一高A
- 準優勝：土浦日大高A
- 第三位：水戸一高B
- 同：土浦一高B



(個人戦)

優勝：江面 祐一(水海道一高)



江面君が優勝

団体戦は水戸一

県内各高校の代表者が集った団体戦は、水戸一高が優勝した。個人戦は、水戸一高の江面君が優勝した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。

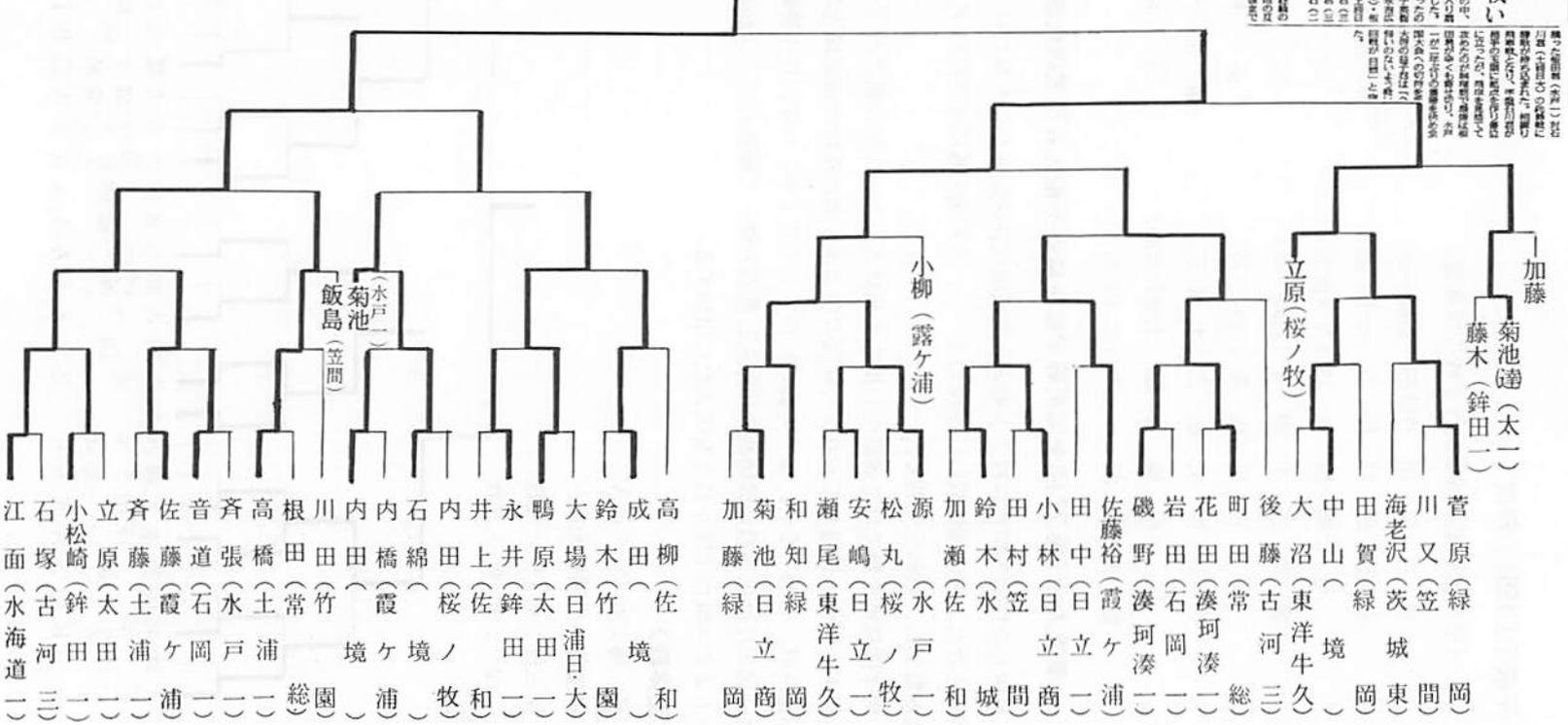


県戦の優勝した水戸一高の代表者たち

水戸一が2年ぶり優勝

県立高校 19校が暑い戦い

県立高校の代表者が集った団体戦は、水戸一高が優勝した。個人戦は、水戸一高の江面君が優勝した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。江面君は、水戸一高の代表として、県内各高校の代表者と対戦した。



夏季大会（第4回全国高等学校将棋竜王戦茨城県大会）

高校将棋実力日本一を競う第4回全国高等学校将棋竜王戦の県大会が7月23日、石岡市の石岡市民会館で開催された。全国大会の代表を選ぶAトーナメント戦には37名、Bトーナメントに33名、Cトーナメントに35名が参加し、熱戦が展開された。

レベルの高い激戦のAトーナメントは、春季大会準優勝の緑岡高の和知久仁彦君を破った水戸一高の徳永吉宏君が制し、福岡市の福岡第一薬科大学で開かれる全国竜王戦への出場権を獲得した。

Aトーナメント戦 1組

- 優勝：徳永吉宏（水戸一高）
- 準優勝：和知久仁彦（緑岡高）
- 第3位：清水 俊宏（茨城高）
- 同：益子 亘（水戸一高）

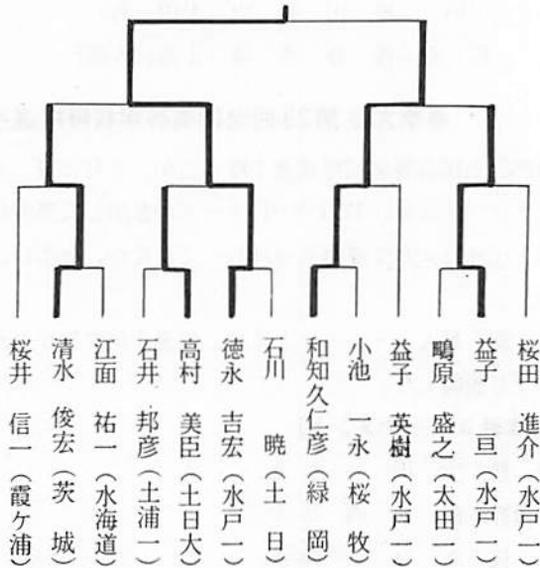
Bトーナメント

- 優勝：根本信貴（水戸一高）
- 2位：徳永吉孝（日立一高）
- 3位：斉須健一（水戸一高）
- 同：大串研也（水戸一高）

Cトーナメント

- 優勝：相沢英輝（土浦一高）
- 2位：山崎 潤（土浦一高）
- 3位：田賀晃二（緑岡高）
- 同：青木亮輔（土浦日大高）

＜Aトーナメント戦1組＞



1991年(平成3年)11月26日(火曜日)



＜読売新聞 茨城版＞



＜東京新聞 茨城版＞

〔平成4(1992)年度〕

〈平成4年度茨城県高等学校将棋連盟役員〉

会長	栗山 作次郎 (石岡一高)	監査	横須賀 英明 (竜ヶ崎一高)
副会長	嶋崎 収功 (日立商)	幹事	坂本 喬 (土浦一高)
同	松実 敏之 (水城高)	同	江幡 収一 (霞ヶ浦高)
書記	広木 伸守 (石岡一高)	同	桜井 泰雄 (水戸一高)
同	岩波 和美 (古河三高)	同	青木 睦人 (緑岡高)
会計	藤井 功也 (東洋牛久高)	同	酒井 義博 (境高)
同	植田 泰史 (太田一高)	顧問	天貝 茂樹
監査	後藤 憲興 (土浦日大高)	同	平石 晴一

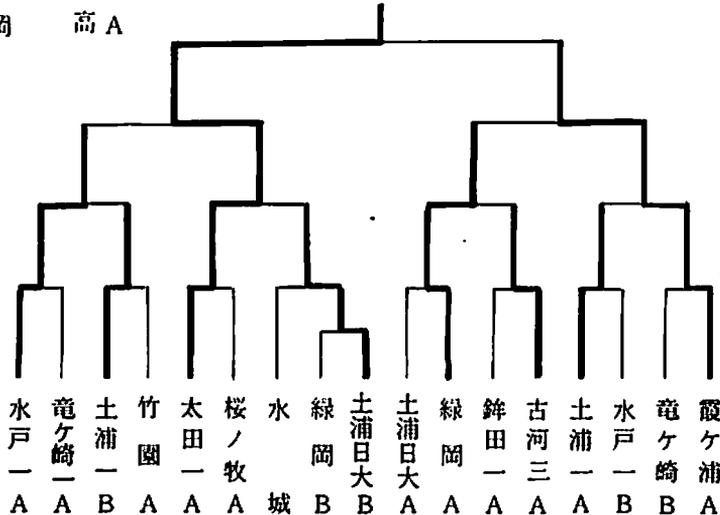
春季大会 第28回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦

第28回全国高等学校将棋選手権大会が、6月10日、水戸一高「知道会館」で行われた。団体戦Aトーナメントには、12校から17チームが参加して熱戦が展開された。団体戦は、ここ6年間、水戸一高と土浦日大高で優勝を分けあってきたが、今年は、太田一高が決勝で霞ヶ浦高を下し初優勝を飾った。

尚、個人戦Aトーナメントには、13選手が参加したが、茨城高の清水俊宏君が多賀高の五反田洋君を下し優勝した。

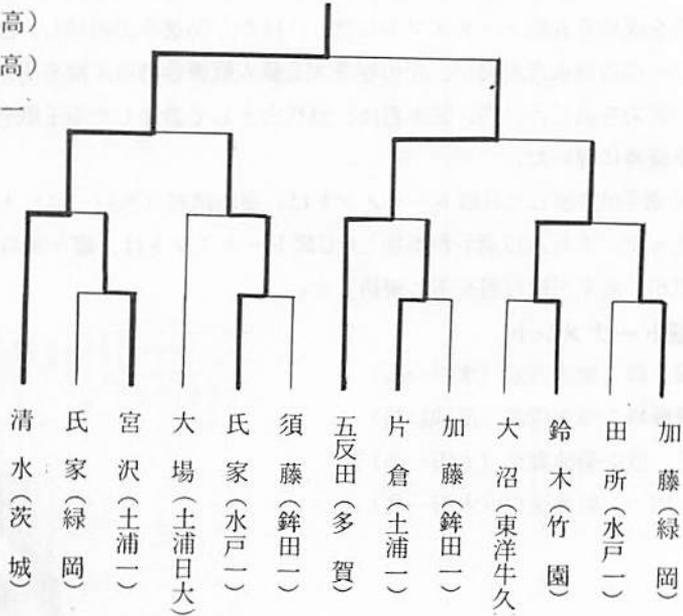
(団体戦Aトーナメント)

- 優勝：太田一高 A
- 準優勝：霞ヶ浦高 A
- 三位：水戸一高 A
- 同：緑岡高 A



(個人戦Aトーナメント)

- 優勝：清水俊宏（茨城高）
 準優勝：五反田洋（多賀高）
 三位：鈴木祥大（竹園高）
 同：氏家正博（水戸一）



茨城新聞
 団体優勝した太田一高の柳池典、東池道、菊
 辺毅と個人優勝の栗城高・清水君（右から）



全国高校将棋選手権大会
 茨城県代表

茨城県代表として、全日本大会に出場した太田一高将棋同好会のメンバー。右から、柳池典、東池道、菊辺毅、清水君。

県代表に太田一団体
 個人は茨城高の清水君

「一歩もゆるぎなく、最後まで粘り勝ちした。清水君の活躍が、県代表に太田一を押し上げた。清水君は、全日本大会でも活躍が期待される選手だ。」

全国高校将棋選手権大会
 茨城県高校
 チャンピオンの座獲得
 太田一高将棋同好会



全日本高校将棋選手権大会茨城大会の入賞者。前列3人が茨城県代表（逆時計）の太田一高チーム（右から、菊辺毅、栗城高、清水君の3名）。

全日本高校将棋選手権大会の優勝は、茨城県代表の太田一高将棋同好会が獲得した。優勝は、太田一高将棋同好会が獲得した。優勝は、太田一高将棋同好会が獲得した。

全日本高校将棋選手権大会の優勝は、茨城県代表の太田一高将棋同好会が獲得した。優勝は、太田一高将棋同好会が獲得した。



力の向上は、最後の勝利。練習試合の後も数選手を束めて、熱心な練習が行われる。

全日本高校将棋選手権大会の優勝は、茨城県代表の太田一高将棋同好会が獲得した。優勝は、太田一高将棋同好会が獲得した。

右「広報おた」（常陸太田市発行）

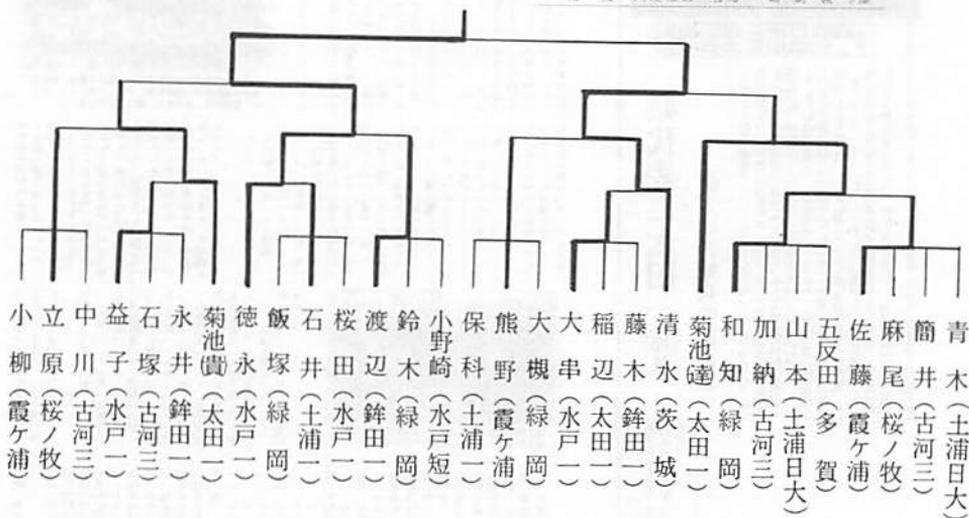
夏季大会（第5回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦）

第5回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦は、7月23日、石岡市民会館で行われた。本県代表を決めるA級トーナメントには、11校から26選手が出場し、激しい戦いがくりひろげられたが水戸一高の徳永吉宏君が、先の春季大会個人戦優勝者の茨城高清水俊宏君を決勝で下し、前評判通りの実力を示した。尚、徳永君は、県代表として参加した竜王戦全国大会においても活躍し、見事に準優勝に輝いた。

47選手が参加したB級トーナメントは、東山靖君（水戸一高）と沢口仁輝君（境高）が優勝を分けあった。また、32選手が参加したC級トーナメントは、霞ヶ浦高同士の決勝戦となり、小河原成泰君が、海老沢俊行君を下し優勝した。

A級トーナメント

- 優勝：徳永吉宏（水戸一高）
- 準優勝：清水俊宏（茨城高）
- 三位：菊池貴光（太田一高）
- 同：菊池達也（太田一高）



秋季大会(第3回関東高等学校将棋選手権大会兼第1回全国高等学校文化連盟将棋選手権大会茨城県代表決定戦)

A級トーナメント

平成4年11月26日(木)

(牛久市エスカード・ホール)

優勝：清水 俊宏(茨城高)

準優勝：佐藤 丈晴(霞ヶ浦高)

三位：徳永 吉宏(水戸一)

四位：益子 亘(水戸一)

○関東地区大会出場者

○三位までは高文連全国

大会出場

関東高校将棋選手権
県代表に清水君ら4人
 全国大会出場3人も決まる



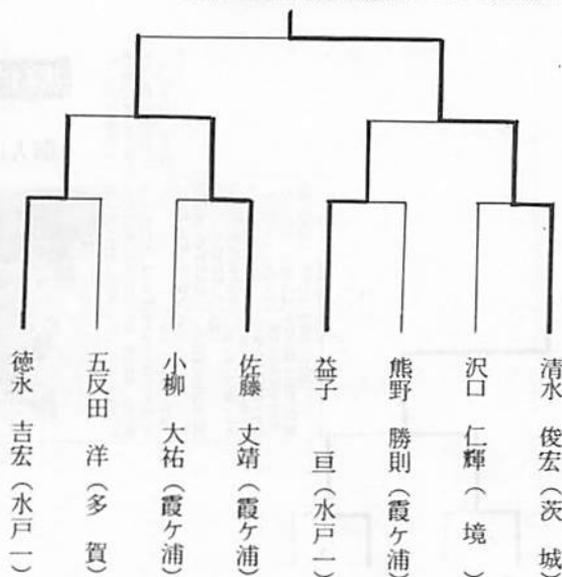
初優勝を飾った清水君(記)

茨城県代表決定戦が、26日(木)午後、牛久市エスカード・ホールで開かれた。県代表決定戦は、茨城高の清水俊宏(17)が初優勝を飾り、佐藤丈晴(霞ヶ浦高)が準優勝、徳永吉宏(水戸一)が三位、益子亘(水戸一)が四位で、県代表決定戦を終えた。清水君は、決勝で、水戸一の徳永君を破り、初優勝を飾った。清水君は、決勝で、水戸一の徳永君を破り、初優勝を飾った。清水君は、決勝で、水戸一の徳永君を破り、初優勝を飾った。

△が優勝、無敵を飾る清水君
 △が準優勝、無敵を飾る佐藤君
 △が三位、無敵を飾る徳永君
 △が四位、無敵を飾る益子君

△が優勝、無敵を飾る清水君
 △が準優勝、無敵を飾る佐藤君
 △が三位、無敵を飾る徳永君
 △が四位、無敵を飾る益子君

△が優勝、無敵を飾る清水君
 △が準優勝、無敵を飾る佐藤君
 △が三位、無敵を飾る徳永君
 △が四位、無敵を飾る益子君



〔平成5（1993）年度〕

《平成5年度茨城県高等学校将棋連盟役員》

会長	高梨保彦（太田一高）	会計	広木伸守（石岡一高）
副会長	松実敏之（水城高）	監査	桜井泰雄（水戸一高）
同	植田泰史（太田一高）	同	越中理之（竜ヶ崎一同）
書記	後藤憲興（土浦日大高）	幹事	笹島三郎（茨城高）
同	青木睦人（緑岡高）	顧問	天貝茂樹
会計	江幡収一（霞ヶ浦高）		

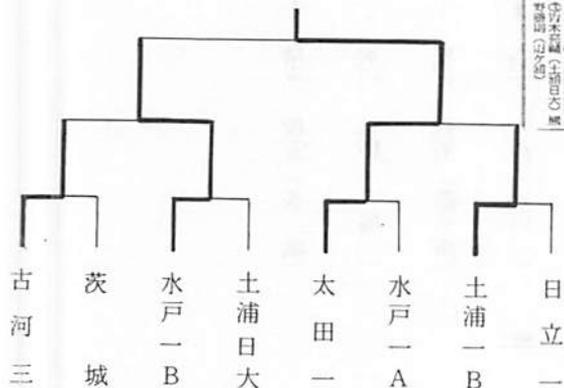
春季大会（第29回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦）

団体戦の県代表を決定するAトーナメントには、6高から8チームが参加したが、太田一高が、決勝で水戸一高Bチームを下し、昨年に続き、連続優勝を果たした。3位には、古河三高と土浦一高が入った。

また、個人戦代表を決めるAトーナメントは、10校から13名が参加したが、昨年同様、清水俊宏君（茨城高）と五反田洋君（多賀高）の間で決勝が行われ、清水俊宏君が見事に2連覇を果たした。3位には、熊野勝則君（霞ヶ浦高）と青木亮輔君（土日大高）が入った。個人戦Bトーナメントは13名が参加し、優勝は阿部直太君（竹園高）、準優勝は玉村嘉伸君（霞ヶ浦高）、個人戦Cトーナメントは15名が参加し、優勝は、宮澤信二君（土浦一高）、準優勝は俵谷由之君（土日大高）となった。

（団体戦A）

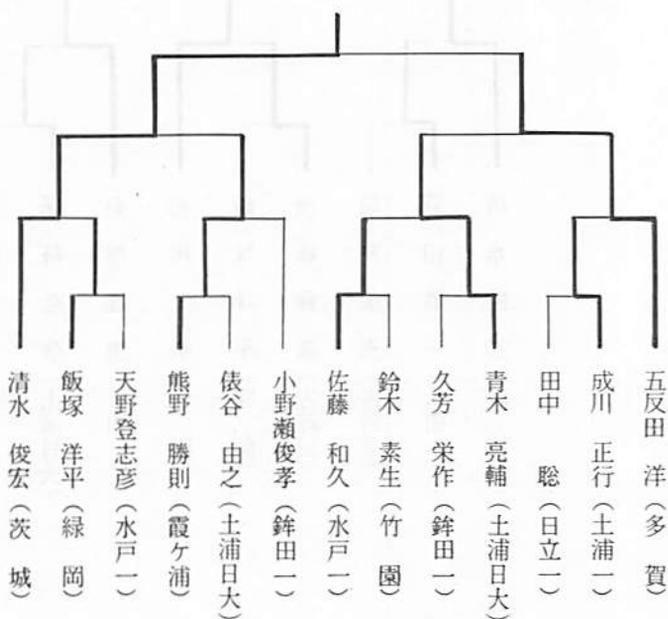
- 優勝：太田一高
- 準優勝：水戸一高B
- 三位：古河三高
- 同：土浦一高





(個人戦A)

- 優勝：清水俊宏（茨城）
- 準優勝：五反田洋（多賀）
- 三位：熊野勝則（霞ヶ浦）
- 同：青木亮輔（土浦日大）



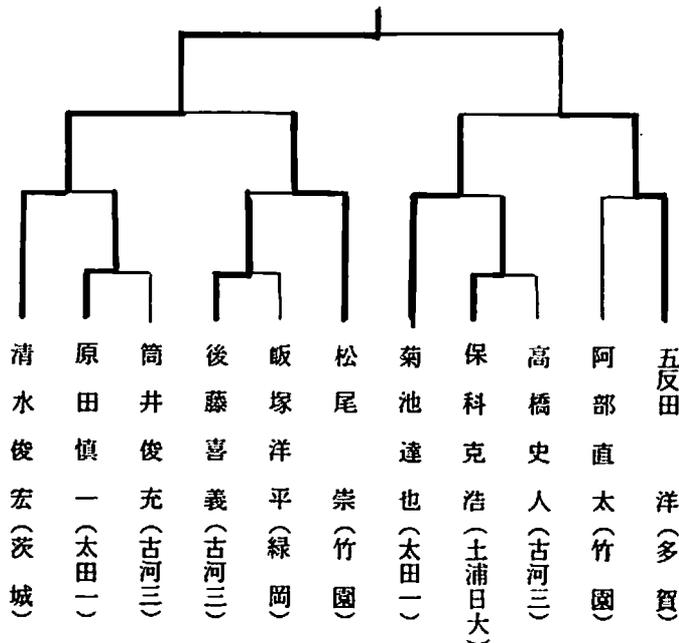
夏季大会（第6回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦）

7月22日に、県民文化センター分館において、総勢74名が参加し盛大に夏季大会が行われた。茨城県代表を決めるAトーナメントには、7校から実力者11名が参加し熱戦が展開された。決勝戦は先の春季大会個人戦同様、清水俊宏君（茨城高）と五反田洋君（多賀高）の間で行われたが、清水君が昨年準優勝の雪辱を果たし、見事、県代表の栄冠を勝ちとった。第3位には、竹園高の松尾崇君と太田一高の菊池達也君が入った。

20名が参加して行われたBトーナメント2組の優勝は戸部泰宏君（日立一高）、Cトーナメント優勝は藤沼広光君（明野高）であった。

（A級トーナメント）茨城県代表決定戦

- 優勝：清水 俊 宏（茨城高）
- 準優勝：五反田 洋（多賀高）
- 第三位：松 尾 崇（竹園高）
- 同：菊 池 達 也（太田一高）



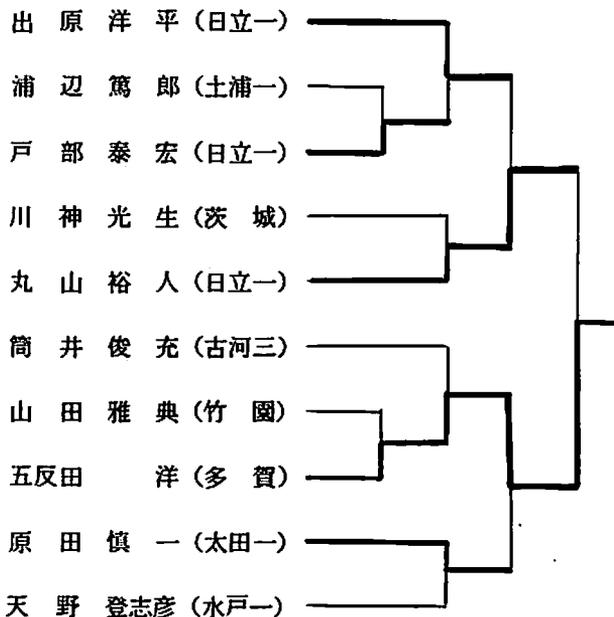
秋季大会（第4回関東高等学校将棋選手権大会兼第2回全国高等学校文化連盟将棋選手権大会茨城県代表決定戦）

上記2大会の県代表を決めるA級1組トーナメントには6高から10名が参加し熱戦が展開されたが、多賀高の五反田洋君が決勝戦で日立一高の丸山裕人君を下し、見事初優勝に輝いた。3位は、太田一高の原田慎一君、4位は日立一高の出原洋平君となり、2位までが、高文連大会の県代表、3位までが関東大会代表に選ばれた。

なお17名が参加したA級2組トーナメントは増渕章君（霞ヶ浦高）が優勝、15名が参加したB級1組トーナメントは百海浩二君（石岡一高）が優勝、15名参加のB級2組の①トーナメントは、高崎一俊君（石岡一高）が優勝、15名参加のB級2組の②トーナメントは沼田直人君（竜ヶ崎一高）が優勝した。

（A級1組）

- 優勝：五反田 洋（多賀高）
- 準優勝：丸山 裕人（日立一高）
- 三位：原田 慎一（太田一高）
- 四位：出原 洋平（日立一高）



〔平成6（1994）年度〕

《平成6年度茨城県高等学校将棋連盟役員》

会長	高梨保彦(太田一高)	監査	笹島三郎(茨城高)
副会長	矢須恵由(水戸商高)	同	広木伸守(石岡一高)
同	松実敏之(水城高)	幹事	原納優(水戸一高)
同	植田泰史(太田一高)	同	嶋崎収功(日立商高)
書記	後藤憲興(土浦日大高)	同	高須宏直(鉾田一高)
同	青木睦人(緑岡高)	理事	中根浩(石川)
会計	江幡収一(霞ヶ浦高)	顧問	天貝茂樹
同	越中理之(竜ヶ崎一高)		

春季大会(第30回全国高等学校将棋選手権大会茨城県代表決定戦)

恒例の全国高等学校将棋選手権大会が、6月10日、水戸市の水戸一高を会場にして開催された。団体戦の県代表を決定するAトーナメントには11チームが、Bトーナメントには9チームが、また個人戦Aトーナメントには15選手が、Bトーナメントには34選手が参加し、熱戦が展開された。

団体戦は強豪チームがなく混戦が予想されたが、水戸一高を2：1で下した太田一高(大森通明原田慎一、和田幸哉君)が余勢をかって優勝、団体戦では大会史上初の3連覇を果たした。個人戦では、多賀高五反田洋君(3年)が優勝し、初めて全国大会への出場権を手にした。実力のある1年生の中島啓君、沢谷悠至君、磯貝真一君などの台頭が目目された。

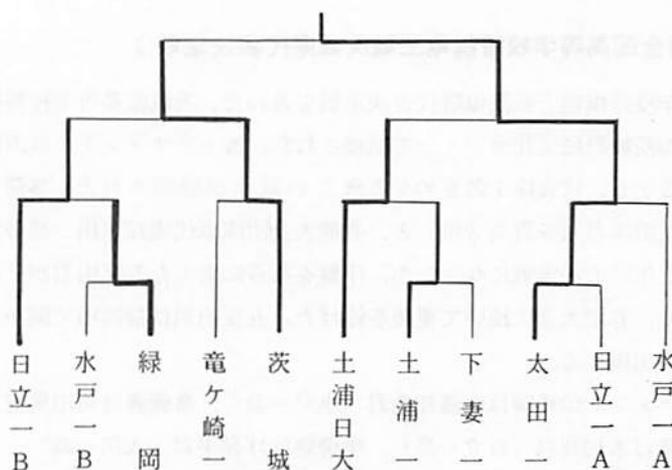
なお、団体Bの優勝は竜ヶ崎一高、準優勝は太田一高B、個人B1の優勝は藤沼広光君(明野高)準優勝は原田義行君(竹園高)であった。

(団体戦A)

優勝：太田一高
準優勝：茨城高
三位：日立一高B
同：土浦日大高



団体戦 A

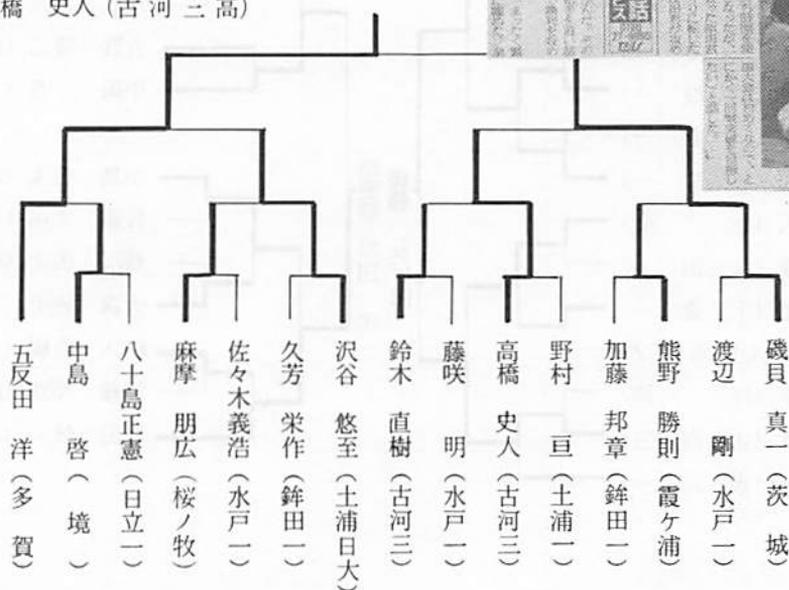


第30回徳島大会の
太田一高チーム
中央は森雜二九段



(個人戦 A)

- 優勝：五反田 洋 (多賀高)
 準優勝：磯貝 真一 (茨城高)
 三位：沢谷 悠至 (土浦日大)
 同：高橋 史人 (古河三高)



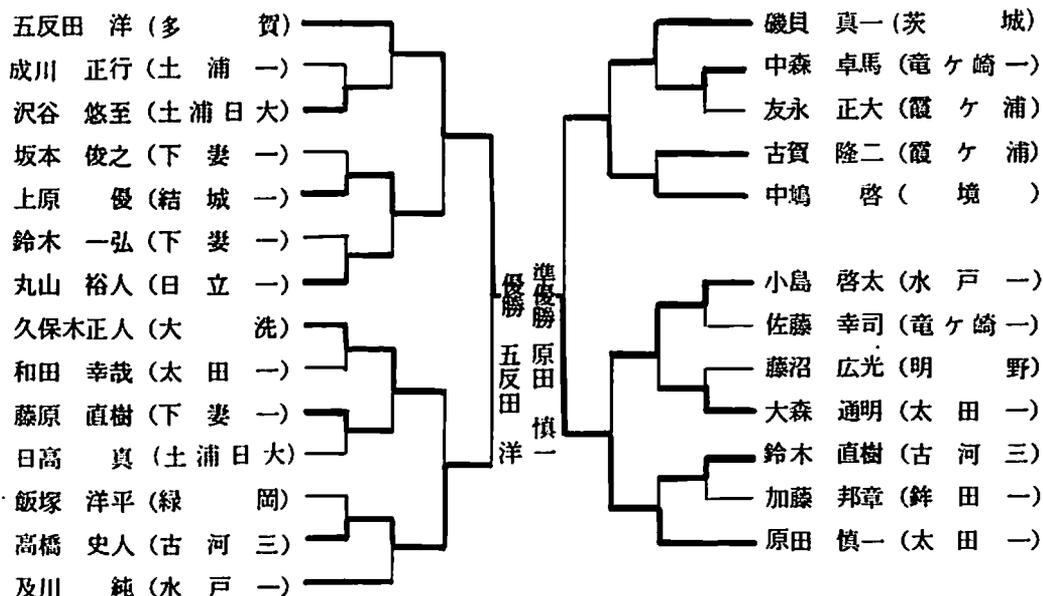
夏季大会（第7回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦）

第7回全国高等学校将棋竜王戦茨城県代表決定戦を兼ねた、茨城県高等学校将棋連盟夏季大会が7月28日、水戸市の茨城県民文化センターで開催された。Aトーナメントには本県高等学校将棋部の強豪選手26名が参加し、代表枠1名をめぐる激しい戦いが展開された。春期大会個人戦優勝者で第1シードの五反田洋君（多賀高3年）と、春期大会団体戦代表校太田一高の原田慎一君（第2シード、太田一高2年）の決定戦になったが、序盤を巧みに指した五反田君がそのまま優位を保持して、原田君を破り、春期大会に続いて優勝を遂げた。五反田君は福岡市で開かれる第7回全国高校将棋選手権大会に出場する。

なお、B1トーナメントの優勝は佐藤和久君（水戸一高）、準優勝は角田篤史君（緑岡高）、B2トーナメントの優勝は木村真君（日立一高）、準優勝は坪亮平君（太田一高）、B3トーナメント優勝は八十島正憲君（日立一高）、準優勝は櫻村優君（緑岡高）、Cトーナメント優勝は川田稔君（霞ヶ浦高）、準優勝は石川貴治君（太田一高）であった。

（A級トーナメント）

- 優勝：五反田 洋（多賀高）
- 準優勝：原田 慎一（太田一高）
- 三位：高橋 史人（古河三高）
- 同：中島 啓（境高）



秋季大会（第5回関東高等学校将棋選手権大会兼第3回全国高等学校文化連盟将棋選手権大会茨城県代表決定戦）

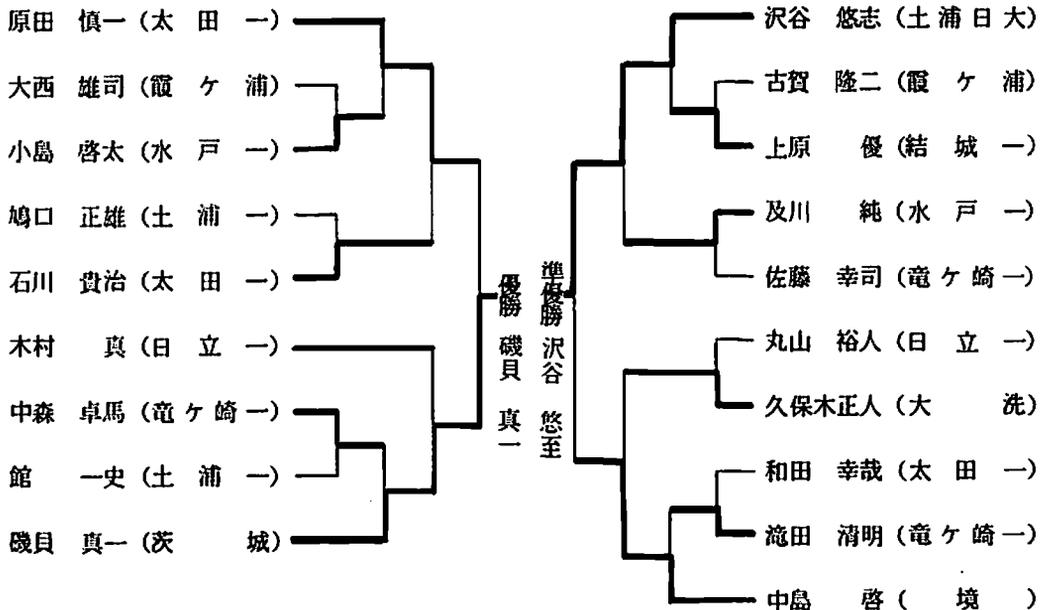
第5回関東高等学校将棋選手権大会と第3回全国高等学校文化連盟将棋選手権大会の茨城県代表決定戦を兼ねた、茨城県高等学校将棋連盟秋季大会が、11月17日、石岡市の石岡市民会館で開催された。春期大会に続き女子選手権が10名参加した。

男子トーナメントでは選手4名が順当に勝ち上がったが、1年生の磯貝真一君が優勝、準優勝は沢谷悠至君（土浦日大高）となった。男子の上位4選手（茨城高・磯貝、土浦日大高・沢谷、太田一高・原田、境高・中島君）は関東大会（於：神奈川県）に、上位2選手（磯貝、沢谷君）は全国高文連将棋選手権大会（於：神奈川県）の県代表となった。

女子部門では諸藤沙矢加さん（太田一高）が優勝した。準優勝は大森明子（日立商高）、3位は中山明子（太田一高）、4位は砂道香織（竜ヶ崎一高）さん。本年度より女子選手も全国高等学校文化連盟将棋選手権大会に参加することができることになり、上記4選手が茨城県代表になった。

（男子Aトーナメント）

- 優勝：磯貝 真一（茨 城）
- 準優勝：沢谷 悠至（土浦日大）
- 三 位：原田 慎一（太田一）
- 四 位：中島 啓（ 境 ）



栄光の選手たち

激戦の回想



栄光の選手たち

天 貝 茂 樹

茨高将連創立以来全国大会へ送り出した選手は相当な数に達する。現在は高校選手権大会以外にも、高校竜王戦と高文連大会と全国大会へ出場の機会は年に三度あるが、高校竜王戦が始まる以前の昭和年代には全国大会に出場する機会と言えば、高校選手権大会だけだった。女子選手は地区予選なしで全国大会に参加できるのでそれ程手間は懸からなかったが、男子の場合は団体戦でチームが失格しても個人成績無敗選手は個人戦編入を認めていたので中々面倒だった。全国大会出場の際の少ない選手にとって、自分より強い相手に破れるならば一応は納得できる敗退と考えたからである。この選抜方法は県代表決定戦の運営進行に当る役員の側にとっては大変複雑で、面倒だったが出場選手にとっては喜ばれたようだ。

ここで昭和62年以前、つまり高校竜王戦が未だ実施されない頃の、特に歴史に記録を留めるような活躍した選手をあげておく。茨高将連誕生の翌年、高校選手権大会の第12回大会から竜王戦の行なわれる前年の第23回大会まで12回の大会に本県から毎回団体戦3名、個人戦1名の計4名、延べにして48名の男子選手を全国大会に送り出しているが、2回以上出場を果たしている選手も居るから実数は30名と40名の間位の数だろう。しかし3回となると、土浦一高の小川明久(個人戦1回、団体戦で2回)と、水戸桜の牧高の田口拓也(個人戦3回)の2名を数えるのみである。

全国大会における活躍では何と言っても、第13回大会における結城二高が女子団体戦で第24回大会で土浦日大高の竹下めぐみが女子個人戦での優勝が光っている。幸運に恵まれた面はあっても、優勝はもともと実力と幸運がないと達成されないものである。堂々たる実績と言ってよい。

赫々たる女子の戦果に比べれば男子は不運もあって優勝はしていないが、土浦一高が第20回大会では団体戦第3位、翌第21回大会では団体戦準優勝の実績を残している。男子の棋力水準の高さを考慮すれば女子に劣らぬ健闘と讃えられるべきであろう。余談ながら第21回大会の県代表決定戦の優勝は緑岡高で、同校が出場を辞退したので県大会準優勝の土浦一高が繰り上げ出場し、茨城県準優勝の土浦一高が全国準優勝したのだから、優勝した

緑岡高が出場すれば優勝したかも知れないと冗談を言ったことがある。

その後も本県勢はよく健闘はしていたがベスト8進出は中々達成出来なかった。高校将棋選手権大会ではやや低迷気味であったが、昭和最後の秋となった昭和63年高校竜王戦が新設され、更に平成に入って高文連大会が始まると、第4回高校竜王戦で準優勝した徳永吉宏(水戸一高)、第1回高文連大会で第3位入賞の清水俊宏(茨城高)、第7回竜王戦第3位五反田洋(多賀高)、の強豪選手が輩出している。ただ全国大会のレベルも向上し上位入賞は難事に成ってきているようだ。後に続く本県勢の奮起を期待して止まない。

小生が茨高将連と直接関係したのは、茨高将連結成の準備委員会発起人となってから、公立学校を退職するまで足掛け17年である。我ながら良く辛抱できたと思う。出来たての頃は火元の一人として副会長を努めたのは致し方がないとは思ったが、自分自身としては時期を見て引退する予定だった。小生は将棋の愛好家は随分知っているが、大抵は指す方を楽しむ人が多く、会を運営したり他人の世話を焼く人は少ない。小生もその一人だった。それに小生の勤務校には将棋愛好生徒が少なく、張り合い抜けをした面もある。しかし理事会で辞意を表明してもなかなか受け入れられず、留任を薦めて下さる方が多く遂に長い期間副会長を努めさせて頂いた。有り難いご厚情である。感謝の他はない。小生の事務局長を兼務した副会長留任で一番迷惑したのは小生の勤務校の校長だったかも知れない。小生に懇願されて無理矢理連盟会長を引き受けさせられた面もあると推量される。しかも自分の学校の生徒には余り関係が無かったのは事実である。器量の小さい校長なら他校の為に働く教員は有り難くない存在として当り散らしたとしても不思議でない。だが小生の仕えた歴代会長は激励援助こそすれ、嫌な顔を見せたことはなかった。おかげで小生も何度かの挫折の危機を乗り越えて任務を遂行できた。

小生の退職に当り、日本将棋連盟から記念の金杯が贈られるようご尽力を下さった役員各位のご厚志に感謝いたします。

歴代会長はじめ、在任中にお世話になった諸先生方に心より御礼申し上げます。



草創期の頃と「その少年」

茨城県立水戸第二高等学校教頭 石川 禎 紀

水戸市見川小在校生の母親から、小学生の息子に将棋の指導を願いたい旨の電話連絡が水戸一高にあったのは、昭和51・2年頃だったろうか。

将棋同好会の生徒たちに話しても、だれも話にのってこない。のってこないはずである。あとにして思えば、生徒たちは「その少年」の名前と実力のほどを知っていたものらしい。名ばかりの顧問の私は断るしかない。のちに、その少年が先崎学という名で、米長八段の門に入り、見事な活躍ぶりを見せるに至るのは改めて言うまでもあるまい。瓜連町にはマッサキと読む同姓はあるが、青森県出身のセンザキと読む姓と知った。

茨城県高校将棋連盟が誕生して20年を迎えるという。会の設立には、天貝茂樹先生のお力が大きかった。その経緯は本誌の別稿で明らかにされると思うので、ここでは省略する。私は勤務先が市内というぐらゐのことで、かかわりを持つようになった。

第1回大会は水戸駅前の水戸信用金庫駅前支店の2階で開いた。小さな部屋に生徒たちをつめこんだのは、昭和51年の夏のことであったと思う。優勝は水戸一、長野県茅野市の昭和薬科大学での全国大会に臨んだが、1回戦で土佐高に敗れた。ときの審判長は大内延介八段だった。

近年、土浦一が大会決勝にまで進んだと聞くと、ずいぶん強くなったと思うし、また歴史の長さをもひとり実感する。

県大会も出場校が多くなるにつれて、無料貸与の会場を探し求めて苦勞した。水戸一や水城で夏休みの課外の合間をぬうようにして、実施したものである。先生方のお名前を一々あげる余裕はないが、日立一・日立商・大子一・山方商・常北・下館一・下妻一・古河三・竜ヶ崎一・土浦一・緑岡・水戸桜ノ牧・水戸一・水城等が常連として、女子では一時期ではあるが結城二があった。

同じ頃だったろうか、文化庁が全国の高校の将棋部顧問の先生方を対象に指導講座を実施したことがあった。今、手もとに当時の資料がないので、はっきりしないけれど、加藤治郎、原田泰夫、佐伯昌優といった高段者が来水し、ときわ荘(サンレイク水戸)などで開いたと記憶している。山口千嶺六段(水戸市酒門町出身)も来てくれたのは、この3年間のいずれかの時であったろう。

われらの将棋とならぶ囲碁のほうも、盛んだと聞く。二つは、いわば車の車輪のようなもの。お互いますます活発になれるように、といってもむろん将棋の方により応援の心をこめて、関係各位のご健闘を陰ながら祈るや切である。



茨高将連に携わって

下館一高 櫻井 操

インドで考案され、日本で育った知的なゲーム将棋が必修クラブという形で学校教育の中に取り入れられて久しい。ややもすると熱中すぎて勉強や仕事が手につかなくなるとか、将棋をやっていると親の死に目に会えないなどと言われて、将棋を指すことが世間からよく思われない面もあったが、必修クラブや部活動の一環として多くの学校で教育活動の中に将棋が組み込まれ、県大会や全国大会まで開催されるなど隔世の感があります。

茨城県高等学校将棋連盟(茨高将連)が発足したのが昭和50年(1975年)6月28日(土)ですから平成7年でちょうど20周年という区切りの年になります。関係各位のご尽力に敬意を表し感謝申し上げます。小生も茨高将連結成当時、古河三高在任中で非力ながらも役員を仰せつかったり、将棋部員を引き連れて県大会や全国大会にも参加させていただきました。茨高将連が発足する数年前から県大会が開かれていましたが、それは事務局の天貝茂樹先生や県南支部の平石晴一様の物心両面にわたるご援助があったため開催ができたもので、予算措置がなく参加生徒から参加費を徴収するという苦しい台所事情でありました。土浦市で開催されたため古河からは交通の便が悪く東北本線から上野経由で常盤線に乗り換え、大会に参加しました。

高将連発足当時は天貝先生を中心に規約づくりに苦心しました。団体戦出場者の中に強い者がいれば、チームとしては負けても個人戦への編入を認めるという茨城県独特のルールもありました。1日に6局も勝たなければならないという、棋力と体力が必要であり、30秒将棋という過酷な対局条件から大切な一局を逆転されるということもありましたし、珍事としては、

- ① 二歩を打ってしまった
- ② 駒が成れないところで成ってしまった
- ③ 桂馬が(囲碁の)大ゲイマに進んでしまった。
- ④ 王手がかかっているのに別の手を指してしまった。

など、いろいろありましたが

- ⑤ 盤上の駒を持駒として使ってしまった。

ということが一度ありました。盤の隅にあった香車が袖に触れたのか盤側に落ち、当人は何のためらいもなく持駒として打ったところ相手から指摘され、持駒だ！いや持駒に香車があるはずがない！という議論になって双方譲らない。決勝戦ならば棋譜もとるが棋譜も

ない。そこで初手から並べ直して裁定を下したことがあった。なかには指してしまった後相手の了解を得て待ったを許してもらうような高校生らしい、親睦優先の場面も見受けた。懐かしい高将連草創期でした。

初めて、全国大会に参加したのは昭和52年8月19～20日に長野県の昭和薬科大学で開かれた第13回大会に個人戦優勝の鈴木裕行君を引率したときです。大会前日の18日午後6時までに受付をするのですが台風にあつつかってしまい、中央本線が不通、その他の幹線もひどい遅れや運休が続出して大会出場は無理かと一時は考えました。最善策としてとったのが信越本線・小海線経由で行くことでした。鈍行並みの速さの満員の特急に乗り、ずいぶん遠回りをして午後8時過ぎに会場に着いたのを憶えています。疲れのせいか鈴木君はいい成績は残せませんでした。帰りには全国大会出場のごほうびとして昇仙峡などを案内しました。

茨高将連の常連は水戸一・土浦一・日立一・緑岡・古河三などの進学校ばかりで、ながら大学受験の前哨戦といった感じでした。現在は高文連の中の将棋部会ということで年々大会参加者も増加し、まことに喜ばしいことだと思っております。論理的思考力を伸ばすのに最適な将棋が益々盛んになるよう祈念いたします。

全国大会へ初出場

日立商業高校教諭 嶋崎 収 功

昭和五十二年に日立商業高校へ転勤となりました。本校では四十八年から正規のクラブ活動に将棋が採用されておりました。毎週一回必修科目として先生と生徒間の親睦を深めるのに役立っておりました。カリキュラムに組まれたクラブは二十七あり、そのなかでも書道・ペン習字の六十五人に次いで、二番目の人気で六十四人のクラブ員がいました。クラブの時間になると教室の中で駒を動かす音が響きわたり、生徒たちはしばし、“勝負の世界”に没頭していました。授業の進め方も将棋を指す心構えに力点をおき、物ごとを静かに考え、将棋を通じて知能・人格の育成に情熱を注げる環境でもありました。飯よりも将棋が好きで少しでも上達したいと熱意のある生徒もこの頃にはいました。就職者が九十%を占める本校では特技があることは強味でありました。

小生が赴任して二年後の昭和五十四年に遂に念願の幸運の暑い風が吹いてくれました。第十五回全国高校将棋選手権・茨城県代表決定戦が、七月二十四日に土浦市の土浦石岡地方社会教育センターに於て開催されました。

年々参加校が増えている同大会に十九高校、二十五チームが団体戦に出場しました。約百人の“棋士”たちが全国大会への出場権をかけて熱気のなか腕を競いあいました。本校からは団体戦に二年生ばかりの西野和志、杉本英樹、久須見泰正の三名が一組となり出場。一回戦は緑岡高と対戦し圧勝、二回戦は日立一高と地元同志の対戦、三回戦は土浦工業、そしていよいよ竜ヶ崎一高との決勝戦にまで進出。見事本校初優勝を成し遂げることができました。本大会二度目の出場で栄冠に輝いたことは、幸運にも恵まれ実力が発揮されて達成できたものであり、生徒諸君の健闘を誉め讃えました。持ち回りのトロフィーの重さを味わうことができました。

県代表となり、夏休みに日立市の西光寺へ生徒を連れて行きました。住職の方に有難い精神修養の説教を拝聴させる機会を与えました。

ついにその日が来ました。八月十六・七の両日東京都新宿区の東京海洋会館で行われる全国大会です。大会前夜に、大会名誉会長であられました大山康晴十五世名人の講話を拝聴でき感銘いたしました。当日は、各県代表者の熱気で盛り上りました。抽選で対局校は京都府代表の洛星高校と対局、全国大会のレベルは高く及びませんでした。来年の奮起を期待したものでした。

翌年には県代表には至らず準優勝、個人戦でも西野和志が準優勝を飾ってくれました。ここ数年は全盛の時期でありました。

《激戦の回想》

回 顧 録

昭和53年度県代表(茨城高等学校1年) 藤 崎 正 輝
現 茨城県立日立工業高等学校 教諭

年月のたつのは早いもので、十数年が過ぎようとしている。当時のことや、これからのことを含めて思いつくままに書いてみる。

高校入学時には、将棋部に入ろうと思ったがなかったので、しかたなく囲碁部に入部した。しかし、将棋の選手権にも出場したかったので事務室から公文書をいただいて、申込みをしたように思う。

選手権には個人戦で出場したが、単純なトーナメントではなく、団体戦からの編入制度があるため、少人数の割には6～7回勝ち抜かなければならず、たいへんな思いをしたような気がする。そのなかには、冷汗が出るような一局も拾わないと、逆にいえば全局力で押し切って勝つというわけにはいかない事が経験上言える。決勝もその一局で、解説が天貝先生で茨城新聞に掲載された。後で見ると、不可解な手もあるが、秒読みでギャラリーも多く、なんとなく雰囲気指してしまった気がしないでもない。

全国大会では、初戦に仙台育英の方と対戦したが、あまり実戦経験の少ない空中戦にしたのが失敗だったか。宿舎で同室だった方に武蔵高校から東大に進学し、現在では将棋の本を多数出版している金子タカシ氏もいた。

今の高校生は、選手権の他に、竜王戦や関東大会もでき、うらやましいかぎりである。ただ参加する生徒が少ないのが残念であるが、やはり高校生受けしないのであろうか。好きな生徒がいれば顧問になる気持ちは、いつでもあるのだが。当分の間は、同期の人たちがアマ県名人になっているので、がんばってみたいと思う。

最後に、高校将棋連盟の益々の繁栄を期待して筆を置きます。



将棋部活動の思い出

旧教員 齋藤 寿

結城二高が80周年を迎えるという便りを頂き、私が在職した昭和46年から9年間の記憶が、懐しくよみがえりました。離任式の後でその前月まで担任した級から教室に招かれ、心こもった送別会をして頂き感激したのが、つい先日の様です。

将棋部の思い出も格別のものがあります。昭和48年から将棋指導を始め、中核が出来てから同好会として発足し、後、必修クラブと将棋部に昇格させ、全国大会にも出場し、一度は団体優勝も果しました。

部活史の一頁として当時を回顧したいと思います。私は将棋を健全娯楽としてだけでなく、数学とよく似た思考教材の内容を持った、奥の深い道であり、人間形成のためにも採り入れたい要素を沢山具えていることから、クラブ活動に好適で、直ぐにでも始めたかったのが、48年になったわけです。私の理念は生徒にも伝わり、初めて将棋に接したのに、覚え、上達するのは速かった。私は二枚落ちで負かされたら、全国大会に名乗り出ようと決めていた。意外に早くその日が来た。日本将棋連盟大会参加の願いを出して、招待状が来るのを鶴首して待つ一方、本格的な稽古に入った。

一局もおろそかにせず、棋譜を取り、後で並べ直して研究反省を行った。こうして初参加の49年続く50年、51年の3年間は連続して団体戦3位、51年は個人戦で決定戦なしの同点3位と総て善戦…脇で観戦して中味の判る本物であり、何日か結城二高に金メダルの野心と自信を持たせる内容であった。そして52年の団体戦メンバー3人が、初めて連続出場者となり、遂に念願の優勝を果たしたのである。個人戦でも3位決定戦で圧勝した、価値ある銅メダルだった。4年間を通して結城二高生の勝っても負けても「有難うございました」と静かに一礼するマナーの良さは群を抜いていた。文部大臣賞には優勝の文字ではなく、「優秀として推薦されました。よって」と記憶しています。

女子団体戦に限っては全国どこも事情は同様…高校に入ってから初めて覚える…同じ条件でスタートするなら、頭脳の競技でも決してどこにも負けない素質を結城二高生は持っているのだと終りに強調して、これを学習面にも活かし、社会人となってからも頑張ってもらいたいと祈念します。

(「結城二高八十年史」より)

回 想

中山 拓也(旧姓、田口)

将棋の思い出は高校時代のことになります。

私は茨城県立水戸桜ノ牧高等学校の将棋クラブに属し、年に1回開かれる全国高等学校将棋選手権茨城県大会個人戦で3年連続優勝することが出来ました。この大会の決勝戦は観戦者がとても多く、指した将棋の棋譜が観戦記事入りで茨城新聞に掲載されると聞いていたので大変緊張したのを今でも良く覚えています。

そして高校卒業後に将棋のプロ棋士を職業にするため上京しました。プロ棋士にはなれず初段で挫折してしまいましたが、高校選手権大会で優勝できたことは学生時代のとても嬉しい思い出となって今でも心に残っています。

現在はソフトウェアを開発する会社に就職し、武道館で年2回開かれる職域団体対抗戦に参加して将棋を楽しんでいます。

最後になりますが将棋はとても面白いゲームなので、これからも多くの方に将棋を楽しんで頂きたいと願っています。

(水戸桜ノ牧高OB)

* 同君は第19～21回全国高校将棋茨城県大会(個人戦)で3年連続優勝の偉業を達成した。

県大会を振り返って

中 根 一 男

昭和59年度の県大会準決勝、対田口戦これは今でも忘れられません。

この対局は、序盤、中盤戦と私のペースで進み、なかなかの手ごたえがありましたが、終盤に入った所で、一手30秒の秒読み将棋になってしまった。

初めての秒読みということで、とまどってしまい、なにがなんだかわからないうちに形勢逆転となり、あっけなく終わってしまった。

今思うと、あのころは精神面の強弱が勝敗の明暗を分けたのではないかと思います。

参考までに、昭和61年度の大会では、なぜか対戦相手が最初からなげやりになっていたりと、又はそういう素振りが見えていました。

大会前には、私を意識しているような会話が、ごく一部ではありますが、かすかに聞こえてきました。

やはり、61年度の優勝は精神的に優位に立てたのが一番大きかったのではないかと思います。

(常総学院高OB)

* 第22回全国高校将棋茨城県大会(個人の部)で優勝

水戸一高将棋部の思い出

勝山良平

私が高校に入学して初めて将棋の大会に出場したのは早いものでもう7年も前のことになりました。中学生の大会では割合と妙成績を取っていたのですが、高校の大会ではどれだけ通用するのか、不安を感じながらの出場でした。

まずS62年の高校選手権に3年生の先輩2人と組んで団体戦に出場しました。準決勝まで勝ち進んだものの、残念ながらチームはそこで負けてしまいました。個人的にはまだ負けていないので、個人戦への編入がゆるされました。準決勝をなんとか勝ち抜き、いよいよ決勝。矢倉の難しい戦いだったのですが、中盤から優位に立ち、終盤もしっかり指せ、見事優勝することができました。今にして思えば、かなり雑な指し回しだったのですが、勢いがあったのでしょう。高校生らしい将棋、といえるかもしれません。

こうして全国大会へ出場したものの、一回戦で苦戦の将棋を粘って、もり返したとたんのトン死負け。どうも全国大会ではなかなか勝つことができませんでした。

S63年の高校選手権の時は、昨年チームを組んだ先輩達が卒業されてしまい心配していましたが、強い後輩が入学してくれて、チーム力を維持できました。この年は1年生・2年生・3年生の3人で結成した混成チームで臨みました。

3年生の先輩はやや不調だったものの、私と後輩はどんどんと勝ち進み、いよいよ決勝。相手は桜ノ牧高校でした。私の対戦相手の方は圧勝の連続で勝ち進んで来ていたので、かなりの強敵だと思いました。私はここで急戦矢倉を採用しました。中盤で私の攻めが炸裂し、終盤まで緩みなく攻め切ることができました。今になって見ても、私にこれといった悪手がなく、高校生としては上出来な将棋でした。チームも後輩の菊川君が勝ち、2-1で優勝。この年は団体戦で茨城県を制覇することができました。

全国大会では、一回戦を快勝し、なかなかいけるのではないかと思ったのもつかの間、二回戦で私は惨敗。チームも1-2で敗退してしまいました。帰りに当時完成したばかりの瀬戸大橋を見物したことを憶えています。

S63年の高校選手権では団体戦で出場してしまっただけで、個人戦での参加はならなかったのですが、この年より高校竜王戦が新設され、個人での全国大会出場が可能になり、うれしく思いました。

準決勝で土浦日大高の小町さんと対戦。小町さんの中飛車対私の居飛車穴熊という戦型になり、中盤からうまく指しまわし快勝することができました。

決勝は後輩の菊川君との対戦となりました。先輩の意地を見せなくてはならないと、かなり気合を入れて対局したように憶えています。戦型は菊川君の四間飛車に対し、やはり私の居飛車穴熊。気合のためでしょうか、私にはめずらしく序盤からうまく指せ、途中菊川君の失着もあり、快勝することができました。名誉ある第1回での優勝に、とてもうれしかったことを憶えています。

全国大会では、2回戦で負けてしまいました。私に勝った人が優勝し、私との対戦が一番苦しかったと話し、うれしいうまくやしいような気分でした。

(水戸一高OB)

＊ 第23回全国高校将棋選手権茨城県大会（個人の部）で優勝。

まさか優勝とは・・・

小 関 靖 治

将棋クラブ顧問の先生に、大会に出てみないかと誘われたのは三年のとき。大会にでるのは初めてだった。運がよければいいところまで行けると思っていたが、まさか優勝できるとは思っても見なかった。まさに驚異的ヒキの強さで、まるでドリセブJr.の『状態』に入ったかのように一気に決勝まで勝ち上がってしまった。決勝戦では四間飛車から速攻で攻めて来られて潰されそうになったが、まだ『状態』は続いていたのか、カウンターが見事に決まってあっさり優勝を決めることができた。まあ、運も実力のうちという言葉もあるのでこの時は私の実力だったのでしょう、多分。ちなみに、このときで運を使い果たしてしまったのか全国大会では一回戦で強豪奥本心氏と当たってしまい、矢倉で撃沈しました。

(境高OB)

＊ 第24回全国高校将棋選手権茨城県大会（個人の部）で優勝。

あの感動

竹 下 めぐみ

私は高校三年生の8月、個人戦で全国優勝をしました。今でも本当に自分が成し遂げたことなのか夢を見ているようです。

本当によく頑張ったなあ后感心します。

あの感動の全国優勝から早いもので、6年と4ヶ月が過ぎました。私は今も元気にプロを目指して将棋を続けています。育成会に入会して6年目。（今年半年休会したのは、歯科衛生士の仕事一つに集中したかったからです。）一つの事でも大変なのに、仕事と将棋の両立ができるほど私は器用ではありません。

私の夢は女流棋士になることだけでは満足せず、歯科衛生士の仕事と女流棋士を両立させることです。又は、女流名人になること、以上2つです。（欲張りかなとは思いますが、夢は大きい方が頑張り甲斐があると思っています。）現在は歯科衛生士の仕事が増えてきて遣り甲斐のある仕事だと改めて感じています。まだ勉強することは沢山ありますが頑張ります。

＊ 第24回全国高校将棋選手権大会女子個人優勝

(土浦日大OB)

信じられなかった優勝！

篠田 哲哉

決勝戦では、恥ずかしくない将棋を指そう、と思いました。戦型は、私の居飛車穴熊対井上氏の三間飛車でした。中盤の入口で氏の読みに誤算があったらしく、大差がつかました。しかし、そこから地力に勝る氏が徐々に差をつめ、終盤にヒヤッとした局面もありましたが、逆転には至らず、勝ち切ることができました。勝てるとは思っていなかったなので、優勝したなんて信じられない、といった心境でした。

また、全国大会では、敗れはしたものの、早咲氏と対局できさらに瀬戸先生にも指導対局をして頂きました。

これらの事が、つい先日の出来事のように思い出されます。高校時代の最高の思い出です。

(土浦一高OB)

＊ 第26回全国高校将棋選手権茨城県大会個人戦代表。

高校竜王戦が投げかけたもの

井上 耕史

1990年7月、高校3年の時の高校竜王戦茨城県大会で、私は土浦一高の篠田君と決勝戦を戦った。私が先手で、得意の三間飛車から気持ちよく捌いて最後は即詰みに討ち取っての快勝。この大会の一カ月前の全国選手権茨城県予選の個人戦決勝でも彼と対戦しており、その時はいいところなく負けていたから、この時の勝利はなおさら印象深い。

9月には茨城県代表として全国大会に参加したが、持ち時間切れで2局続けて負けて失格。不本意な成績で終わった。

とは言え、この全国大会は私への大きなプレゼントとなった。全国のレベルの高さを実感できたこと、大山・谷川・羽生・林葉らのトッププロによる記念対局・指導対局など…読売新聞社の竜王戦への意気込みを感じたものだ。

その一方、この大会は高校将棋界の現状について考えるきっかけにもなった。竜王戦全国大会のような恵まれた条件のものは極めて少ない。それゆえに、一部の高校生しか私のような経験を得て励まされることもない。こうした機会を得られるかどうかは、将棋人口の量質ともに大きな影響を及ぼすだろう。

私の地元古河市には将棋道場が見あたらず、小中学校時代にはほとんど独学であった。将棋部があると聞いて、古河三高に入学したものの休部状態となっていて、私と友人の二人が入部してやっと再開したものの、近隣の高校にも将棋部はなかったので、練習試合もできなかった。そうした恵

まれな条件下でも、みんな楽しみながら実力をつけてきたし、部員数も私が高三の時には12人まで増えるなど、部活動を充実したものにできたのはよかった。しかし、全体的なレベルで見れば、まだまだ低いものだったと思う。

県大会が年に2回、3回と増えてきたのは高校生にとってうれしいことだが、関係者と一部企業の努力に頼っている状態だから、日程・内容面でどうしても限界がでてしまう。もっと将棋を楽しみ、強くなりたいと思う人を支援する環境が必要だと思うのだが、残念ながら、貧困な文教政策のもと、そうした願いが実現するのはほど遠い状況だ。これは単に将棋だけの問題ではなく、日本の文化全体にいえることではないか。

(古河三高OB)

* 第3回全国将棋竜王戦茨城県大会優勝

将棋部の更なる飛躍を願って

石川 暁

将棋部は、校外大会に出場して事実上、部としての名乗りをあげてから9年、生徒会より部として認定されて7年の若い部である。しかし、この間、諸先輩の奮闘により、男子団体が県を制し、“将棋の甲子園”大会に出場すること三回(この回数は、三戸一高の四回に次ぐ二位タイで、新参者としては立派だと思う)、女子個人で竹下先輩が全国優勝するなど、県高校界屈指の強豪校として評価されるようになった。(「将棋部の歩み」)

これら諸先輩の築いてくれた伝統をなんとか守っていこうと頑張った3年間であった。

1年で、将棋の町・天童で開かれた全国大会に出場できて大変いい思い出になった。2回戦で那覇高校に快勝し(1回戦は不戦勝)、3回戦で松本深志高校と対戦した。これに勝てば悲願のベスト8進出であったが、大将戦で勝将棋を持時間の「切れ負け」で落したことが残念であった。

2年の秋季大会で県大表になり、第2回関東大会に出場できたのもいい思い出である。1回戦で埼玉県1位で慶応志木高校の網仲君に勝ち抜き、ベスト8になっただけでなく、県別対抗戦では9勝中、3勝を稼いで茨城県優勝に貢献できた。一緒に出場した他校の選手と交流できたのも収穫の1つであった。

心残りなのは、自分は先輩に鍛えていただいたが、後輩諸君への指導助言があまりできなかったことである。後輩諸君には、自分の時代に遅れをとった水戸一高に追いつき、“将棋の甲子園”最多出場のために頑張ってもらいたいと思う。

(土浦日大高OB)

高校将棋の思い出

菊池貴光

私にとって、高校三年間の将棋に関する思い出は、とても印象深いものばかりである。満足な結果を残せた時があれば、悔しい敗北を喫したこともある。自分としては、いつも優勝するつもりで大会に出場していたのだから、悔しい思い出の方が多くなるが、関東大会で三位になったことと、団体戦で県大会優勝したことは、今でも強烈に印象に残っている。

平成三年度の、関東大会茨城県予戦は、自分でも驚くぐらい調子が良く、水戸一高の桜田君や緑岡高の和知君などの強敵を倒し、決勝に進出することができた。決勝の相手は、太田一高の後輩の菊池達也だった。しかし、準決勝に進出した時点で関東大会出場が決まっていた為、決勝戦という意識はあまりなかった。更に、相手は、手の内を知りつくした仲間であるという事と、準決勝の快勝の余韻などが緊張感を奪い、あまり内容の良くない将棋で負けてしまった。だが、関東大会に出場できたという満足感の方が大きかった。

念願の関東大会では、一回戦、二回戦を快勝で突破し、準決勝に進出したが、勝てば決勝戦と欲がでて、集中力を欠き完敗してしまった。しかし、三位決定戦を熱戦の末制し、関東大会三位となることができた。県大会以上の大会で入賞したのは初めてだっただけに非常に嬉しかった。

また、第二十八回茨城県大会団体戦は、関東大会三位という結果を残した後だっただけに、周囲の期待も大きく、いつもよりもプレッシャーを感じていた。だが、大会当日、指手は冴え、勝利を重ねていった。準決勝で、最大の難敵、水戸一高に勝った時点で、私は優勝できると確信した。決勝は、準決勝の勢いを持続し、太田一高は、初の優勝と、全国大会への出場を決めることができた。自分の高校将棋での最大の目標が達成されただけに喜びもひとしおだった。

関東大会三位と、団体戦優勝という二つの勲章は今でも私の誇りである。特に、関東大会は、茨城県代表で三位という結果を残すだけに、いつまでも記憶に焼きついていくと思う。それと同時に、これらの結果に満足せず、研鑽を積み、更に大きな成果をあげられるよう努力していきたい。

(元太田一高将棋部主将)

* 第28・29回全国高校将棋選手権茨城県大会
(団体の部)二年連続優勝の中心メンバー。
第4回関東大会3位。



今後の課題と展望

茨城県高等学校将棋連盟規約他

《今後の課題と展望》

茨城県立水戸南高等学校長 矢 須 恵 由

1. 発足から今日までの成果と問題

- (1) 全国高等学校将棋選手権大会、全国高等学校将棋竜王戦、関東高等学校文化連盟将棋大会に代表選手を派遣し、一応の成果をあげてきた。しかし、振り返ってみて、なお一層の活躍と発展を期すための方策を講ずる必要がある。
- (2) 必修クラブ活動が義務づけられ、学校において将棋クラブが必修クラブの一つとして設置されたことが大きな契機になり、「茨城県高校将棋連盟」が結成されたことは、「20年の歩み」において、特筆すべきことであった。しかし、結成して20年が経過してなお加盟校が20校余りであることは、決して多数とは言えず、また、活発に活動していることにはならない。

2. 今後の課題と展望

「将棋」のおかれている現在の状況について考えてみると、高齢化社会・生涯学習の時代を迎え、人生を豊かに送ろうとする考えが浸透してきている。また、近年、将棋界における若手棋士の目ざましい活躍と女流棋士の躍進により、若い世代にも、そして、男性にも女性にも興味・関心が持たれるようになった。加えて、情報化の進展に伴い、コンピューターが普及し、将棋が一人でも楽しめる知的スポーツになると同時に、コンピューター通信を利用すれば、遠隔地の人も対戦を楽しむことさえ出来るようになった。将棋のあり方も時代と社会の変化とともに様変わりしている。

したがって、将棋愛好者にとって諸条件が整い、今後ますます取り組み易い環境になっているが、普通の生徒にとっても将棋を始めてみようとする動機や条件は十分に用意されていると言える。

そのような状況を踏まえ、今後の課題と展望を考えてみたい。

(1) 加盟校の増加と会員の増強を図る。

まず第一に「茨城県高等学校将棋連盟」のなお一層の飛躍を期すためには、加盟校と会員の増加を図り、裾野を広げることが急務である。このため、各校における将棋クラブ設置状況等に関する実態調査を実施し、その結果に基づいて対応策を講じてはどうか。

例えば、教員の出席を要請し、将棋そのものの研修やクラブのあり方等の研修をすることによって将棋に対する理解を深め、未設置の学校、女子校も対象として、新たな設置を促進するとともに既設の学校においては将棋クラブの活性化を推進すれば、将棋人口の増加につながると思われる。

(2) 棋力の向上と選手の強化を図る。

教員・生徒対象に将棋に関する研修会を開催することが効果的であろう。従来は、組織として公式な立場になかったため、授業時間数の確保等の見地から、通常日における研修会等の開

催は出来なかったのであるが、茨城県高等学校文化連盟が結成されたことにより、その一下部組織としての高校将棋連盟も活動し易い状況になった。そこで、大会の開催ばかりではなく、研修会を年間計画に盛り込むことが考えられる。これは、指導者の養成と将棋の上達を図る早道になると思われる。選手の強化についても同様なことが言えると思うが、この場合は、実力のある良き指導者を招聘することが不可欠である。

(3) 広報活動を推進する。

茨城県高等学校将棋連盟の活動については言うに及ばず、全国高等学校将棋連盟の動向等について情報を伝達することはもちろんであるが、高校将棋の現代的意義や位置づけ・普及の意味を周知させるPRもまた、さらなる飛躍を期すためには大切な要素になる。

それには、次のような視点が考えられる。

ア) 高校時代における将棋は、実践をとおして思考力を養うとともに円満な人間形成に大きな力になる。また、学習からの気分転換にも適し、多数の者が同時に実施でき、友達関係を結び易く、時間的にも経済的にも負担は大きくないのでクラブ活動として向いている。

イ) 将棋は健康的で、人間関係的であるので、高齢化・生涯学習の社会を迎え、余暇の活用と趣味向上の観点から、多くの人々に愛好されるものである。

ウ) 将棋は、日本の生んだ伝統的文化の一つで、後世に伝える価値があり、また継承する責任もある。それには、専門家だけに依存するのでは孤立してしまうので、市民参加の形が大切で、多くの市民に支えられてこそ、広がりのあるものにすることが出来る。

エ) 情報化時代にふさわしく、今や将棋もコンピューターで指すことが出来、知的スポーツの側面を持っているので、ひとり楽しむことも、コンピューター通信による未知の人との対戦も出来、生活を豊かにする有効な手段となっている。

オ) 国際化時代に入り、日本の誇れる文化を諸外国の人々に理解してもらい、普及させることにより、日本理解や国際親善に役立たせることが出来る。

(4) 予算の増加を図る努力をする。

現在、予算的に厳しい状況にあり、新たに研修会等を開催して連盟の充実を期すためには、予算の裏付けが必要になる。そのための努力が必要である。よき理解者、よき支援者の出現が期待される場所である。

以上のような展望に立ち、課題解決に向けて一歩踏み出すことが、ここに「20年の歩み」を作成した意義であろう。

茨城県高等学校将棋連盟規約

第1条 本連盟は茨城県高等学校将棋連盟と称する。

第2条 本連盟は事務局を理事会で指定した学校に置く。

第3条 本連盟は茨城県高等学校文化連盟に所属し、教育の一環として、知能・人格の育成を目指し、将棋の普及と健全な発達を図り、あわせて指導者の育成、技術の向上に寄与するを目的とする。

第4条 本連盟は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 茨城県高等学校生徒将棋大会の開催
2. 指導者研修会ならびに教職員将棋大会の開催
3. その他連盟の目的達成のための必要な事業

第5条 本連盟は、茨城県内の高等学校将棋部員、将棋部担当教師およびこれに準ずるものを以て組織する。

第6条 本連盟には次の役員をおく。

会長 1 名 副会長 2 名 顧問 若干名 幹事 若干名
監査 2 名 書記 2 名 会計 2 名

第7条 会長、副会長、幹事、監査は理事会で選出し、顧問は理事会で推戴する。理事は各校で1～2名選出、書記、会計は会長が委嘱する。

第8条 役員の仕事は下記のとおりとする。

1. 会長は本連盟を総括し、会務の推進にあたる。
2. 副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは代行する。
3. 幹事は本連盟の企画、運営にあたる。
4. 監査は会計監査をする。
5. 理事は各学校を代表する。
6. 書記は理事会の議事、その他の記録をし、会合の連絡にあたる。
7. 会計は会計事務を担当する。

第9条 役員の仕事は1年とし、再任を妨げない。

第10条 本連盟の運営費は必要に応じて徴収する。

第11条 理事会は必要に応じて開くことができる。

第12条 本連盟の規約の改正は理事会の決議による。

第13条 本連盟の会計年度は4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第14条 本規約は昭和50年11月23日より施行する。

関東地区高等学校文化連盟将棋部会則

第1章 総 則

(名 称)

第1条 本部会は、関東地区高等学校文化連盟将棋部会と称する。

第2条 本部会の事務局を、会長所在の都県に置く。

(目 的)

第3条 本部会は、全国高等学校文化連盟規約第3条に則り、高等学校において将棋を通じて生徒の人格形成を図り、あわせて技術の向上と将棋の発展と振興に資する事を目的とする。

(事 業)

第4条 本部会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

- (1) 関東高等学校将棋選手権大会。
- (2) その他、本部会において必要と認める事業。

(組 織)

第5条 本部会は関東地区各都県高等学校文化連盟将棋部会をもって組織する。

第2章 役 員

(役 員)

第6条 本部会に次の役員を置く。

- | | |
|-------------|-------|
| (1) 会 長 | 1 名 |
| (2) 副 会 長 | 若干名 |
| (3) 理 事 | 各都県2名 |
| (4) 事 務 局 長 | 1 名 |
| (5) 監 事 | 1 名 |

(役員の選出)

第7条 役員を選出は、次のとおりとする。

- 1.(1) 会長および副会長は、本部会理事会で決定する。
- (2) 理事は、第5条に掲げる各都県高等学校組織の代表をもってあてる。
2. 役員の高任はこれを妨げない。

(役員の仕事)

第8条 役員の仕事は次のとおりとする。

- (1) 会長は、本部会を代表し、部会の仕事を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長不在の時はその仕事を代行する。
- (3) 理事は、本部会の仕事を審議し執行する。
- (4) 事務局長は仕事を執行する。

(役員任期)

- 第9条 (1) 役員任期は1年とする。ただし再任を妨げない。
- (2) 役員に欠員が生じた時は、必要により補充する。ただし、任期は前任者の残任期間とする。
- (3) 役員辞任、または任期満了の場合においても、後任のものが就任するまでは、その職務を行うものとする。

第3章 会 議

(会 議)

第10条 本部会に次の会議を置き、会長が必要に応じてこれを招集する。

(1) 理事会

- イ) 理事会の議長は部会長がこれにあたる。
- ロ) 理事会の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数の場合は、会長がこれを決定する。

(2) 関東高等学校将棋選手権大会実行委員会

(理事会)

第11条 理事会は、次の事項を審議決定する。

- (1) 本部会の運営、執行に関する事項を審議する。
- (2) その他、必要な事項を審議する。

第4章 事 務 局

(事務局)

第12条 本部会の事務を処理するため、事務局を置く。

第5章 雑 則

第13条 この会則の変更は、理事会の議決により改定することができる。

附則 この会則は、平成2年10月8日から施行する。

(改定 平成2年10月31日)

第6章 会 計

(経 費)

第14条 本部会の経費は、各加盟専門部会の会費、補助金、寄付、その他の収入をもって充てる。

(予算、決算)

第15条 本部会の予算は、理事会で決定し、決算は、会計年度終了後、監査を経て次の理事会で承認を得なければならない。

(会計年度)

第16条 本部会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年の3月31日に終わる。

(会計経理)

第17条 本部会の会計経理は、理事会の審議を経て、事務局が行う。

附則 会則に第6章の4条項を追加し、平成2年10月31日より施行する。

附則 第6条に(5)を追加し、平成2年10月31日より施行する。

全国高等学校文化連盟将棋部会会則

第一章 総 則

(名 称)

第1条 本部会は、全国高等学校文化連盟将棋部会と称する。

第2条 本部会の事務局を、部会長所在の都道府県に置く。

(目 的)

第3条 本部会は、全国高等学校文化連盟規約第3条に則り、高等学校において将棋を通じて生徒の人格形成をはかり、併せて技術の向上と将棋の発展と振興に資することを目的とする。

(事 業)

第4条 本部会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

(1) 全国高等学校将棋大会及び各地域・各都道府県高等学校将棋大会

(2) その他、本部会において必要と認める事業

2. 事業のうち大会等に関しては、理事会の議を得て規約あるいは要項を定める。

(組 織)

第5条 本部会は、各都道府県高等学校文化連盟（高文連等）将棋部会及び各都道府県高等学校将棋連盟等の将棋団体に加盟する各高等学校の将棋部（研究会、同好会等）をもって組織する。

2. 各都道府県の将棋団体（部、研究会、同好会等）は、それぞれの地域ごとに連合体を組織することができる。

第二章 役 員

(役 員)

第6条 本部会に次の役員を置く。

(1) 部 会 長 1名

(2) 副 部 会 長 2名

(3) 常 任 理 事 9名以内

(4) 理 事 47名以内

(5) 事 務 局 長 1名

(6) 事 務 局 次 長 1名

2. 監 事 2名

3. 顧 問 若干名

(役員の選出)

第7条 役員を選出は、次のとおりとする。

(1) 部会長及び副部会長は、本部会理事会の推薦に基づき、全国高等学校文化連盟会長が委嘱する。

- (2) 常任理事は、各地域の代表者をもってあてる。
 - (3) 理事は、第5条に掲げる各都道府県高等学校組織の代表をもってあてる。
 - (4) 事務局長、事務局次長は、部会長が委嘱する。
 - (5) 監事は、理事会の推薦に基づき、部会長が委嘱する。
 - (6) 顧問は、理事会の推薦に基づき、部会長が委嘱する。
2. 役員の重任は妨げない。

(役員の職務)

第8条 役員の職務は次のとおりとする。

- (1) 部会長は、本部会を代表し、部会の会務を統括する。
- (2) 副部会長は、部会長を補佐し、部会長不在の時はその職務を代行する。
- (3) 常任理事は常任理事会に出席し、審議する。
- (4) 理事は、本部会の会務を審議し執行する。
- (5) 事務局長、事務局次長は、本部会の会務及び会計にあたる。
- (6) 監事は会計を監査する。
- (7) 顧問は部会長の諮問に応ずる。

(役員の任期)

第9条 役員の任期は2年とする。ただし再任を妨げない。

2. 役員に欠員が生じた時は、必要により補充する。ただし、任期は前任者の残任期間とする。
3. 役員の辞任、または任期満了の場合においても、後任のものが就任するまでは、その職務を行うものとする。

第三章 会 議

(会 議)

第10条 本部会に次の会議を置き、部会長が必要に応じてこれを招集する。

- (1) 常任理事会
 - (2) 理事会
2. 会議の議長は、部会長がこれにあたる。
 3. 会議の議事は、出席者の過半数をもって決し、可否同数の時は議長がこれを決定する。
 4. 会議は、構成員の2分1以上の出席がなければ開会することができない。やむを得ない理由のため、会議に出席できない構成員は、他の構成員を代理人として表決を委任することができる。

(常任理事会及び理事会)

第11条 常任理事会及び理事会は、次の事項を審議決定する。

- (1) 常任理事会は、部会長から委任された事項を審議する。
- (2) 理事会は、本部会の運営、執行に関する事項を審議する。
- (3) その他、重要な事項を審議する。

第四章 会 計

(経 費)

第12条 本部会の経費は、全国高等学校文化連盟の予算、部会費、寄付金及び協賛金、その他の収入をもってあてる。部会費は1万円とする。

(予算・決算)

第13条 本部会の収支予算は、理事会の議決により定め、収支決算は、会計年度終了後、監査を経て次の理事会で承認を得なければならない。

(会計年度)

第14条 本部会の会計年度は、4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

(会計経理)

第15条 本部会の会計経理は、理事会の議を経て、事務局会計が行う。

第五章 事 務 局

(事務局)

第16条 本部会の事務を処理するため、事務局を置く。

(運 営)

第17条 事務局の運営に関しては、理事会の議を経て部会長が定める。

第六章 雑 則

第18条 この会則は、理事会の議決によらなければ変更することはできない。

第19条 本部会の会則の施行についての必要な事項な事項は、理事会の議決を経て別に定める。

附 則

1. この会則は、昭和63年6月1日から施行する。

編 集 後 記

将棋を愛好していた教員を核に、茨城県高校将棋連盟が設立されてから、早いもので20年もの歳月が流れました。小雨の降る昭和50年11月23日の勤労感謝の日、NHKのテレビ将棋の名解説と著書で高名な加藤治郎八段が水戸市においてになり、御講話の後、参会者に駒落ちの三面指しの御指導をしてくださったことが、つい昨日のように懐かしく思い起こされてきます。あの日は、会の設立を喜ぶ誰しもが、酒肴一つない会場を去りがたく、5時の閉館過ぎまで将棋の夢を語り合ったものでした。

当日のことを知っている現職の連盟幹事も数少なくなりました。若輩で、将棋の一愛好者に過ぎなかった自分が、20年の歳月を隔てて、編集後記のためにワープロの前に座ることとなるとは、当時は夢想だにできないことでした。

本書「茨城県高等学校将棋連盟20年の歩み」の編纂の第一歩が踏み出されたのは、平成6年の第一回理事会でのことです。本連盟の創立に関わり、その後一貫して本県高校将棋発展のため尽力された天貝茂樹先生(本連盟元副会長)が、現職の高校教員の地位から退かれましたが、それは私どもにとっては、いわば「生き字引」を失うに等しいことでした。天貝先生の現役引退が契機となり、誰からの発議ということではありませんでしたが、高等学校将棋連盟20年史を編纂しようということになり、全員一致の形で編集委員会が設けられました。

直面した二つの問題は、史料をいかに発掘するか、財源をいかに捻出するかということでした。前者の問題は、天貝茂樹氏のもとにかなりの史料があり、さらに桜井操氏の史料や各高等学校の保存史料でそれを補うことができました。財源の確保が一番苦しんだ問題でしたが、本連盟会長高梨保彦先生が奔走し、各校理事の協力もあり、民間の有意の方々の快い御協力を頂戴いたしました。

編集業務は、公務の合間を縫う厳しい仕事でありましたが、最後まで多くの編集委員の協力が継続され、平成7年1月末に脱稿できました。この間多くの方々から原稿をお寄せいただき、激励の言葉を頂戴しました。日本将棋連盟元会長原田泰夫先生からは、題字・色紙・エッセーをお寄せいただきました。

この一年間、編集の実務を担当したのは、高梨保彦(太田一高校長)・矢須恵由(水戸南高校長)・松実敏之(水城高校)・植田泰史(太田一高)・深井沢駿一(日立一高)・嶋崎収功(日立商高)・香柳章(山方商高)・奈良惇・原内優(水戸一高)・青木睦人(緑岡高校)・仲田米蔵・石川ふみ子(水戸桜ノ牧高)・笹島三郎(茨城高)・高須宏直(鉾田一高)・飯島良夫(土浦一高)・広木伸守(石岡一高)・越中理之(竜ヶ崎一高)・後藤憲興(土浦日大高)・江幡収一(霞ヶ浦高)・黒田威博(竹園高)・桜井操(下館一高)・深谷浩一(明野高)・石山巖(古河三高)・串戸裕(境高)でした。

本書を、高校将棋をこよなく愛した幾多の青年にささげます。国際化時代にふさわしく、日本将棋が日本人のみならず、世界各地の人々に愛好される日の来ることを願いつつ…。

(文責・植田泰史)